

溝 26 (第 95 図)

調査区北側、C 1 グリッドの南東隅に位置する溝状遺構である。付近には西側 1 m の位置に波板状凹凸遺構が見られ、締りの強い暗灰褐色土を埋土にするなど共通する点は認められるが、波板状凹凸遺構とは連続しないことからここでは別遺構として扱った。

向きは東西方向で、長さ 58cm、幅 25cm、深さ 4 cm である。

本遺構からは出土遺物は認められなかったが、遺構の確認層位から 9 世紀ころと考えられる。

(野口)

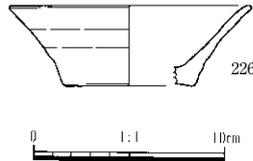
溝 27 (第 93・96 図)

C 2 グリッド北側に位置する。東西方向に走向すると思われるが、西側は試掘調査時のトレンチによって壊されている。確認された範囲では長さ 36cm、幅 30cm、深さ 4 cm と遺存状況は良くない。埋土には暗褐色土が堆積するが、試掘トレンチを挟んだ西側には同じ色調の埋土の溝 24 が位置し、一連の遺構の可能性はある。

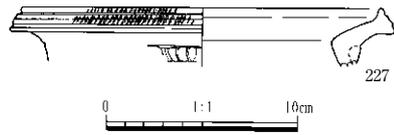
埋土中からは土師器坏 225 が出土する。底部の破片であるが、前述の溝 24 出土土師器同様、底部に糸切り痕は見られず、ヘラ切りによる切り離しであったと思われる。体部の調整は回転ナデである。

本遺構の時期は、出土土器や関連すると思われる溝 24 の年代から、9 世紀ころと考えられる。

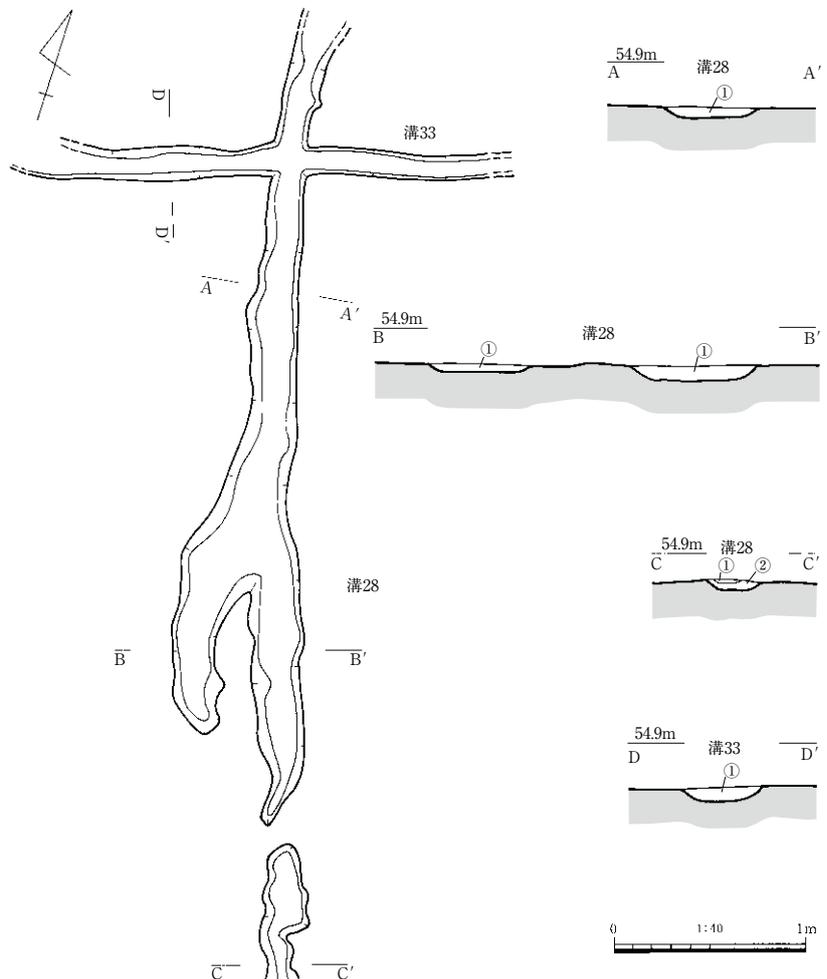
(野口)



第97図 溝28出土遺物



第98図 溝33出土遺物



第99図 溝28・33

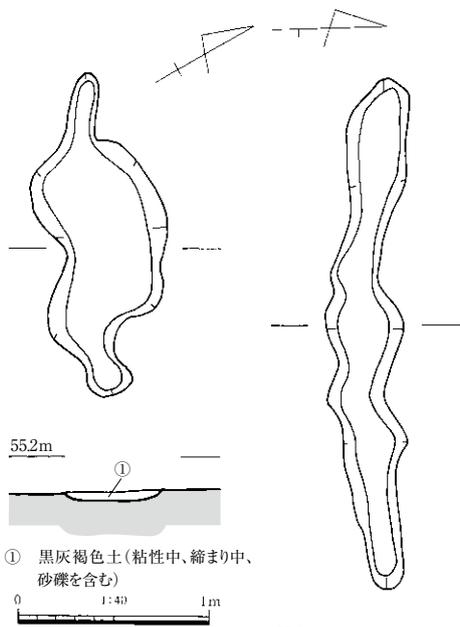
溝 28・33 (第 97～99 図、図版8)

調査区東側に位置する溝状遺構である。溝28はD 1～F 1 グリッドにかけて、N-14°-Wの方角で南北に走向する。北側へはさらに延長するが、E 1 グリッド調査時では認識することができなかった。また中央部付近では長さ2.5m

ほどの溝が西側に位置し、2条となる。溝33はD 1・2グリッドにかけて、E-14°-Nの方角で東西に走向する。溝33も東西にさらに延長するが、東側は調査区外に伸び、西側はE 2グリッド調査時では認識することはできなかった。両者はE 1グリッドで直交する。

規模は確認できた範囲で、溝 28 が長さ約 15.4 m、幅 35 ~ 73cm、深さ 7 cmを測り、中央部分に接続する溝もほぼ同規模のものである。溝 33 が長さ 6.1 m、幅 30 ~ 45cm、深さ 6 cmを測る。溝底面の標高は、溝 33 の西端が 54.60cmのほかは、溝 33 東端、溝 28 南北端が 54.56 mと西から東にかけてわずかに傾斜するもののほぼ平坦である。埋土は、溝 28・33 とも、小礫を多く含んだ黒色土の堆積であったが、部分的に黒色砂質土が堆積する。

出土遺物には、溝 33 で下層から巻き上げられた弥生土器の甕口縁部 227 が出土し、溝 28 から回転ナデによる調整が施された土師器坏 226 が出土する。底部には糸切り痕は認められないが、形態から 10 世紀ころのものと思われる。本遺構の時期も出土遺物から 10 世紀以降の時期が考えられる。(野口)

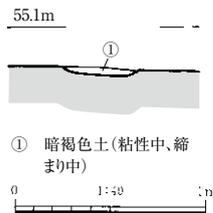


第100図 溝29

溝 29 (第 100 図、図版8)

F 2グリッド北側で位置し、北西-南東方向に走行する。平面形は両端に比べ中央部分が膨らみ不整である。確認面での規模は、長さ 1.7 m、幅 14 ~ 62cm、深さ 5 cmを測る。遺構底面両端の標高は 54.96 mと比高差は見られない。埋土は砂礫を含んだ黒灰褐色土で、2 mほど北側に位置する溝 31 と近いが、関連性については不明である。

本遺構の時期は、確認される層位から 9 世紀ころと考えられる。(野口)

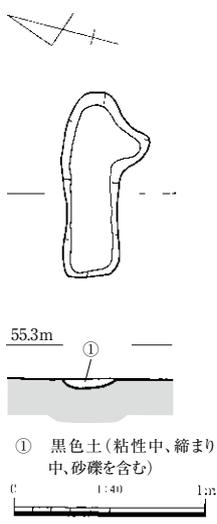


第101図 溝30

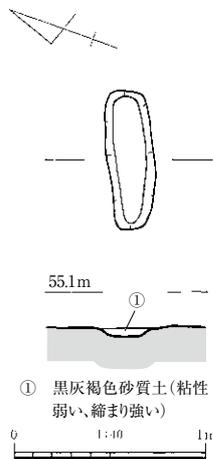
溝 30 (第 101 図、図版8)

E・F 2グリッドの境界に位置する溝状遺構で、東西方向に走向する。確認面での規模は、長さ 2.7 m、幅 19 ~ 40 cm、深さ 3 cmを測る。遺構底面西端の標高は 54.88 m、東端は 54.84 mとわずかではあるが、西に比べ東側が低い。埋土は暗褐色土が堆積するが、周辺で確認される溝 29・31 とは土質を異にする。

本遺構の時期は、確認される層位から 9 世紀ころと考えられる。(野口)



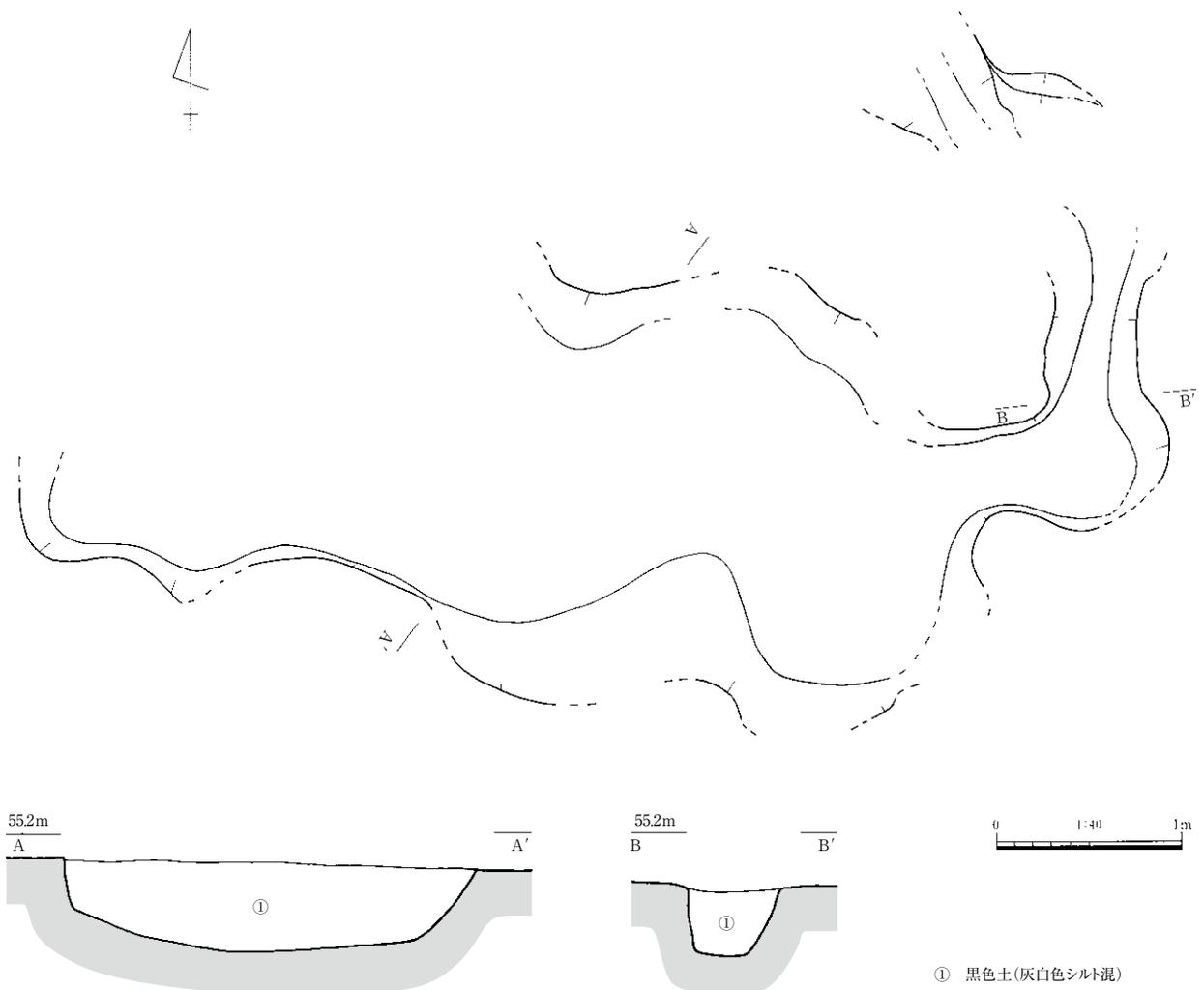
第102図 溝32



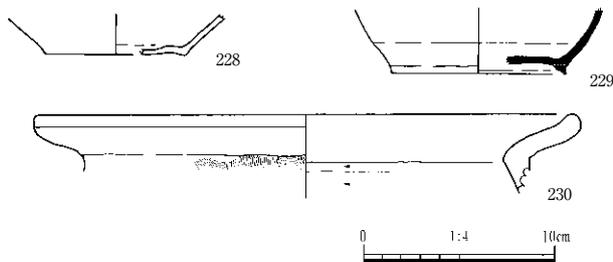
第103図 溝31

溝 31 (第 103 図、図版8)

E 2グリッド南西隅で確認された東西方向に走向する溝状遺構である。確認面での規模は、長さ 74cm、幅 26cm、深さ 4 cmと遺存状況は良くない。遺構底面両端の標高は 54.86 mと比



第104図 溝34



第105図 溝34出土遺物

溝 32 (第 102 図)

F 1 グリッド南西隅に位置する。走向は東西方向である。確認面での規模は、長さ 98cm、幅 28～44cm、深さ 4cm と遺存状況は良くない。遺構底面西端の標高は 55.10 m、東端は 55.04 m と西から東に向かい若干傾斜が見られ、砂礫を含んだ黒色土を埋土とする。

本遺構の時期は、確認される層位から 9 世紀ころと考えられる。

(野口)

溝 34 (第 104・105 図)

C 4・5 グリッドに位置する。整地層除去後、V 層上面において検出した。本遺構西側は東西方向に軸をとり、東側では北に走向する。本遺構は調査区外に延び全長は不明であるが、検出した長さは約 8.8 m である。検出面での幅は 0.45～2.44 m、検出面からの深さは西端 10cm、北端 28cm である。

底面の標高は西端 54.66 m、北端 54.46 mであり、比高差が 20cmある。断面形は逆台形を呈す。埋土は黒色土を主体とし、灰白色シルトがラミナ状に混入する。埋土の体積状況から判断して、溝内は流水の環境下におかれていた可能性が高い。

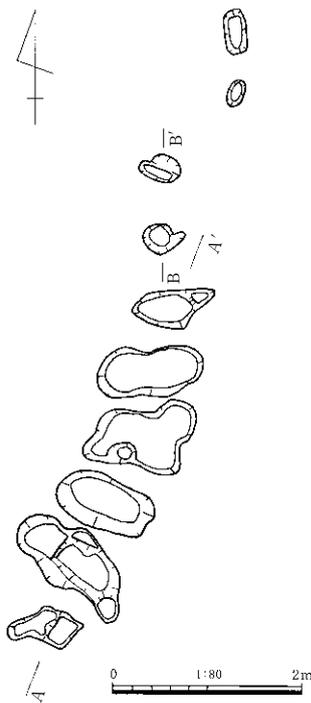
埋土中から 228 ～ 230 の土器が出土した。228 は土師器坏で、内外面回転ナデ調整、須恵器高台坏 229 は底部回転糸切りによる切り離し痕跡が認められる。

本遺構の時期は出土遺物より判断し、9 世紀後半～ 10 世紀頃と思われる。(森本)

波板状凹凸遺構 (第 106 ～ 108 図、図版 9)

調査区北側、C 1 グリッドで溝状、及びピット状の凹凸を検出した。溝・ピット状の凹凸は、その北半部で南北方向に連なり、南半部で若干西に振って連なる。凹凸は北側のものは浅く、遺存状況は良くないが、さらに北側に展開すると思われる。

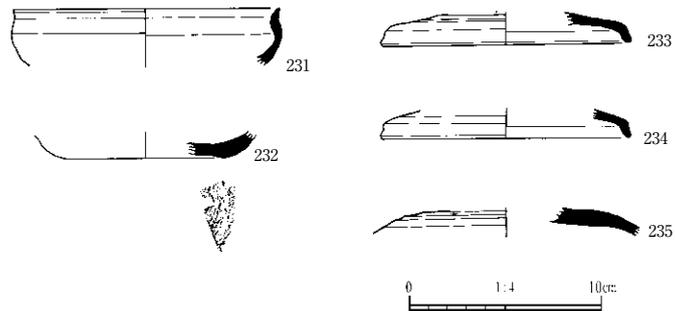
確認された範囲では、凹凸の範囲は南北に 7 m のび、幅は最大で 1.4 m を測る。深さ 4 ～ 14 cm で南半部のものが深い。埋土は、凹凸 2 つに暗褐色土が認められるほかは、小礫を含んだ暗灰褐色土が堆積する。



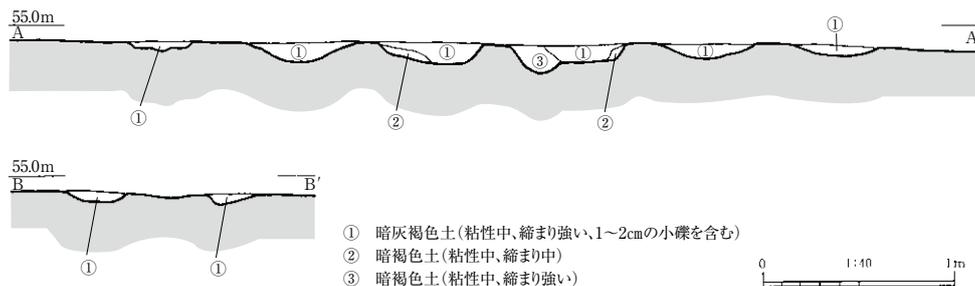
第106図 波板状凹凸遺構

波板状凹凸遺構は、従前の調査・研究では、道路遺構との関連性が指摘される。本遺構の調査では、硬化面等、道路遺構と積極的に関連付ける痕跡は認められなかったが、遺構埋土である暗灰褐色土は締まった状態であった。

本遺構からは出土遺物に須恵器坏、蓋坏 231 ～ 235 が出土する。231 は口縁下端部をくびれさせた山陰地方にみられる形態のもので、232 も同形の底部片と思われる。さて本遺構の時期は、出土遺物はいずれも奈良時代に属する須恵器と考えられるが、遺構が確認される層位より 9 世紀ころと考えられる。(野口)

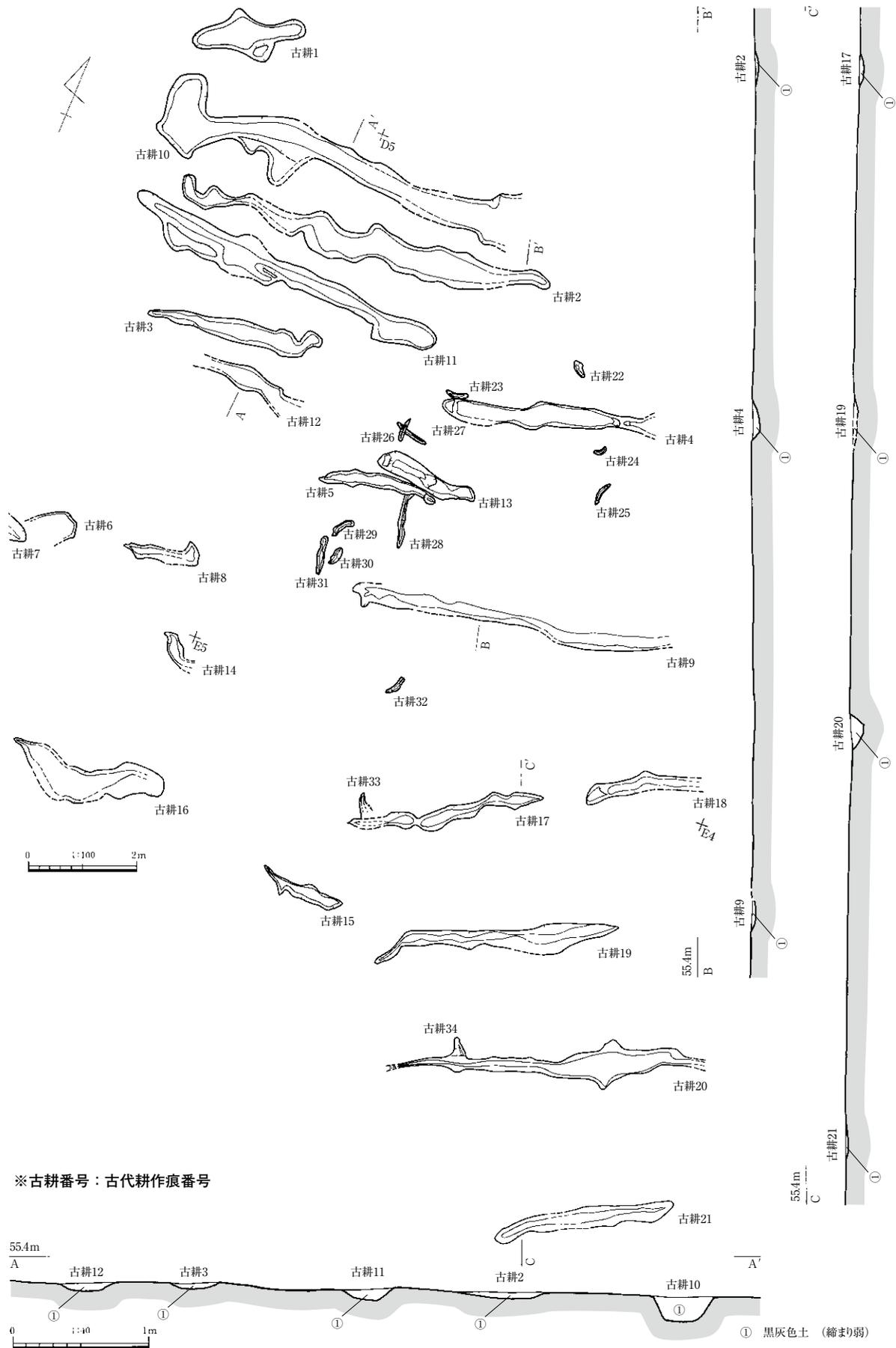


第107図 波板状凹凸遺構出土遺物

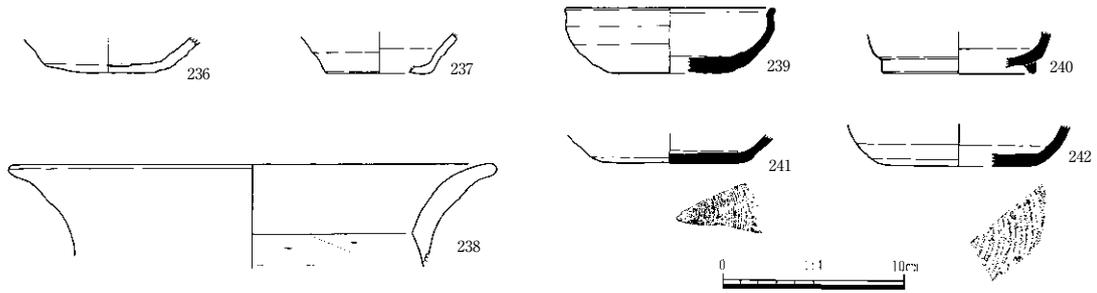


第108図 波板状凹凸遺構土層断面図

- ① 暗灰褐色土(粘性中、締まり強い、1～2cmの小礫を含む)
- ② 暗褐色土(粘性中、締まり中)
- ③ 暗褐色土(粘性中、締まり強い)



第109図 古代耕作痕



第110図 古代耕作痕出土遺物

古代耕作痕（第109～110図、図版9）

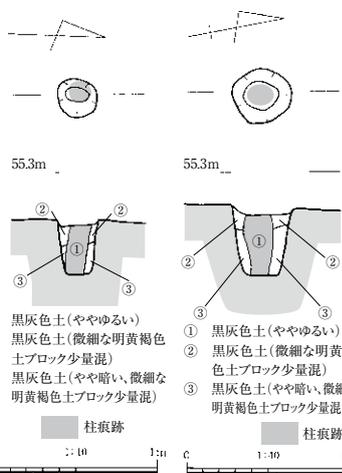
C4～E4グリッドに位置する。IV層または整地層を除去した後、V層及びVI層上面において34条の耕作痕を検出した。VI層上面にて検出した遺構については、V層上面にて検出した遺構と筋が通るものがあること、また埋土も近似していることから、一連の遺構群であると判断した。また、これらの耕作痕は、同一面に検出した掘立柱建物5、柵2・3及びピット群により一部破壊されている。

主軸は等高線に直交する東西方向、もしくは北東-南西方向にとるものが主体をなす。耕作痕の北西側には水路と思われる溝34が近接する。平面形は不整形であり、検出面での幅は18～70cm、検出面からの深さは1～19cmである。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は黒灰色土である。D4グリッドに検出した古代耕作痕3・4の筋が通り、本来は同一遺構であった可能性が高い。古代耕作痕7～9も同様である。また、古代耕作痕2・3・5・8はほぼ等間隔（2.1～2.2m間隔）に位置する。E4グリッドに検出した古代耕作痕17・18も筋が通り、古代耕作痕18～21はほぼ等間隔（2.5～2.8m間隔）に位置する。

埋土中より出土した土器236～242を図化した。236・237は土師器坏である。237の内面は黒色処理が施されている可能性がある。須恵器坏239・241・242は底部外面に回転糸切りによる切り離し痕跡がみられる。240は須恵器高台坏である。

本遺構の時期は出土遺物より判断し、9世紀後半ころと考えられる。（森本）

P59（第111図）

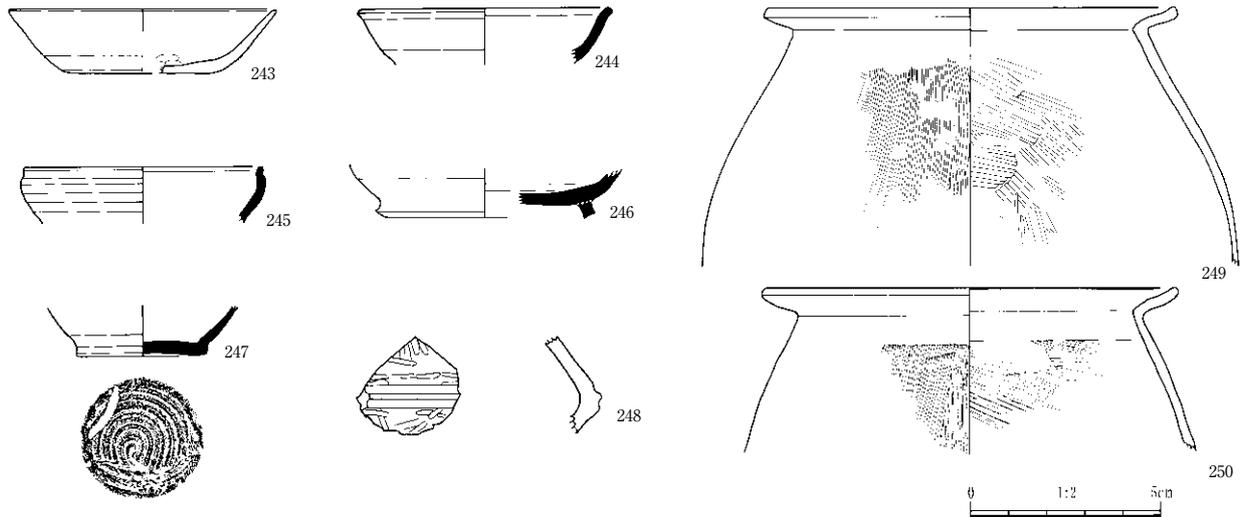


E3グリッドに位置する。IV層除去後、V層上面において検出した。平面円形を呈し、検出面での規模は径24cmを測る。検出面からの深さは34cmを測り、底面の標高は54.66mである。断面形は逆台形状を呈す。土層断面を観察した結果、11cm程度の柱痕跡が認められる。遺物は出土していない。

本遺構は検出面より9世紀以降に掘削されたものと想定している。なお、同一検出面ではP59と埋土の色調が近似するピット群を検出しているが、これらのピット群は古代耕作痕を掘削していることから、本遺構も古代耕作痕より後出する可能性が考えられる。（森本）

P62（第112図）

E4グリッドに位置する。IV層除去後、V層上面において検出した。平面楕円形を呈し、検出面での規模は長軸37cm、短軸33cmを測る。

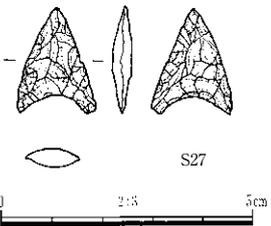
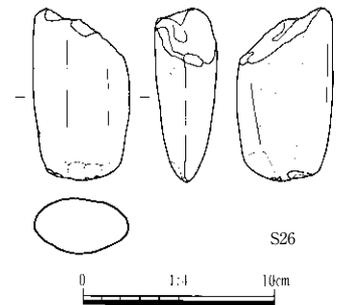


第113図 遺構外出土遺物

る。検出面からの深さは44cmを測り、底面の標高は54.65 mである。断面形は逆台形状を呈す。土層断面を観察した結果、11cm程度の柱痕跡が認められる。遺物は出土していない。

本遺構は検出面より9世紀以降に掘削されたものと想定している。なお、同一検出面ではP 62と埋土の色調が近似するピット群を検出しているが、これらのピット群は古代耕作痕を掘削していることから、本遺構も古代耕作痕より後出する可能性が考えられる。

(森本)



第114図 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物 (第 113・114 図)

本遺構面を形成する黑色土の包含遺物には、弥生、奈良・平安時代を中心とした遺物がみられる。出土遺物には土器や石器がみられるが、このうち本土層出土遺物の下限を示す遺物は243、247で、243は土師器坏で内面底部には押圧された痕跡が残る。247は須恵器坏で、底部切り離しは回転糸切り後未調整である。これらの土器は9世紀ころのものと思われることから、本土層もこの出土遺物が示す時期に堆積したものと思われる。

(野口)

表8 整地層上面・第5遺構面ピット一覧表 (計測単位: cm)

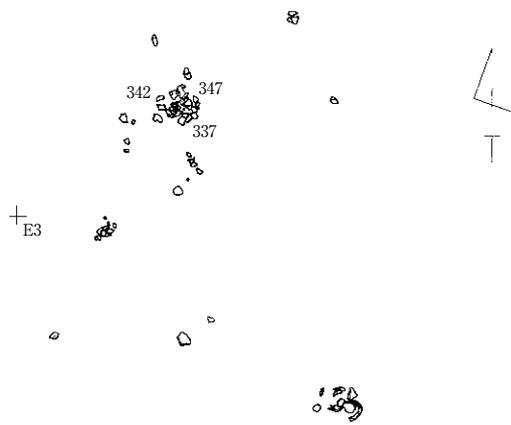
No.	長径	短径	深さ	埋土色調	No.	長径	短径	深さ	埋土色調	No.	長径	短径	深さ	埋土色調	No.	長径	短径	深さ	埋土色調
13	55	52	26	にぶい黒黄褐色土	29	23	21	42	黒灰色	43	30	24	36	黒灰色	59	26	23	34	黒灰色
14	60	48	35	にぶい黒黄褐色土	30	26	25	36	黒灰色	44	24	22	39	黒灰色	60	38	32	21	黒灰色
15	45	38	15	にぶい黒黄褐色土	31	28	24	33	黒灰色	45	28	24	41	黒灰色	61	28	26	19	黒灰色
16	30	29	11	にぶい黒黄褐色土	32	26	21	16	暗褐色	46	26	25	38	黒灰色	62	34	33	44	黒灰色
17	36	20	30	にぶい黒黄褐色土					黒褐色	47	30	26	43	黒灰色	63	22	20	32	黒灰色
18	26	22	12	にぶい黒黄褐色土	33	18	16	25	黒灰色	48	24	20	19	黒灰色	64	28	24	41	黒灰色
19	36	32	14	にぶい黒黄褐色土	34	37	24	30	黒灰色	49	18	15	29	黒灰色	65	30	29	16	黒灰褐色
20	60	56	58	-	35	27	23	32	黒灰色	50	24	23	21	黒灰色	66	34	32	23	黒灰褐色
21	38	36	14	にぶい黒黄褐色土	36	19	18	17	黒灰色	51	31	29	31	黒灰色	67	30	20	24	暗灰褐色
22	54	52	23	にぶい黒黄褐色土	37	37	34	35	黒灰色	52	31	30	39	黒灰色	68	78	34	25	黒灰褐色
23	60	45	19	にぶい黒黄褐色土	38	28	24	11	黒灰色	53	15	13	24	黒灰色	69	42	32	16	黒色土
24	58	50	49	-	39	26	22	42	黒灰色	54	24	23	39	黒灰色	70	51	42	57	黒灰褐色
25	30	20	12	にぶい黒黄褐色土	40	21	18	8	黒灰色	55	22	21	34	黒灰色	71	30	25	26	黒灰褐色
26	42	36	59	にぶい黒黄褐色土	41	27	20	49	黒灰色	56	34	30	34	黒灰色	72	30	25	16	黒灰褐色
27	40	30	9	黒灰色土	42	27	22	29	黒灰色	57	28	24	36	黒灰色	73	18	14	21	黒灰色
28	31	22	19	黒灰色						58	27	24	41	黒灰色					

第7節 第6遺構面の調査

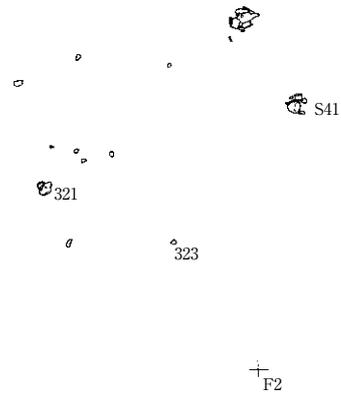
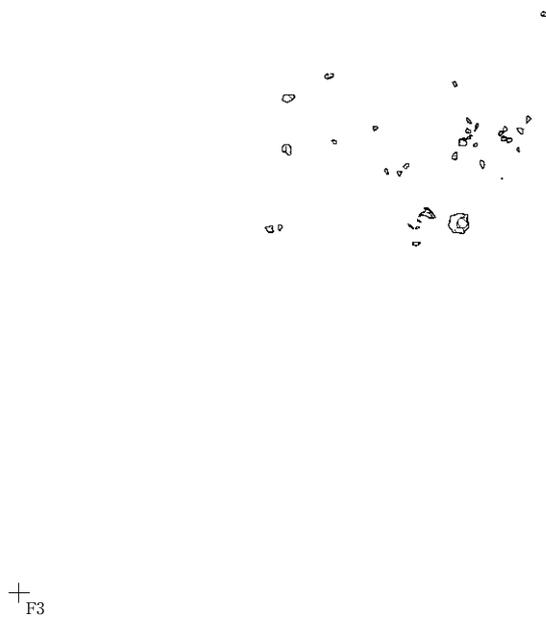
本遺構面は、調査区南側の一部において、現代の耕作による削平を受けるが、ほぼ調査区の全体に堆積する黒色土上面を検出面とする。現況範囲での高低差は、東西でおよそ3mと西から東に向かい、



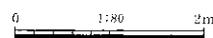
第115図 4区第6遺構面遺構配置図



VI層上面土器出土状況



VI層上面土器出土状況



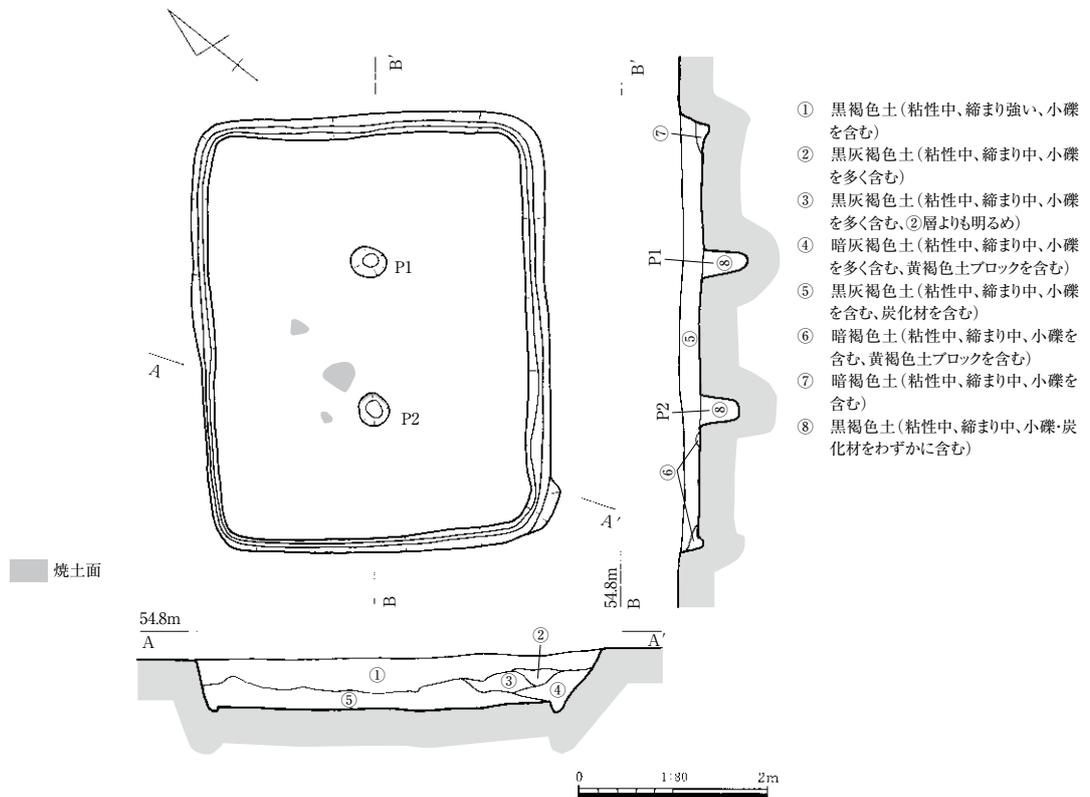
第116図 VI層上面土器出土状況図

傾斜した地形であるが、他の遺構面に比べその傾斜はやや急なものである。本土層の堆積はその包含遺物から弥生時代中期中葉～後葉ころと思われ、部分的にはあるが本土層上面で弥生時代中期中葉～後葉ころの土器が面的に出土する箇所も見られる。本土層上面からは竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝などが確認され、これらは弥生～古墳時代のものが主となるが、上層にV層などが堆積していない範囲では、新しい時期の遺構も検出される。(野口)

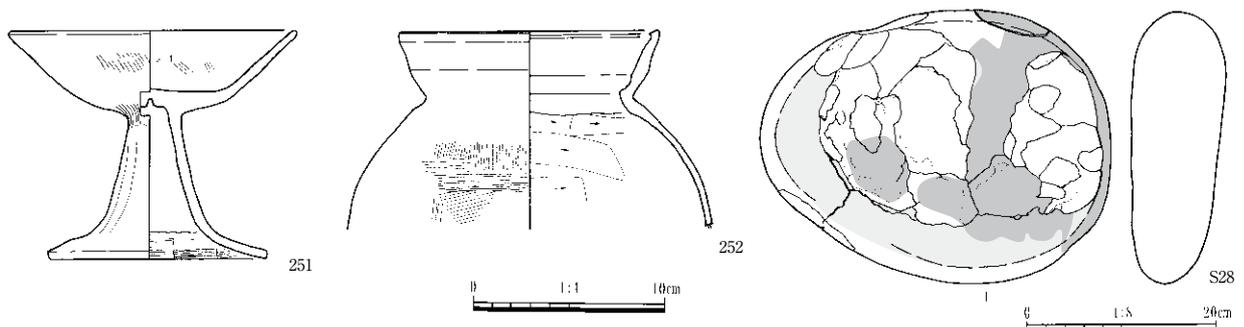
竪穴住居1 (第117～119図、図版10)

調査区の東側、E1グリッドに位置する、主軸を北東—南西方向とする平面長方形の竪穴住居である。本住居は、確認段階では西側の一部が調査区内に位置するのみで、その大半が調査区外とした4区、5区の区界に伸びていた為、調査区を一部拡張し調査を行った。また本住居は、その確認面を地山上面(第7遺構面上面)としたが、確認段階での調査区東壁面の土層断面(D-D'セクション)では、1層上に位置するVI層からの掘り込みが確認された。

本住居跡の規模は、長軸4.7m、短軸3.8m、深さ56cmを測る。掘り込み面から床面までの埋土は

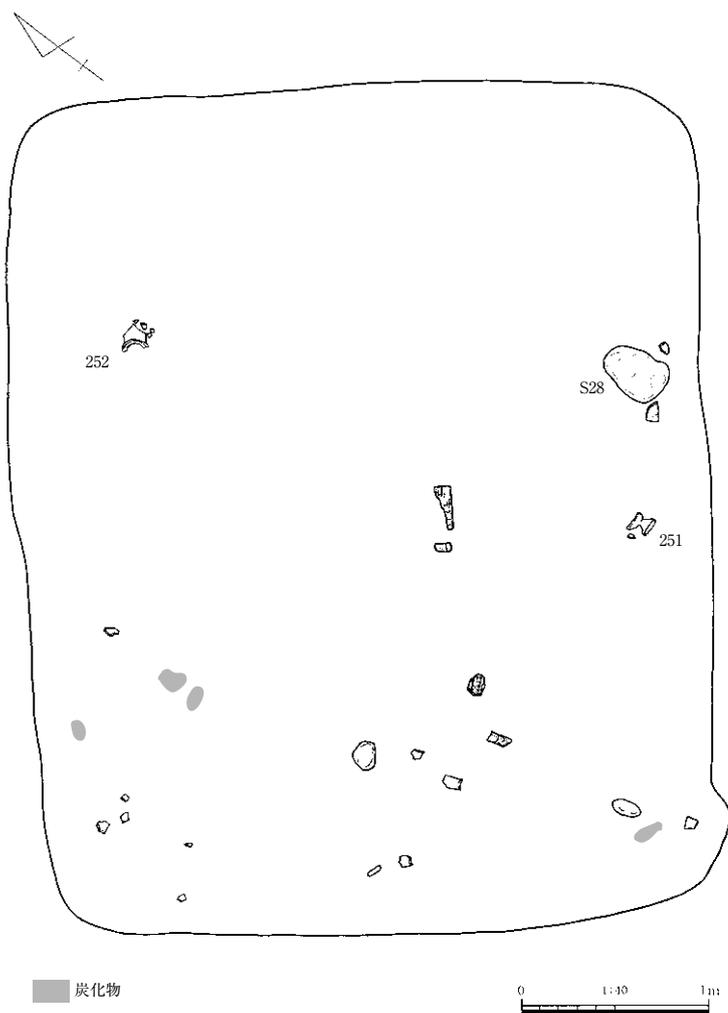


第117図 竪穴住居1



第118図 竪穴住居1出土遺物

7層に分けられるが、主として下層には6～24cmの炭化材、5～10mmの炭化物を多く含んだ黒灰褐色土（⑤層）、上層には掘り込み面であるⅥ層に由来する土と思われる黒褐色土（①層）が堆積する。また上記⑤層のほか、④層にも炭化物が認められることや、柱穴壁面の一部が焼けていることから、本住居跡は焼失住居と考えられる。炭化材の遺存状況が良くないことから、これら炭化材が住居のどの部材として利用されていたかは明らかにできないが、中央付近で確認された炭化材は、住居の主軸と方向を一にする。床面では周壁溝、柱穴、焼土面が検出された。周壁溝は幅10～20cm、深さおよそ10cmのものが全周する。柱穴は住居主軸と同じく、北東—南西方向にP1、P2が並ぶ、2本柱である。焼土面は4ヶ所で認められたが、いずれも住居中央からやや西側に点在する。うち1ヶ所の柱穴の壁面上部で確認された焼土面に関しては、住居焼失に伴う焼土面と考えられる。



第119図 竪穴住居1遺物出土状況図

出土遺物には高坏251、甕252、台石S28が床面直上から出土している。251はやや浅めの坏部を持つ高坏で、坏底部から体部にかけての屈曲は鈍い。252は布留系の球胴の甕で、口縁部は中位でやや肥厚する。調整は外面に縦、横方向のハケの後、ナデを施すが、ハケ目は残される。S28は焼失時の被熱により、剥離した破片が周辺に認められる。

本遺構の時期は、高坏251坏部が浅めであることなどの特徴から、天神川編年のⅣ期、古墳時代前期末ごろと考えられる。(野口)

竪穴住居2（第120～122図、図版11）

調査区南側、G1グリッドに位置する竪穴住居跡である。近世の耕作土であるⅠ層除去後に検出したが、北側の一部は近世の耕作、及び攪乱により破壊される状況である。規模は、西側にやや張り出すが径4.8mほどで、平面円形、深さは検出面から10cmを測る。

床面までの埋土の状況は、色調から4層に分けられるが、主として黒褐色土（②層）が堆積し、長さ1mほどの炭化材が含まれる。また、確認できた住居壁面沿いの埋土中には広い範囲で焼土が認められた。

このような状況から、本住居跡は焼失住居と考えられる。確認された炭化材の大半は、主軸や木目

方向を住居中央に向けていることから、垂木材であったと考えられるが、P4-5間では付近の他の炭化材とは主軸を直行させる材も認められた。

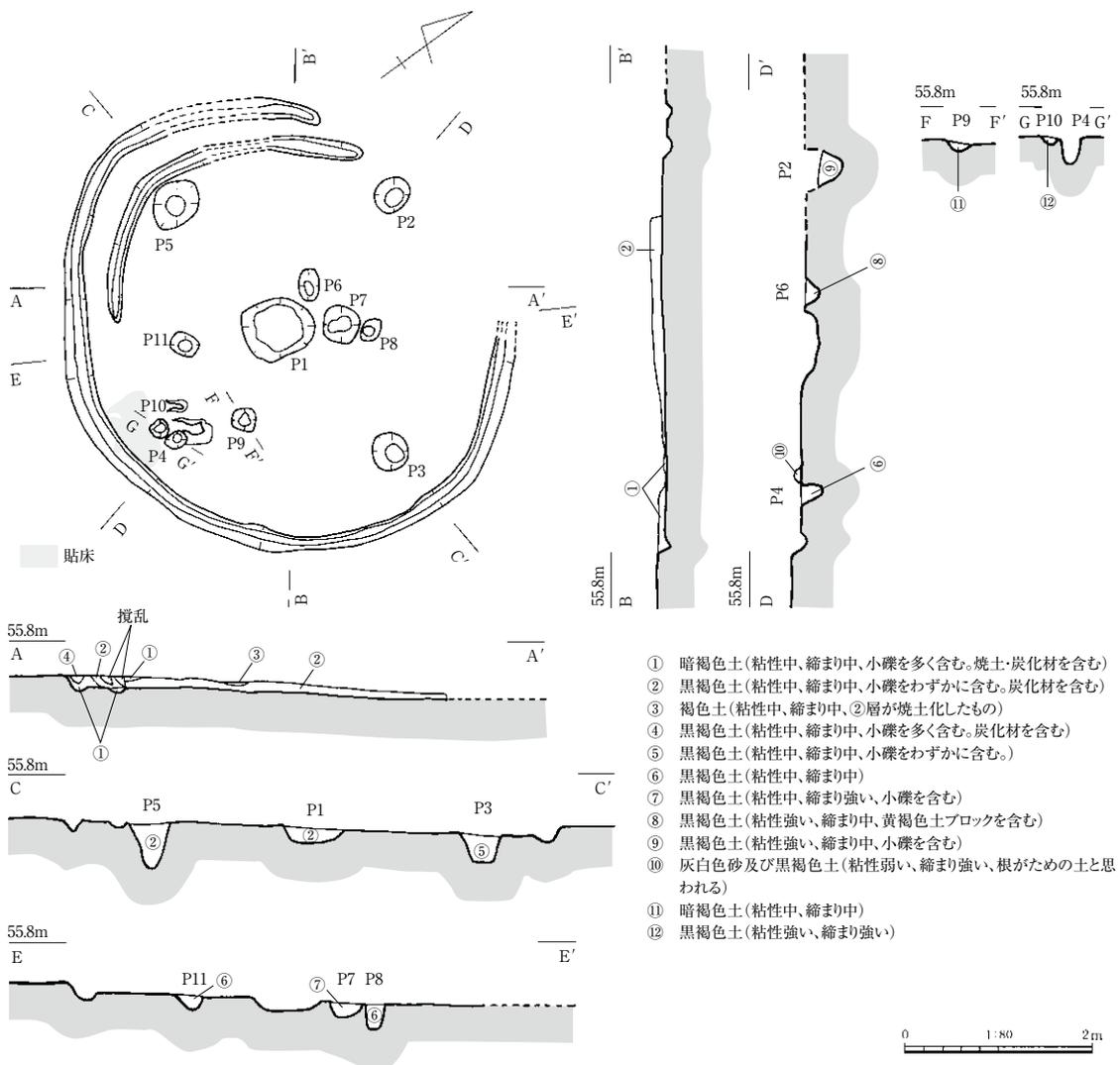
床面は、住居南側の一部で検出面のVI層に類似する、黒褐色土の貼床が施されており、周壁溝、柱穴、中央ピットが認められる。攪乱を受ける北側部分是不明であるが、周壁溝は、幅15~25cm、深さおよそ10cmのものが全周する。柱穴はP2~5で、住居の四隅に配されており、P4には根固めの土であろうか、黒灰褐色土に灰白色砂を混ぜた土が隆起して認められる。中央ピットは長軸38cm、短軸32cm、深さ9cmを測る。

また、床面西側部分では、周壁溝と相似した溝がめぐる。これに建替え前の住居の周壁溝の可能性を考えるならば、中央ピットを挟んで対峙するP8と11が柱穴であったとも思われ、2本柱建物から4本柱建物への建替えの可能性が考えられる。

出土遺物には甕底部の破片253が見られたが、出土量はわずかであった。

なお、本住居の出土炭化材は樹種同定、および年代測定分析を行っている(第5章参照)。樹種同定は出土試料3点の分析を行い、サクラ属1点、アカガシ垂属2点の分析結果を得られた。また年代測定では出土試料1点を分析し、実年代でおよそ2,200前、紀元前3世紀代の分析結果を得ている。

本住居は、253の形態や周辺で確認される遺構の年代から弥生時代中期中葉~後葉と考えられるが、



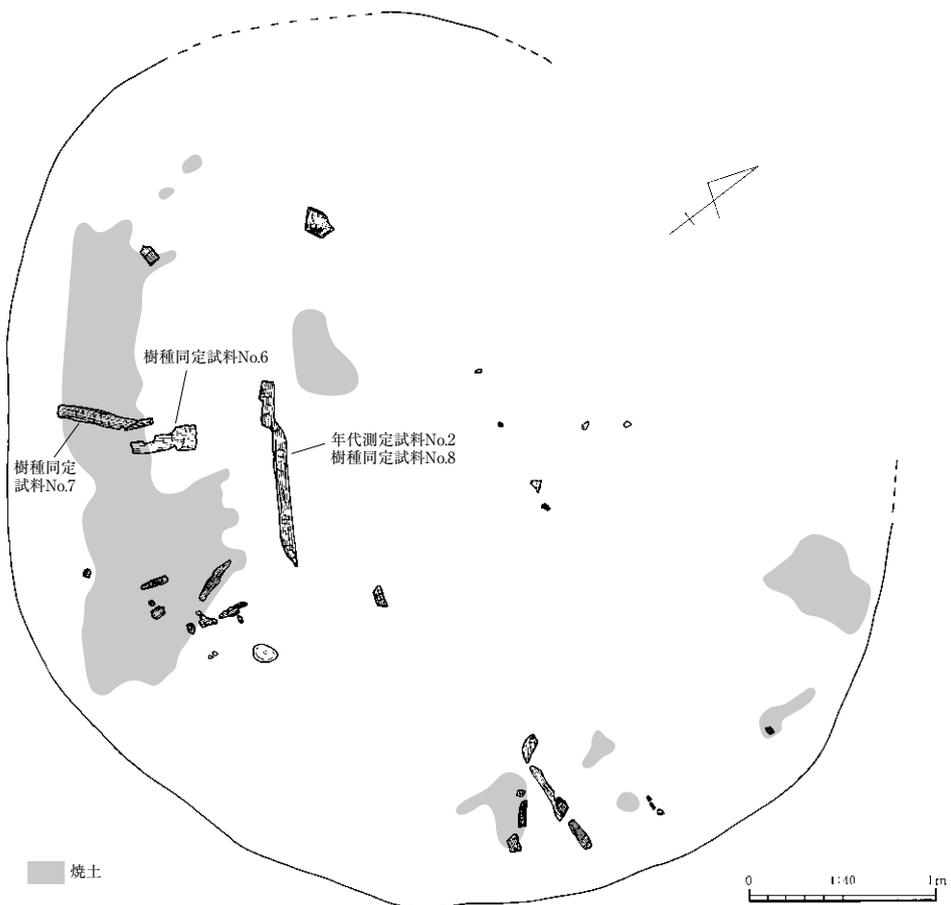
第120図 竪穴住居2

実年代は上記のとおりである。(野口)

掘立柱建物6 (第123図、表9、図版11)

G3グリッドに位置する桁行3間、梁行2間の掘立柱建物で、主軸をN-45°-Wにする。VI層上面に位置する遺構であるが、確認される地点は現代の耕作がVII層上面まで達し、本遺構を構成するピットの大半はVII層上面での確認となった。

規模は、桁行4.4m、梁行2.8mである。桁行、梁行の柱穴間は表9のとおりで、南側P7がやや東に寄るものの、対称的な位置に柱穴が配置される。柱穴掘り方の形状は、平面円、もしくは楕円形で、20~30cm程度の大きさである。



第121図 竪穴住居2 遺物出土状況図

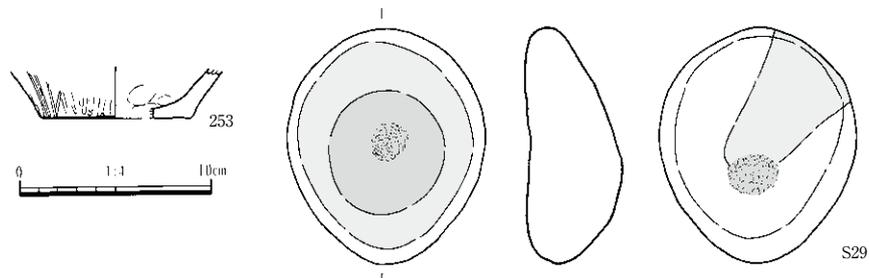
深さは東側の柱穴底面の標高が約54.6m、西側が54.8mと東側のものが深く掘られる。埋土は粘性や締り具合に違いは見られるものの、黒色土が堆積する。うち北隅のP3では柱痕が確認される。

本遺構の時期は、確認される層位より、弥生時代中期~古墳時代と考えられる。(野口)

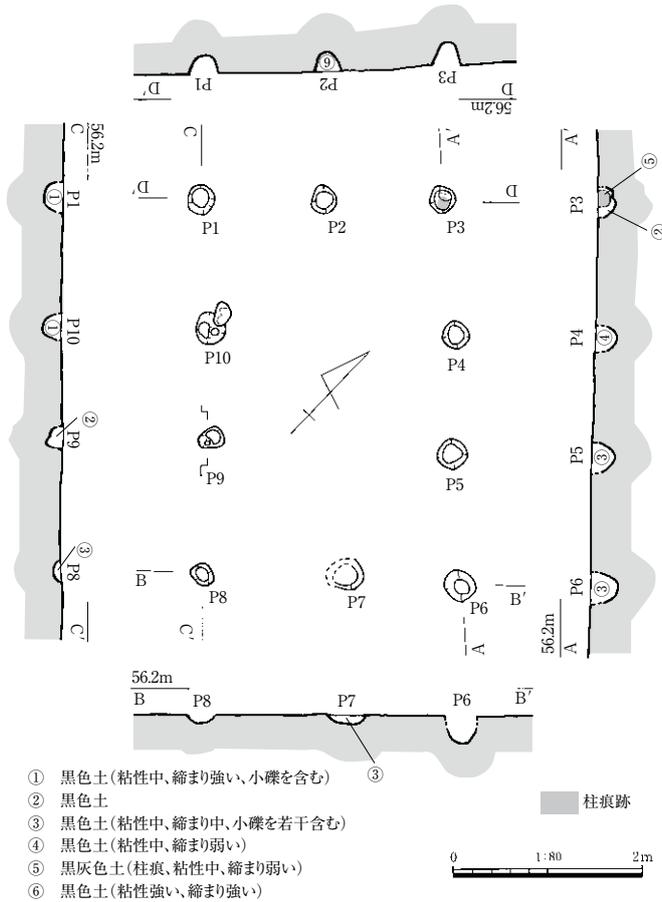
土坑8 (第124・125図、図版12)

F5グリッド南側に位置する。長径1.2m、短径86cm、深さ16cmを測る平面楕円形、断面形レンズ状の土坑である。暗褐色土を埋土とするが、上面には部分的に砂礫が広がる範囲も確認される。出土遺物には底部に回転糸切り痕を残す土師器坏254が見られる。

本遺構は、弥生中期から古墳時代の遺構面であるVI層を確認面とするものの、出土遺物は10世紀以降のものであり、さらに埋土には、遺構上層に位置する室町時代後半のⅢ層に由来すると思われる土が堆積することから、室町時代後半の時期が考えられる。(野口)



第122図 竪穴住居2 出土遺物

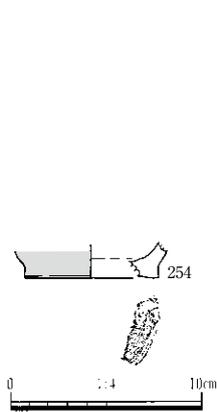


第123図 掘立柱建物6

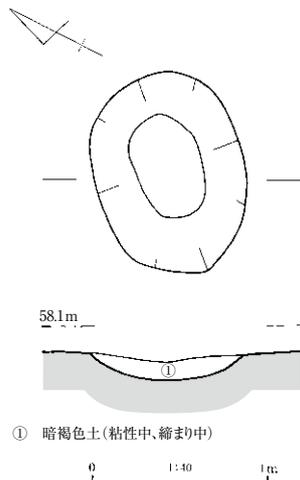
土坑10 (第127図、図版12)

D4グリッドに位置する。V層除去後、VI層上面において検出した。検出面の平面形は楕円形を呈す。検出面での規模は長軸1.0m、短軸58cm、検出面からの深さは18cmを測る。断面形は皿状を呈し、底面の規模は長軸50cm、短軸残存10cmを測る。埋土は黒色土の単層であり、しまりはややゆるい。地山である明黄褐色土の小ブロックが混入するものの極少量であり、混入物はほとんどみられない。遺物は出土していない。

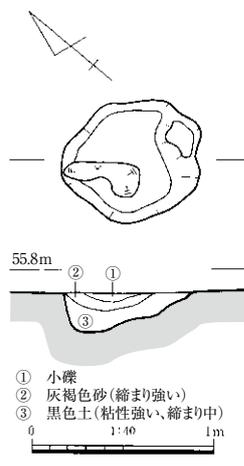
本遺構は同一検出面の土坑11～14・16に近接し、埋土の色調も近似することから弥生時代中期後半に思われる。(森本)



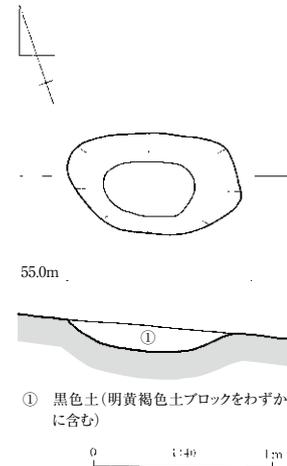
第124図 土坑8出土遺物



第125図 土坑8



第126図 土坑9



第127図 土坑10

表9 掘立柱建物6柱間距離(心々)

ピット	距離 (m)
P1-P2	1.4
P2-P3	1.4
P3-P4	1.6
P4-P5	1.2
P5-P6	1.6
P6-P7	1.24
P7-P8	1.5
P8-P9	1.6
P9-P10	1.2
P10-P1	1.6

土坑9 (第126図)

E4グリッド南西隅に位置する平面不整な円形の土坑で、長径74cm、短径6.7cm、深さ22cmを測る。埋土は3層に分けられ、上層には小礫層、砂層、下層には黒色土が堆積する。

本遺構の時期は、細片のため図化はしていないが10世紀代と思われる須恵器高台杯の破片が出土することから10世紀以降、平安時代後半ころが考えられる。(野口)

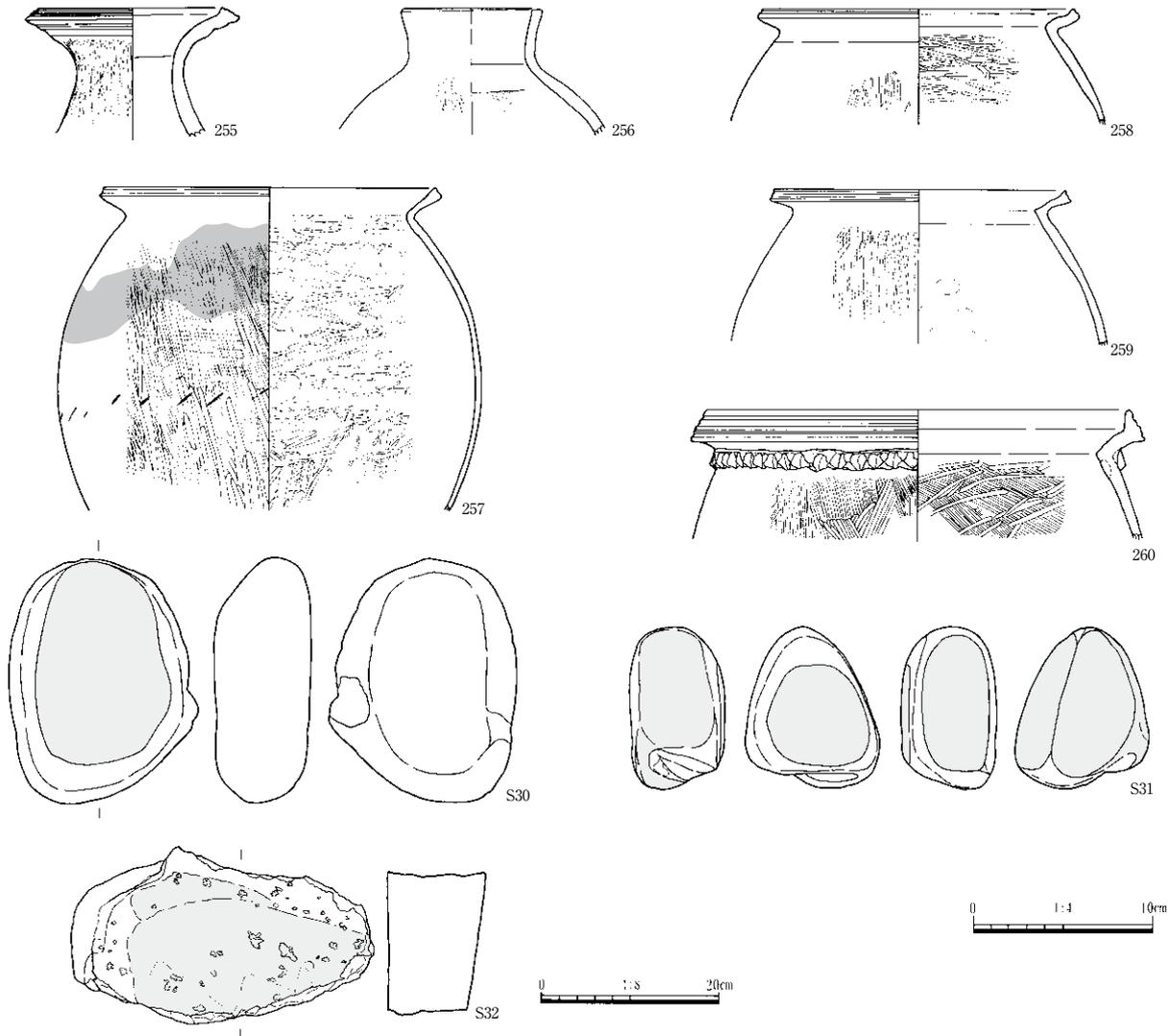
土坑 11 (第 128・129 図、図版 12)

D・E 4 グリッドに位置する。V 層除去後、VI 層上面において検出した。検出面は西から東にかけてやや傾斜し、東側のコーナー部分は削平されている。平面形は不整な隅丸方形を呈す。検出面の規模は長軸約 3.9 m、短軸約 3.2 m を測る。検出面からの深さは最深部で 15 cm である。断面形は浅い皿状を呈し、底面の規模は長軸約 3.4 m、短軸約 2.9 m を測る。埋土は黒色土の単層であり、しまりはややゆるい。明黄褐色土の小ブロックが混入するものの極少量であり、混入物はほとんどみられない。

埋土中より、弥生土器及び石器が出土している。土器は一定のまとまりをもった出土状況を示す個体は少なく、小片が散乱したような出土状況を示す。これらの遺物は、埋土が単層であることから、一括性が高いと思われる。



第128図 土坑11



第129図 土坑11出土遺物

255～260、S 30～32を図化した。255は壺口縁部である。口縁端面に3条の凹線をひき、頸部外面はハケ調整した後ナデを施している。256は無頸壺である。口縁端部はやや丸みをおび、風化が著しいものの、口縁部外面はナデ、胴部はハケ調整の痕跡が認められる。257～260は甕口縁部である。260は口縁端面に3条の凹線をひき、頸部に指頭圧痕貼付突帯を施し装飾する。器面調整は、内外面ともハケ調整を行った後、ミガキを施す。S 30・31は磨石、S 32は台石とみられる。

出土した土器はⅣ-1～2様式に並行すると思われる、遺構廃絶時期は弥生時代中期後葉と考えられる。なお、259は遺構外の遺物である。本遺構と同一面の近接した位置に出土し、まとまりをもった状態で出土した。甕の口縁から胴部にかけての破片で、口縁端部は2条の凹線を施す。(森本)

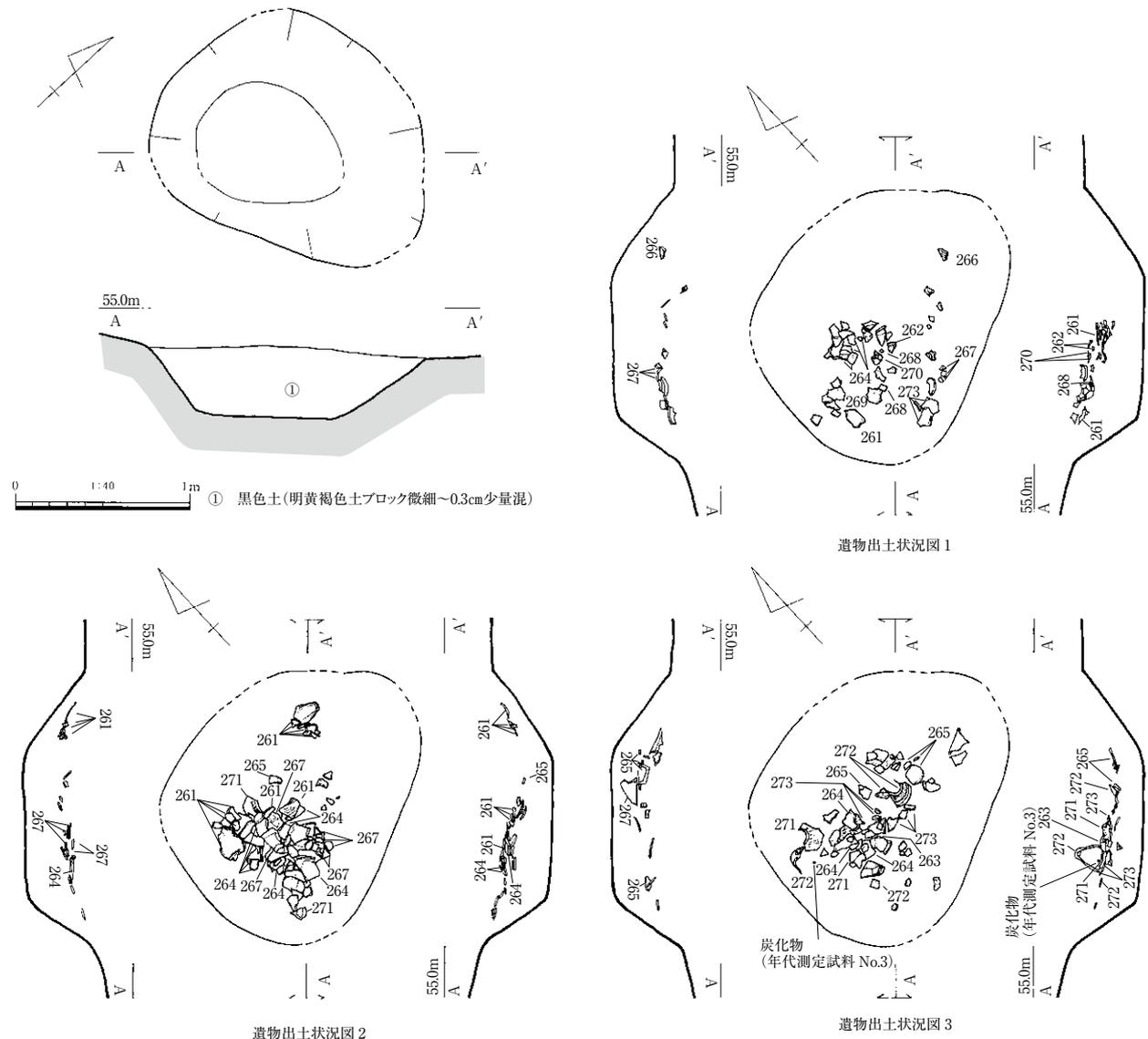
土坑12 (第130～132図、図版13)

D4グリッドに位置する。Ⅴ層除去後、Ⅵ層上面において検出した。本遺構北側は掘立柱建物5P1により破壊され、西側の上部は土坑11により破壊される。平面は不整な楕円形を呈し、検出面での規模は長軸約1.6m、短軸約1.4m、検出面からの深さは41cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、底面の規模は長軸83cm、短軸70cmを測る。埋土は黒色土の単層であり、しまりはややゆるい。明黄

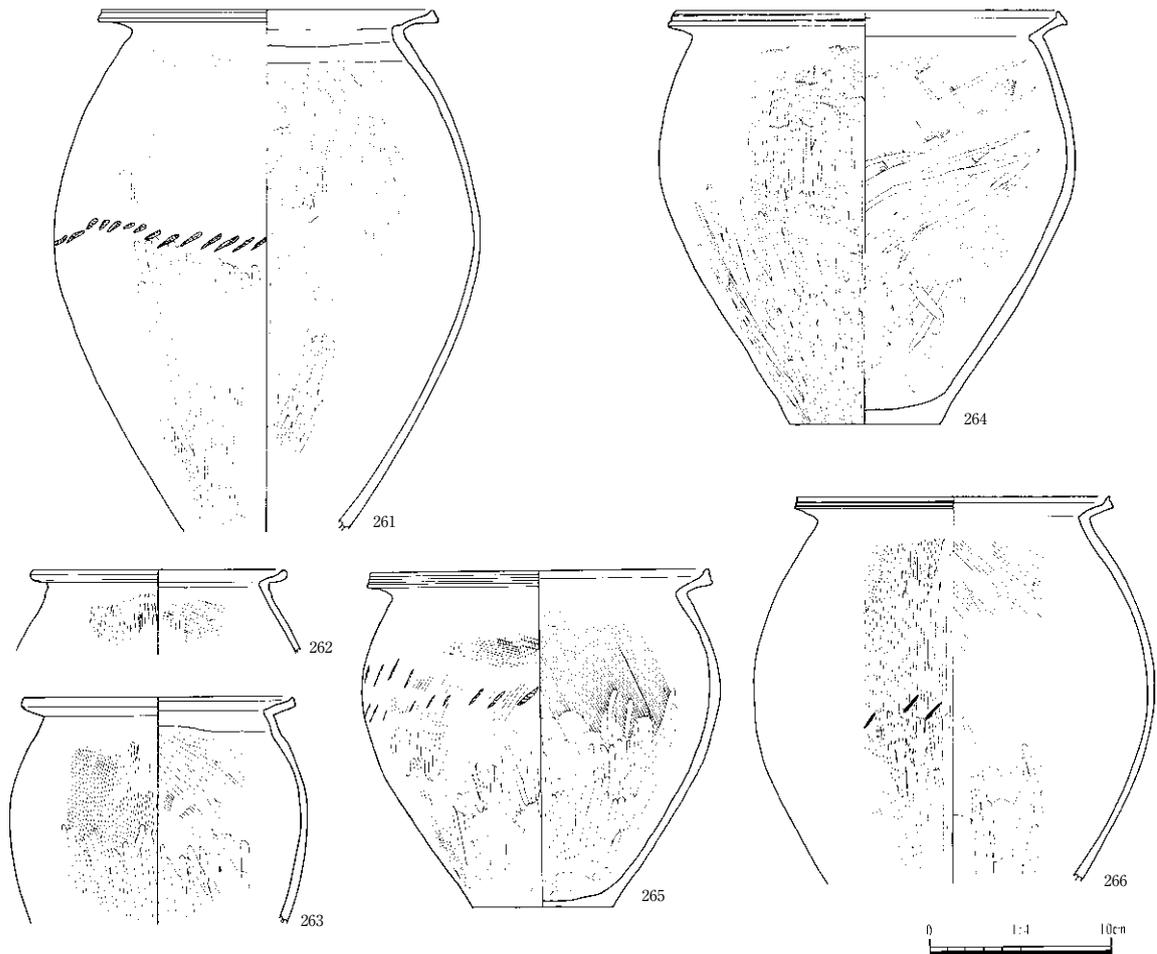
褐色土の小ブロックが混入するものの極少量であり、混入物はほとんどみられない。

埋土中より、弥生土器及び石器が出土している。遺物は主に南東側に集中し、各個体が折り重なるように出土した。遺物のレベルは土坑中央部が低くなり、レンズ状の出土状況を示す。出土レベルの高低差に関係なく接合している資料も認められる。土器は小片のみならず、比較的大きな破片もみられる。出土した土器は、埋土が単層であること、折り重なる出土状況から判断して、一括性が高いものと思われる。本遺構は遺物出土状況から判断し、廃棄土坑と想定される。

261～273、S 33を図化した。261～266は甕である。261は口縁端部をわずかにつまみ上げ、口縁端面に1条の凹線をひく。最大胴部は波状の刺突文により装飾される。265は口縁端面に2条の凹線をひき、最大胴部に2条の刺突文により装飾する。262・263はいずれも口縁端部を僅かにつまみ上げ、口縁端面は無文である。267は壺である。口縁端部は上下にやや肥厚させ、口縁端面に3条の凹線をひく。頸部には断面三角形の貼付突帯を施し、最大胴部は刺突文により施文する。271は本来広口の壺であったと思われるが、口縁部が欠損した後、欠損部を研磨し無頸壺として転用している。胴部は2条にわたって、刺突文により装飾する。S 33は両側縁部に刃部をもつスクレイパーである。



第130図 土坑12



第131図 土坑12出土遺物

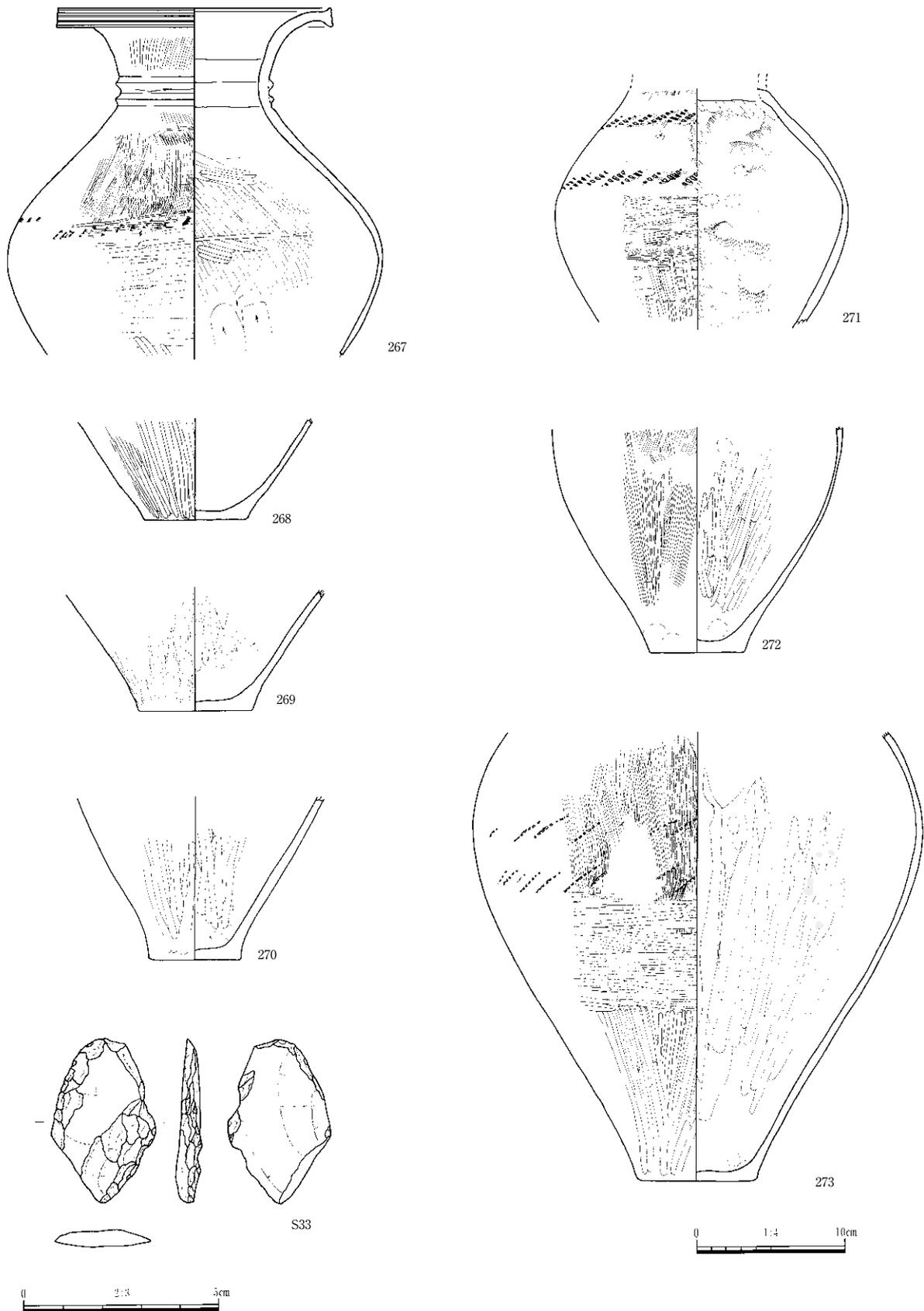
出土した土器はⅣ-1様式に並行すると思われる、遺構廃絶時期は弥生時代中期後葉と考える。なお、埋土中より出土した炭化物（分析試料No. 3）について放射性炭素年代測定を行った結果、およそ紀元前2世紀代の年代が得られた（第5章第1節参照）。（森本）

土坑 13（第 133～135 図、図版 14）

E4グリッドに位置する。Ⅴ層除去後、Ⅵ層上面において検出した。南東側は土坑14を破壊する。検出面の平面形は楕円形を呈す。検出面での規模は長軸約2.8m、短軸約2.3m、検出面からの深さは20cmを測る。断面形は浅い皿状を呈す。底面の平面形は不整な隅丸長方形を呈す。底面の規模は長軸約2.0m、短軸約1.3mを測る。埋土は黒色土の単層であり、しまりはややゆるい。明黄褐色土の小ブロックが混入するものの極少量であり、混入物はほとんどみられない。

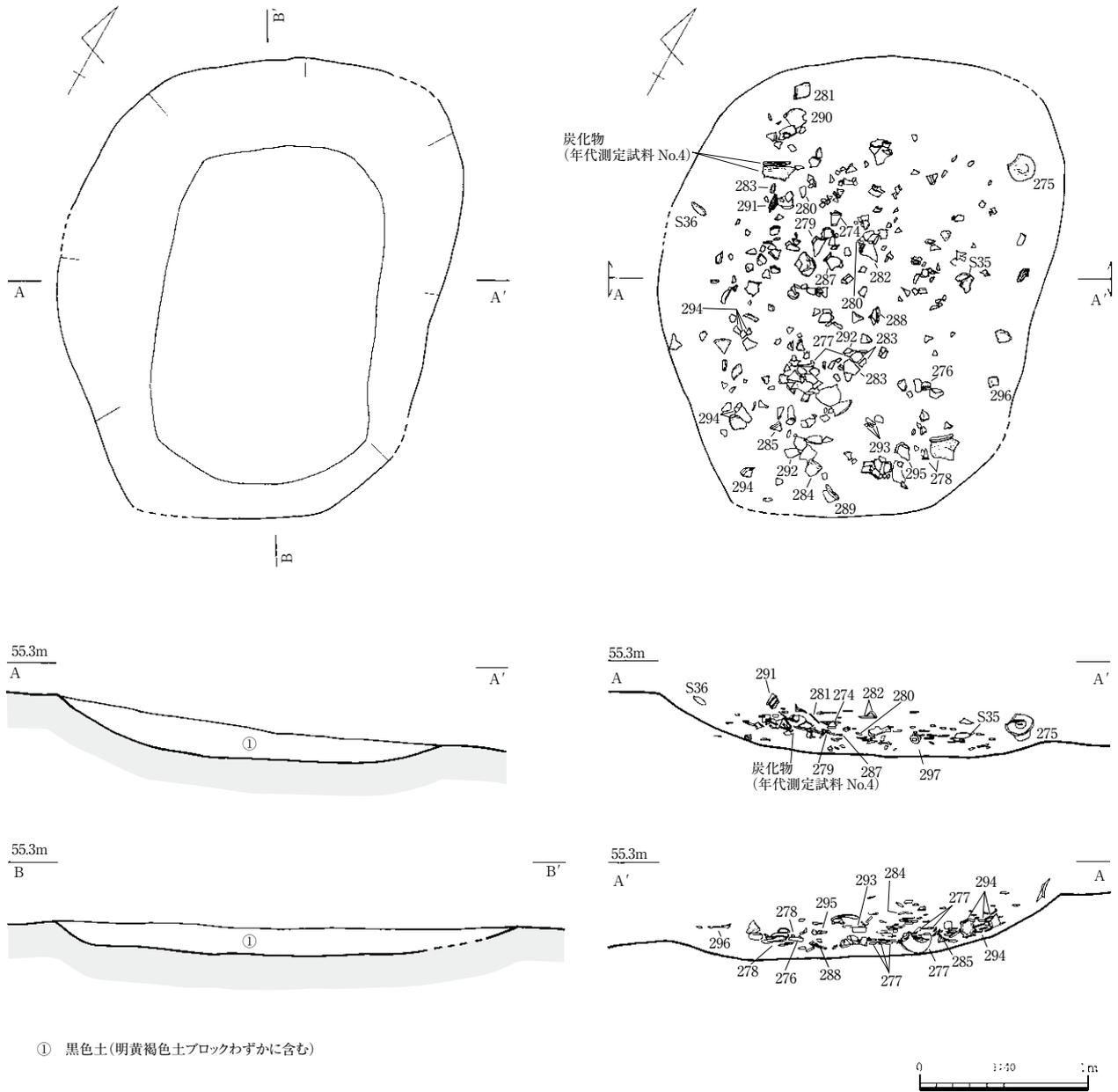
埋土中より、弥生土器及び石器が出土し、検出面から底面まで比較的密に包含している。土器は一定のまとまりをもった出土状況を示す個体は少ない。また、大きな破片の個体も少なく、土坑全体に小片が散乱するような出土状況を示す。

274～297、S34～36を図化した。274～276は壺口縁部である。274は口縁端部を上下にやや肥厚させ、2条の凹線をひいた後、刻みを入れ装飾する。頸部には断面三角形の貼付突帯を施す。275は口縁端面に刻みのみを施し、頸部は4条にわたり凹線をひく。276は口縁端部を上下に肥厚させ、口縁端面に4条の凹線をひき、刻みを施す。また、口縁内面には波状及び鋸歯状の櫛描文が施される。

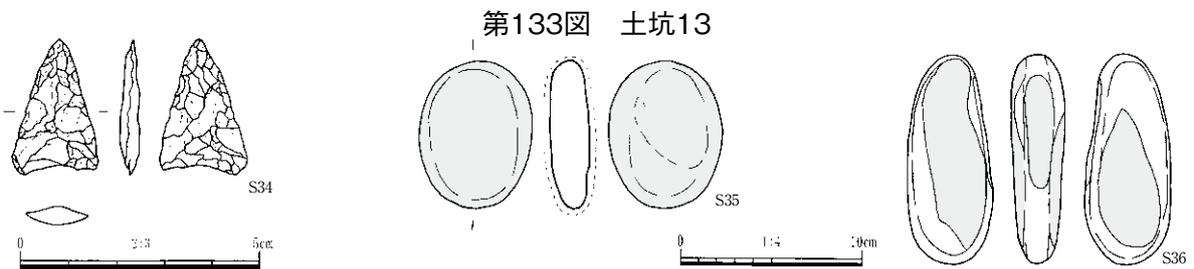


第132図 土坑12出土遺物

277～291は甕口縁部である。280・282の肩部外面には、タタキ調整の後ハケ調整を行った痕跡が観察できる。291は口縁端面に3条の凹線をひき、頸部に指頭圧痕貼付突帯を施した後突帯をナデつけている。S 34は石鏃、S 35・36は磨石である。



① 黒色土(明黄褐色土ブロックわずかに含む)

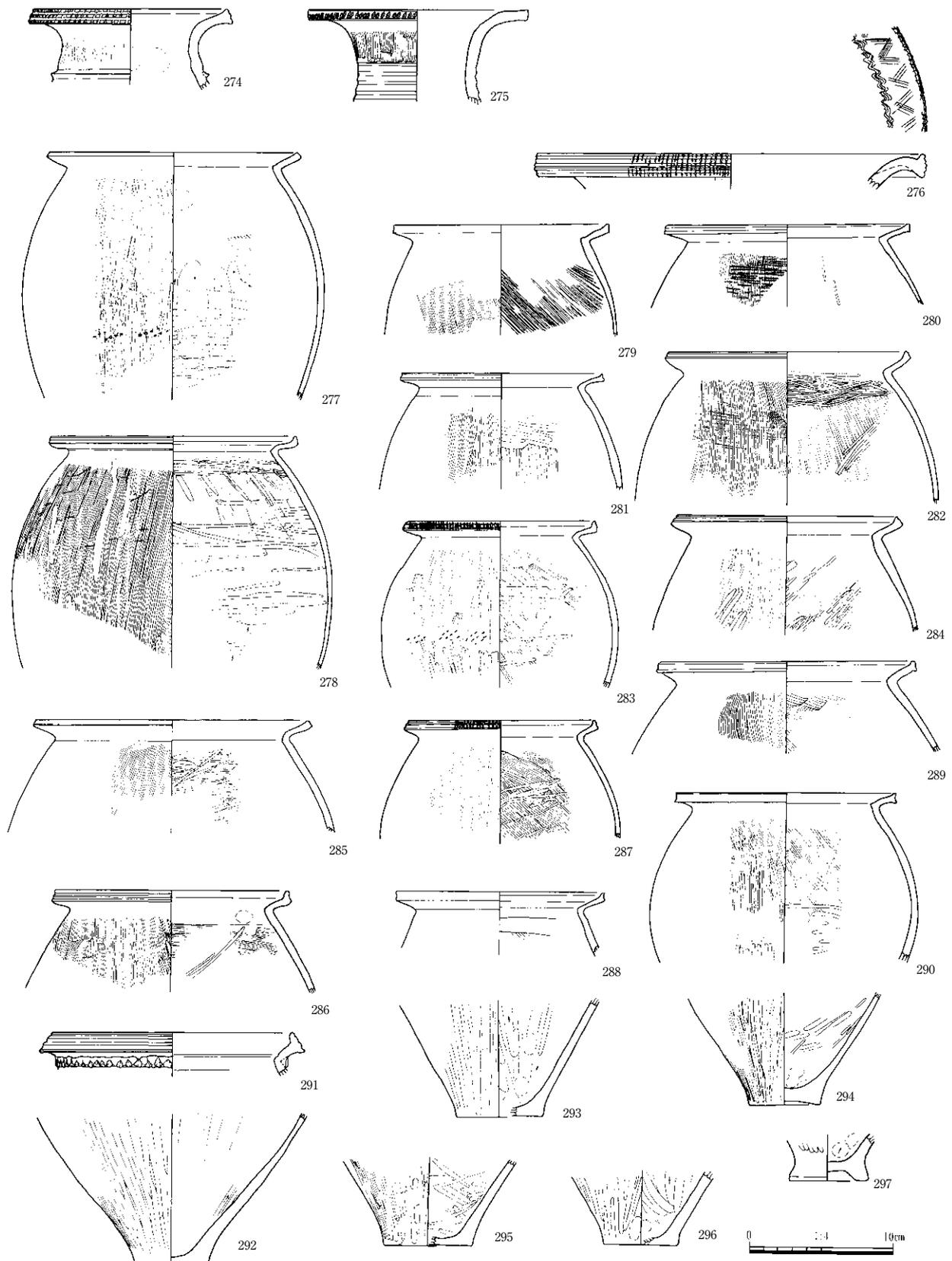


第134図 土坑13出土遺物

出土した土器はⅣ-1～2様式に並行すると思われる、遺構廃絶時期は弥生時代中期後葉と考えられる。なお、埋土中より出土した炭化物(分析試料No. 4)について放射性炭素年代測定を行った結果、およそ紀元前3世紀代の年代が得られた(第5章第1節参照)。(森本)

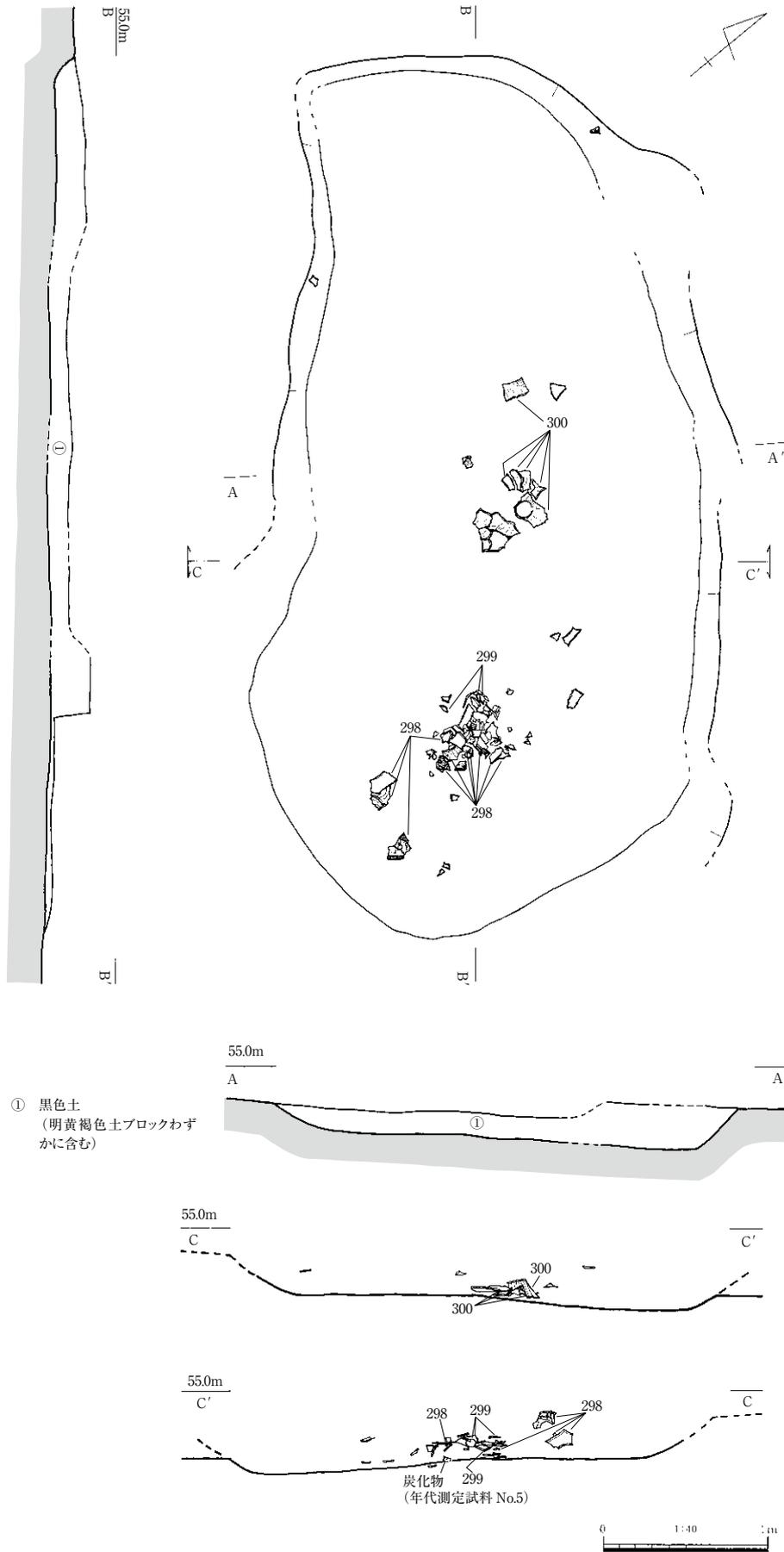
土坑14 (第136・137図、図版14)

E3・4グリッドに位置する。Ⅴ層除去後、Ⅵ層上面において検出した。西側上部は土坑13により



第135図 土坑13出土遺物

破壊される。平面は不整な楕円形を呈し、検出面での規模は長軸残存約 5.4 m、短軸約 2.9 m、検出面からの深さは最深で 26cmを測る。断面形は皿状を呈し、底面の規模は長軸約 5.3 m、短軸約 2.4 mを測る。埋土は黒色土の単層であり、しまりはややゆるい。明黄褐色土の小ブロックが混入するもの



第136図 土坑14

の極少量であり、混入物はほとんどみられない。

図化した壺口縁部 298、底部 299 は出土状況と器形から判断し、同一個体である可能性が高く、北西側から南東側へ転倒したものと想定される。298 は口縁端部を僅かに上下に肥厚させ、口縁端面に 2 条の凹線をひき、刻みを施す。頸部は 6 条の凹線により施文し、最大胴部には 2 条の刺突文を施す。同様の刺突文は、299 にもみられる。300 は 299 同様大型の底部である。出土状況は逆位をとる。

遺構廃絶時期は出土遺物より、弥生時代中期中葉～後葉と思われる。なお、埋土中より出土した炭化物(分析試料 No. 5)について放射性炭素年代測定を行った結果、およそ紀元前 2 世紀代の年代が得られた(第 5 章第 1 節参照)。(森本)

土坑 15 (第 138 図、図版 15)

D 4・5 グリッドに位置する。VI 層除去中に検出したが、本来は VI 層上面より掘削された遺構と思われる。検出面の平面形は不整な隅丸方形を呈

す。検出面での規模は長軸約 3.9 m、短軸残存約 3.3 m、検出面からの深さは 33cmを測る。断面形は皿状を呈し、底面の規模は長軸約 3.2 m、短軸残存約 2.4 mを測る。埋土は黒色土の単層である。遺物は出土していない。

本遺構は同一検出面の土坑 11～14・16 に近接することから弥生時代中期後半の可能性が高い。(森本)

土坑 16 (第 139・140 図、図版 15)

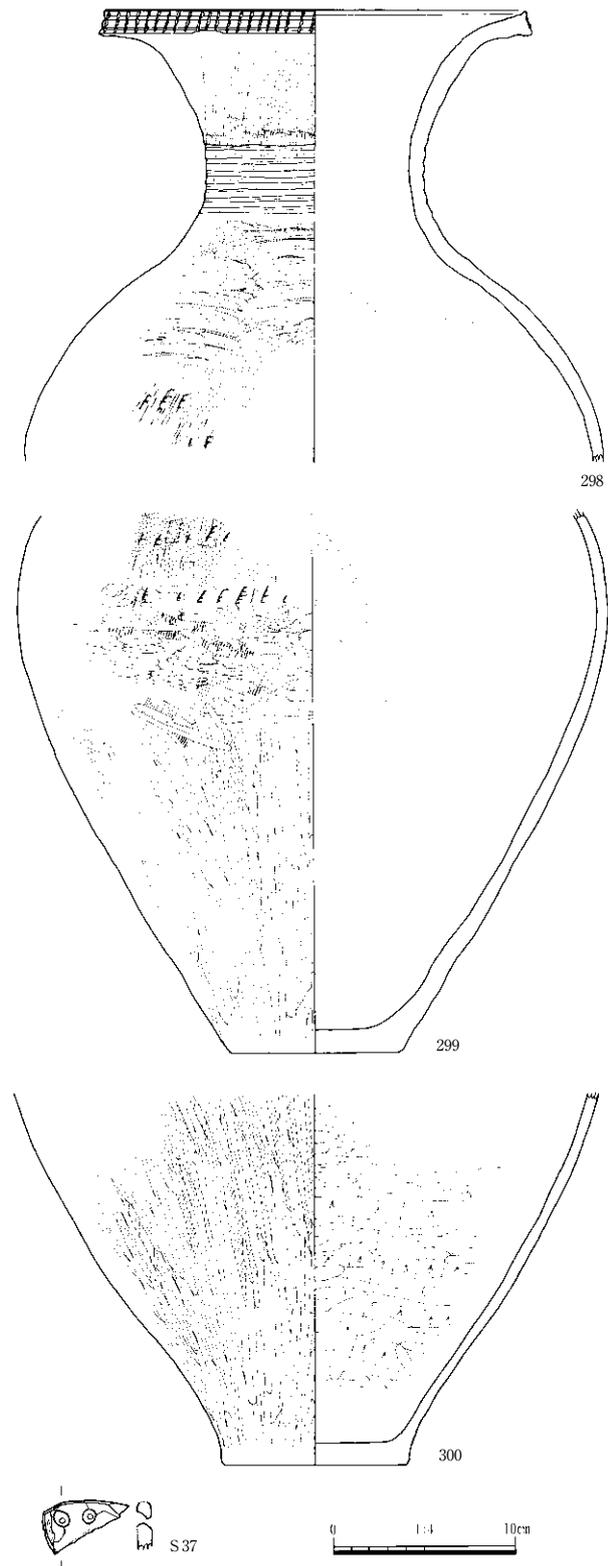
C 4 グリッドに位置する。V 層除去後、VI 層上面において検出した。遺構検出面の平面形は不整な隅丸方形を呈す。検出面での規模は長軸約 1.1 m、短軸約 1.0 m、検出面からの深さは 22cmを測る。断面形は皿状を呈し、底面の平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸 98cm、短軸 68cmを測る。埋土は黒色土の単層であり、しまりはややゆるい。明黄褐色土の小ブロックが混入するものの極少量であり、混入物はほとんどみられない。検出面より、ほぼ完存する弥生土器の甕 301 が出土している。逆位をとり、押しつぶされたような出土状況を示す。口縁端部を僅かにつまみ上げ、口縁端面は無文である。

出土した土器は IV-1 様式に並行すると思われる。遺構廃絶時期は弥生時代中期後葉と考えられる。(森本)

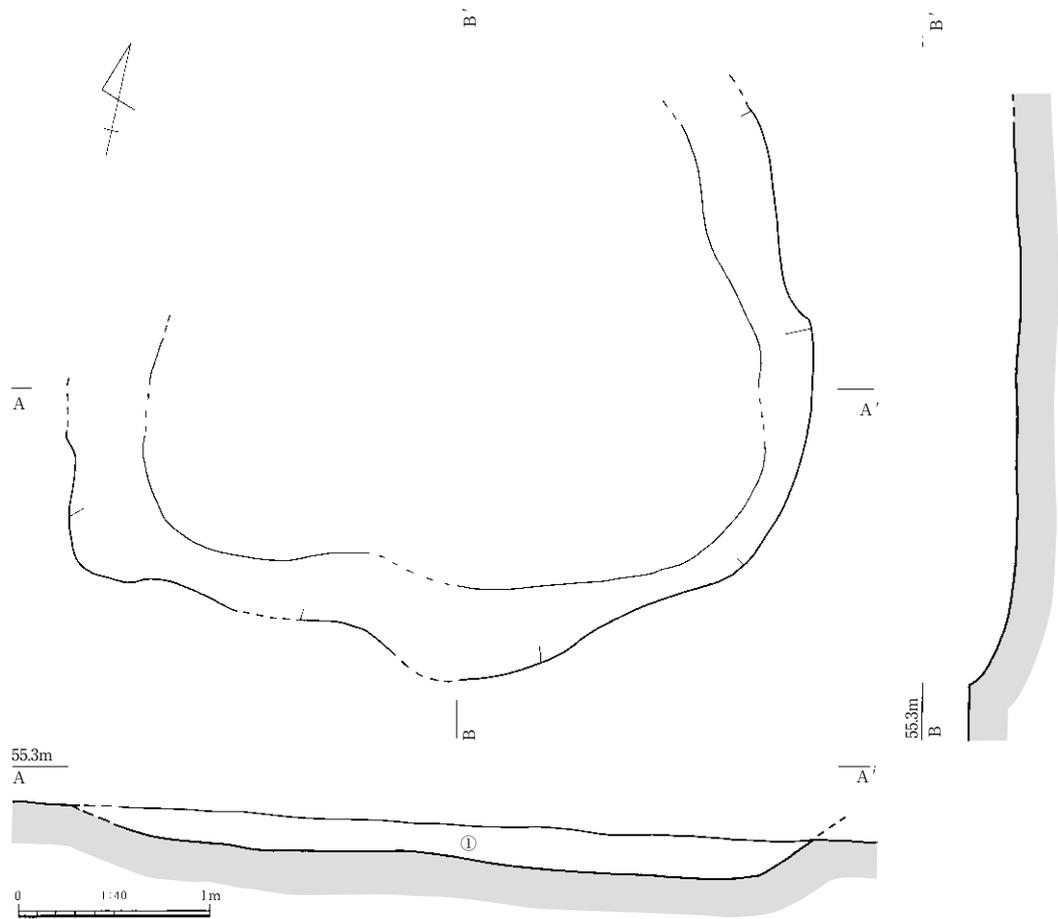
土坑 17 (第 141～143 図、図版 15)

調査区東側、D 1 グリッドに位置する。平面長方形の土坑で、南東部は調査区外に展開する。また、遺構南壁部分では VI 層上面から検出することができたが、遺構の大半は VII 層上面での確認となった。

規模は確認できる範囲で長軸約 2.5 m、短軸約 1.8 m、深さ 76cmを測る。黒褐色土を埋土とするが、下層は地山である VII 層下の黄褐色土の粒が多く含まれる。出土遺物 302、303 は弥生土器甕口縁部から胴部にかけての破片である。両者とも外面調整はハケやミガキを基調とし、内面は 302 がナデとミガキ、303 がハケとナデを施す。また 302 は口縁部に 2 条の凹線が見られる。そのほかには礫石器 S 38、S 39 が出土する。S 38 は砥石、S 39

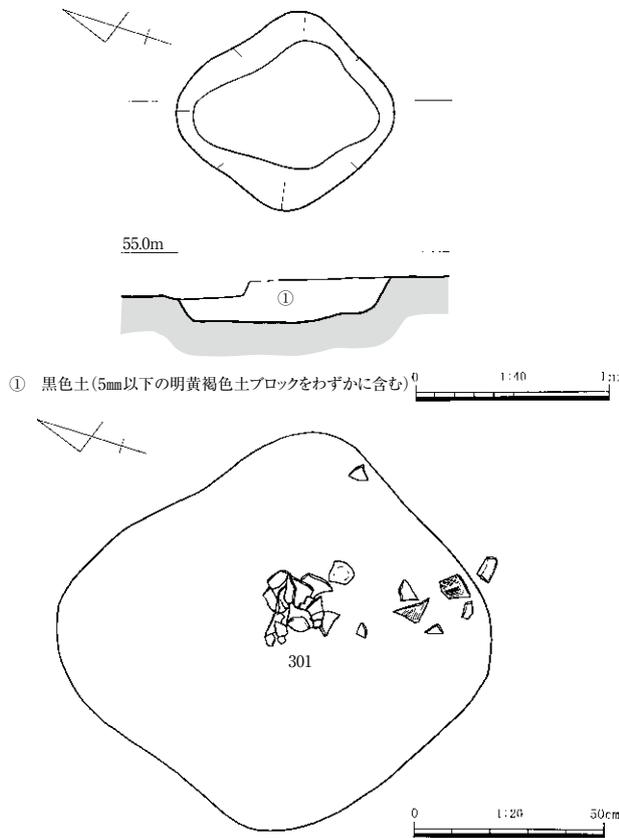


第137図 土坑14出土遺物



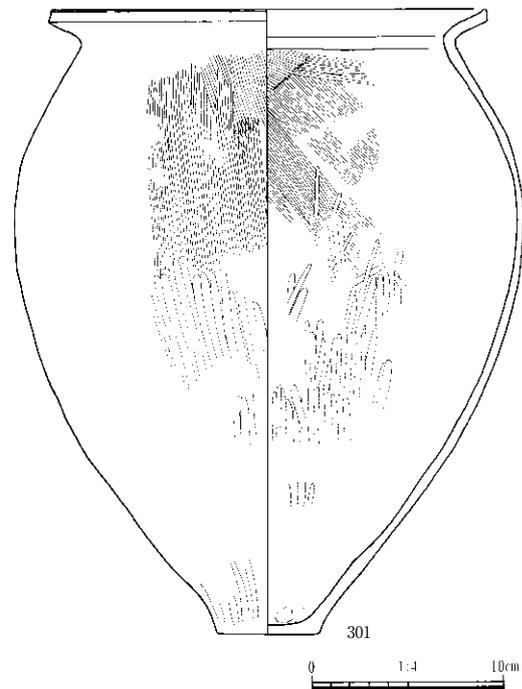
① 黒色土(微細~φ0.5cmの明黄褐色土ブロック混)

第138図 土坑15

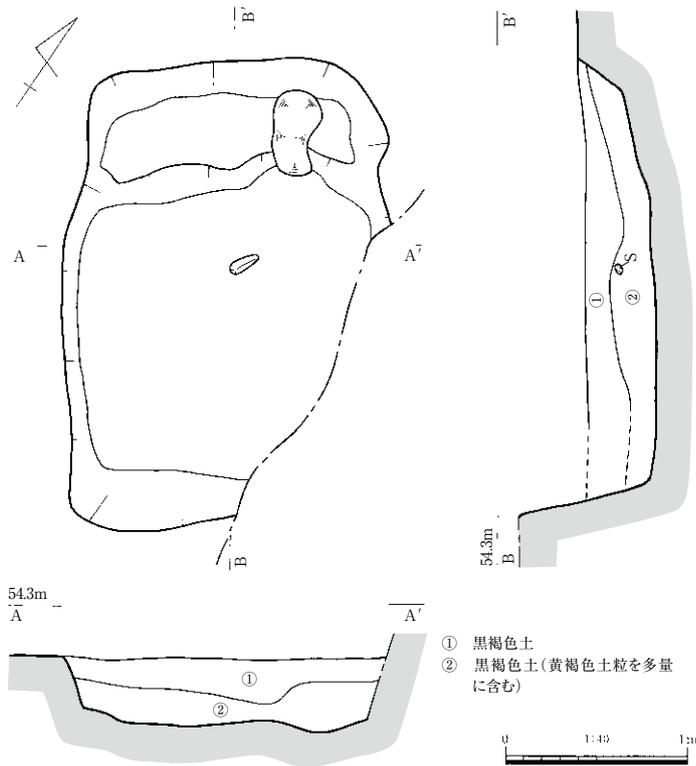


① 黒色土(5mm以下の明黄褐色土ブロックをわずかに含む)

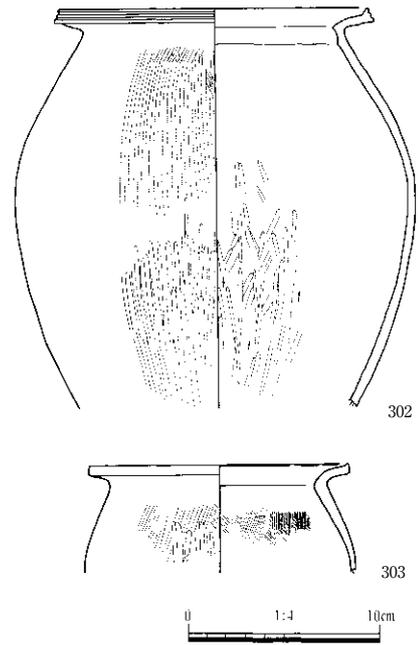
第139図 土坑16・遺物出土状況図



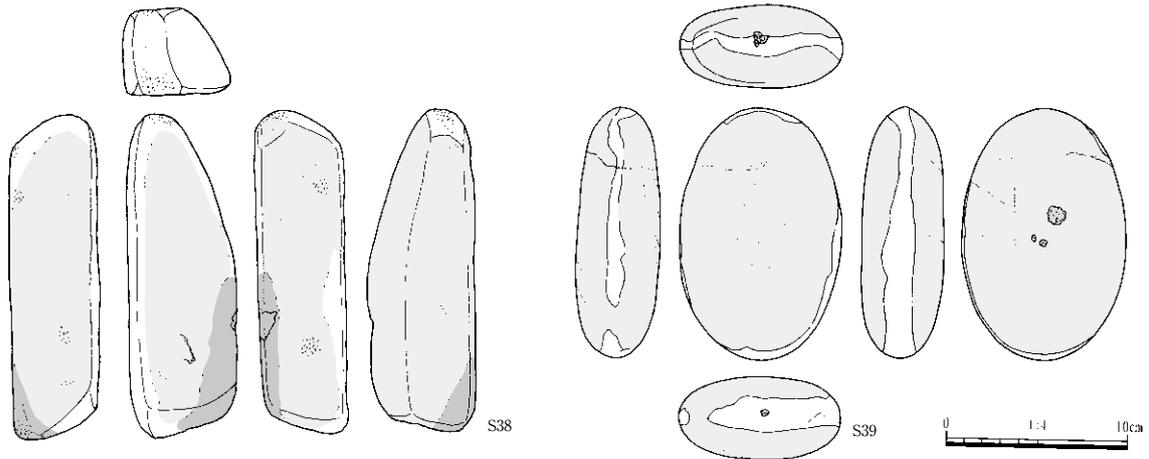
第140図 土坑16出土遺物



第141図 土坑17



第142図 土坑17出土遺物



第143図 土坑17出土遺物

は磨・敲石として使用されている。

本遺構の時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉～後葉ころと考えられる。

(野口)

土坑 18 (第 144 図、図版 15)

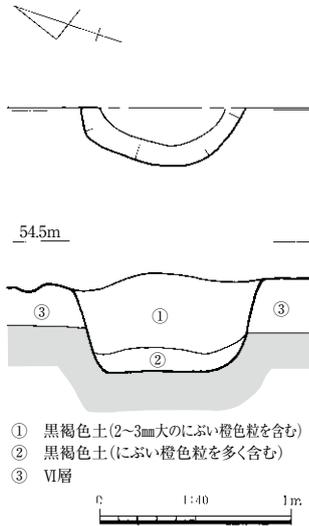
調査区東側、D1グリッド北西隅で確認した土坑で、遺構全体の半分強が調査区外に位置する。また、平面での検出は地山である第7遺構面での確認となったが、調査区東壁の断面では第6遺構面であるVI層からの掘り込みが確認された。

規模は南北95cm、深さは48cmを測る。埋土には黒褐色土が堆積するが、含まれる小礫の多寡から2層に分けられる。

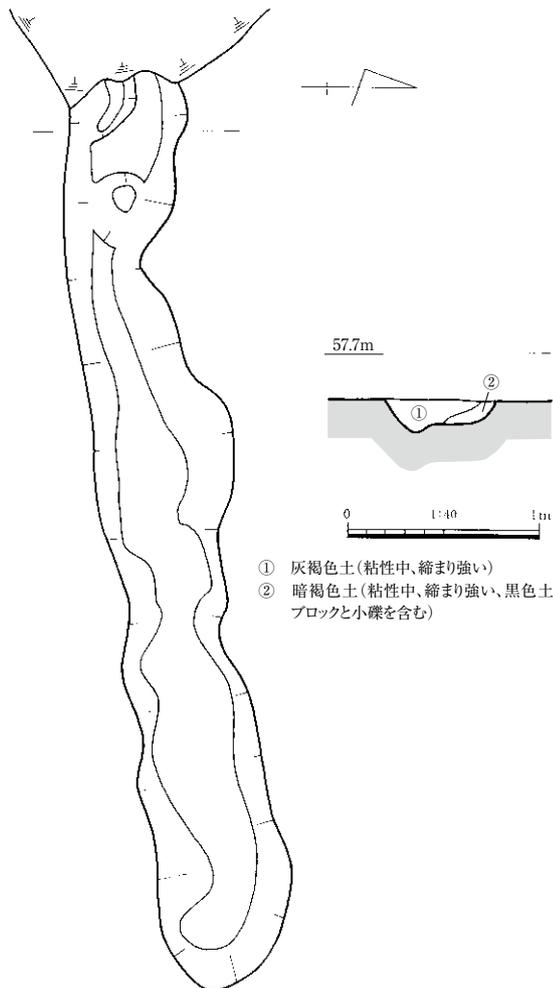
本遺構の時期は、VI層を検出面とすることから、弥生時代中期～古墳時代と考えられる。(野口)

溝 35 (第 145 図、図版 15)

調査区南西隅、I 5 グリッドに位置する。東西方向に走向し、西側は攪乱によって壊される。確認された範囲では、長さ 4.9 m、幅 40 ~ 74 cm、深さは西側で 18 cm を測る。埋土には灰褐色土、暗褐色土の 2 層が堆積する。このうち灰褐色土に関しては、現代の耕作土に色調に近いことから、攪乱の可能性もあるが、近世耕作土とも判別が困難であったため、近世以降の溝として扱った。(野口)



第144図 土坑18



第145図 溝35

溝 36・37 (第 146 図、図版 15)

F 4 グリッドに位置する溝状遺構で、溝 36 は部分的に途切れるものの北西 - 南東に走向する。溝 37 も西半部では北西 - 南東方向に伸びるが、東半部では東西方向に屈曲し、溝 36 中央部南側に接続する。

規模は、溝 36 が長さ 6.7 m、幅 20 ~ 60 cm、深さ 1 ~ 13 cm、溝 37 が長さ 3.5 m、幅 18 ~ 52 cm、深さ 2 ~ 11 cm を測る。底面の高さは標高で、溝 36 が西側 55.48 m、東側 55.34 m、溝 37 が西側 55.56 m、東側 55.37 m と西から東に向かい傾斜する。埋土は溝 36 に暗褐色土、褐色土の 2 層、溝 37 に褐色土が堆積する。溝 36 は前述した溝 19 の延長上に位置し、埋土の特徴も類似することから、確認される層位は異にするものの、本来は同一の遺構であった可能性が高い。また、溝 37 も溝 36 に接続することから、溝 36 と同一の遺構であったと判断される。時期は、溝 19 と同一であるならば、平安時代後半ころと考えられる。(野口)

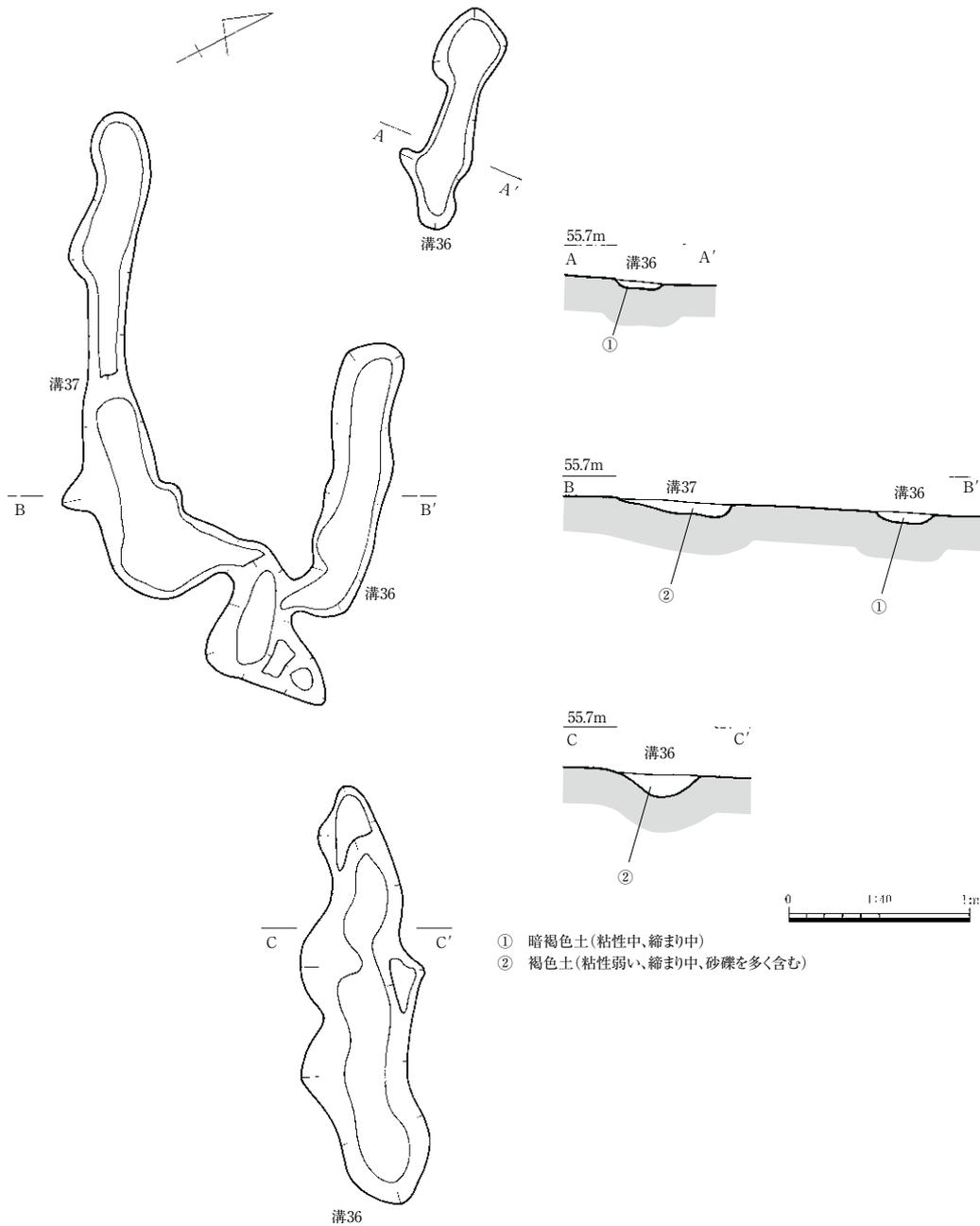
溝 38 (第 147 図、図版 16)

F 4 グリッド南東隅に位置する。ほぼ東西方向に走向する。長さ約 2.8 m、幅 29 ~ 50 cm、深さ 14 cm を測る。遺構底面両端の標高は、西端 55.80 m、東端 55.60 m と西から東に向かって低くなる。埋土は上層に暗褐色土、下層に砂礫層が堆積する。

本遺構は、弥生 ~ 古墳時代の遺構面である VI 層を確認面としたが、遺構埋土には暗褐色土が堆積する。III 層上面での遺構検出はできなかったことから、本遺構は III 層内に確認面があったものと思われるが、その場合、本遺構北側 6 m に位置する溝 36・37 とは走向方向を近くするなど関連した可能性がある。時期は遺構埋土より室町時代後半ころと思われる。(野口)

溝 39・P 88 (第 148 図)

D 5 グリッドに位置する。IV 層除去後、VI 層上面に

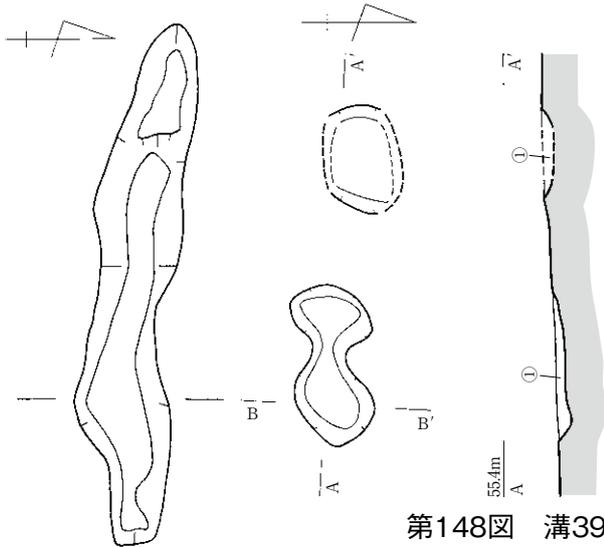


第146図 溝36・37

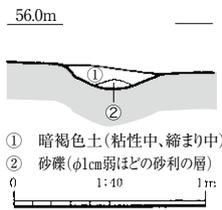
において検出した。本遺構は東西2つの落ち込みからなり、遺存状態が非常に悪い。これらの埋土は近似していることから、本来は同一遺構であり、底面が部分的に残存したものと想定している。なお、同一面に検出した古代耕作痕を切る。

平面形は東側が瓢箪状の形状をとり、西側は楕円形を呈す。東西方向を主軸とし、検出した長さは約1.8mである。検出面での幅は18～42cm、検出面からの深さは西端8cm、東端2cmを測る。底面の標高は西端55.12m、東端55.09mであり、東西の比高差は3cmである。断面形は皿状を呈し、埋土は灰褐色の砂礫が堆積する。埋土の堆積状況から判断して、遺構内は流水の環境下におかれていた可能性が高い。遺物は出土していない。

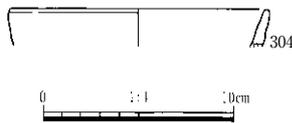
本遺構の時期は古代耕作痕を掘削していることから、9世紀後半以降と考えられる。(森本)



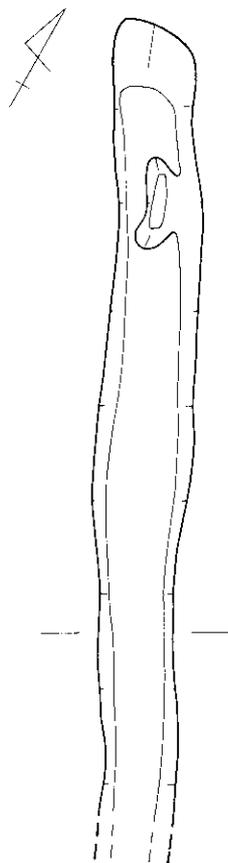
第148図 溝39・P 88



第147図 溝38



第149図
溝40出土遺物



- ① 黒灰褐色土(粘性中、縮まり強い)
- ② 灰褐色土(粘性中、縮まり中)

第150図 溝40

溝40 (第149・150図、図版16)

調査区南東隅、G 0 グリッドに位置する溝である。溝7調査中に確認された。N - 30° - W の方位で南北に走向し、南側は調査区外に展開する。規模は長さ4.3m、幅は40cmである。深さは20cm程度で、遺構底面の標高は南側で55.06 m、北端で54.76 mと南から北に向かい傾斜する。埋土には黒灰褐色土、灰褐色土の2層が堆積する。埋

土中からは土師器坏 304 が出土した。細片のためその特徴は明らかでないが、回転ナデによる調整と思われる。

本遺構の時期は、弥生～古墳時代の土層であるVI層上面の検出であったが、出土遺物から平安時代以降の時期が考えられる。(野口)

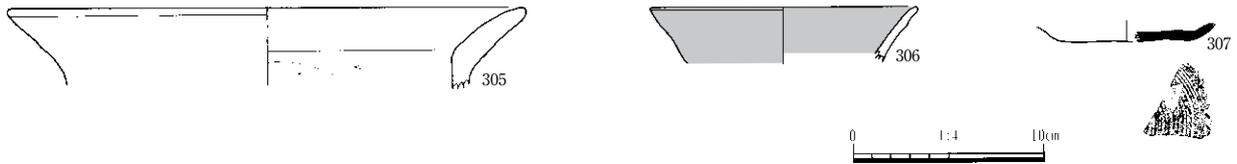
P 97 (第 152 図)

D 4 グリッドに位置する。IV層除去後、VI層上面において検出した。平面形はやや不整な楕円形状を呈す。検出面での規模は長軸約46cm、短軸約45cmを測る。検出面からの深さは約44cmを測り、底面の標高は約54.74 mである。断面形は逆台形状を呈す。土層断面を観察した結果、12cm程度の柱痕跡が認められる。遺物は出土していない。P 97 周辺には9世紀後半～10世紀後半と考えられるピット群を検出している。P 97 はこれらのピット群と埋土の色調が近似することから、同時期の遺構と想定している。(森本)

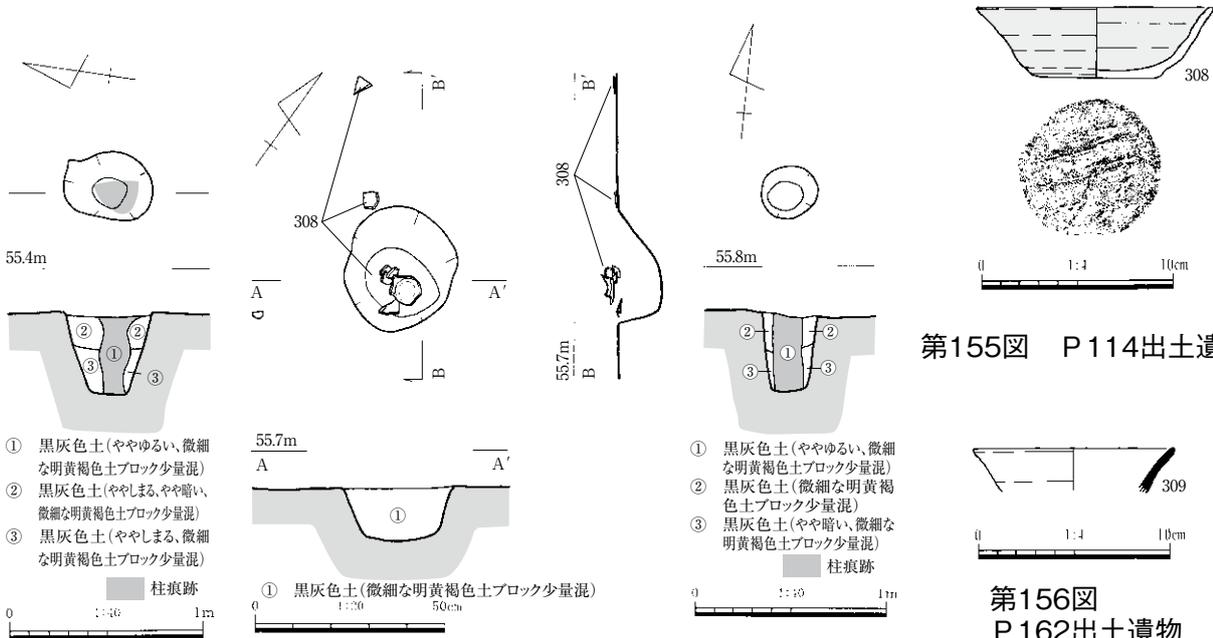
P 114 (第 153・155 図)

E 5 グリッドに位置する。IV層除去後、VI層上面において検出した。平面楕円形を呈し、検出面での規模は長軸約65cm、短軸約56cmを測る。検出面からの深さは約13cmを測り、底面の標高は約55.46 mである。断面形は逆台形状を呈す。埋土は黒色土の単層である。

P 114 上面より土師器坏 308 が出土している。比較的まとまりをもった状態で出土し、ほぼ完存する。内外面



第151図 VI層上面検出ピット出土遺物



第155図 P114出土遺物

第152図 P97

第153図 P114

第154図 P115

第156図
P162出土遺物

とも赤色塗彩が施される。

本遺構の廃絶時期は出土遺物より、9世紀後半ころと思われる。

(森本)

P 115 (第 154 図)

E 5 グリッドに位置する。IV層除去後、VI層上面において検出した。平面円形を呈し、検出面での規模は長軸約 39cm、短軸約 28cmを測る。検出面からの深さは約 43cmを測り、底面の標高は約 55.15 mである。断面形は逆台形状を呈す。土層断面を観察した結果、15cm程度の柱痕跡が認められる。遺物は出土していない。

P 115 周辺には9世紀後半～10世紀後半と考えられるピット群を検出している。P 115 はこれらのピット群と埋土の色調が近似することから、同時期の遺構と想定している。

(森本)

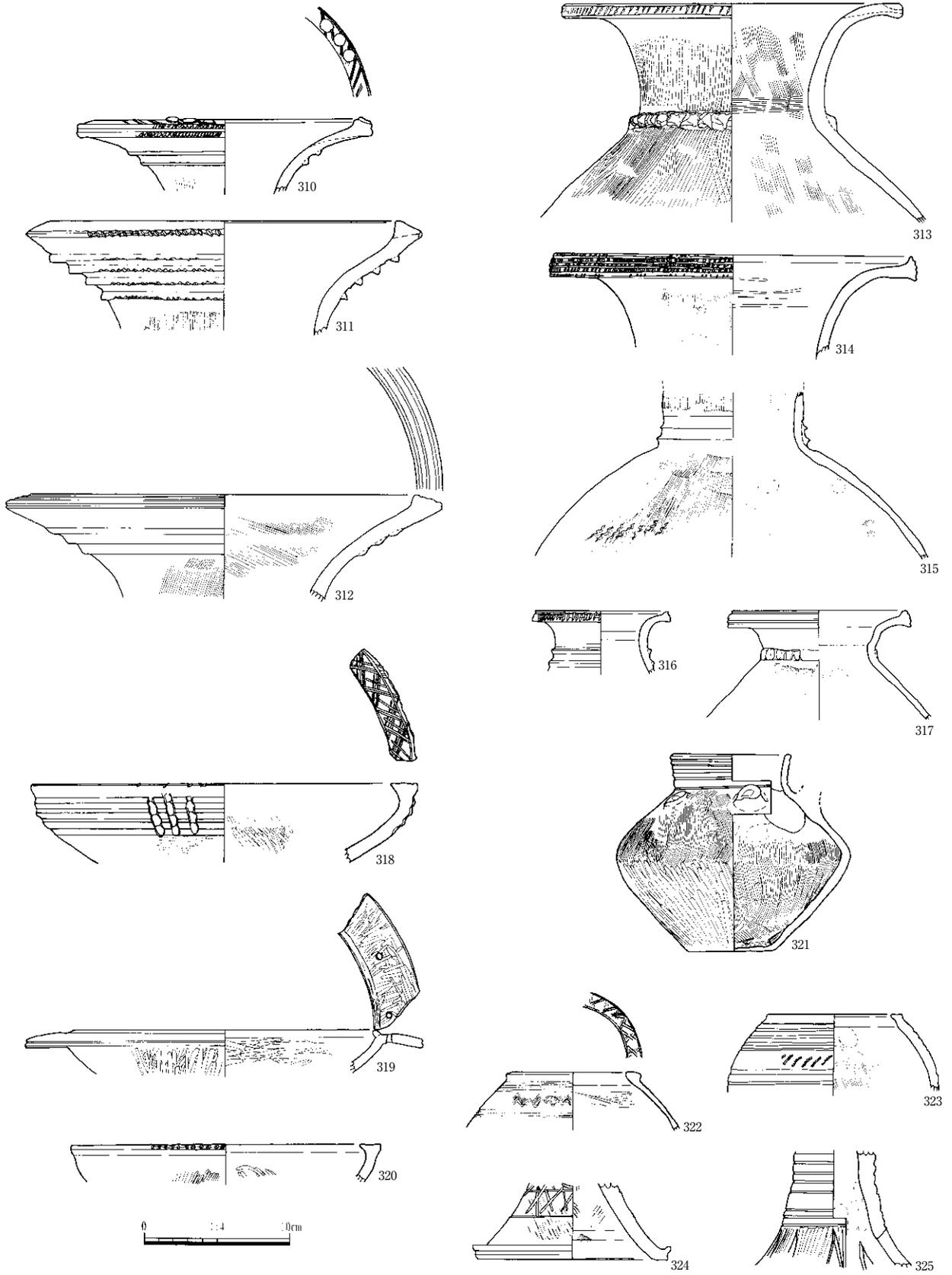
VI層上面検出ピット出土遺物 (第 151 図)

VI層上面にて検出したピット群より出土した遺物を掲載した。土師器 305・306 は P 82 出土である。坏 306 は内外面とも黒色処理を施された可能性がある。須恵器坏 307 は P 84 より出土し、底部外面には回転糸切りによる切り離し痕跡がみられる。

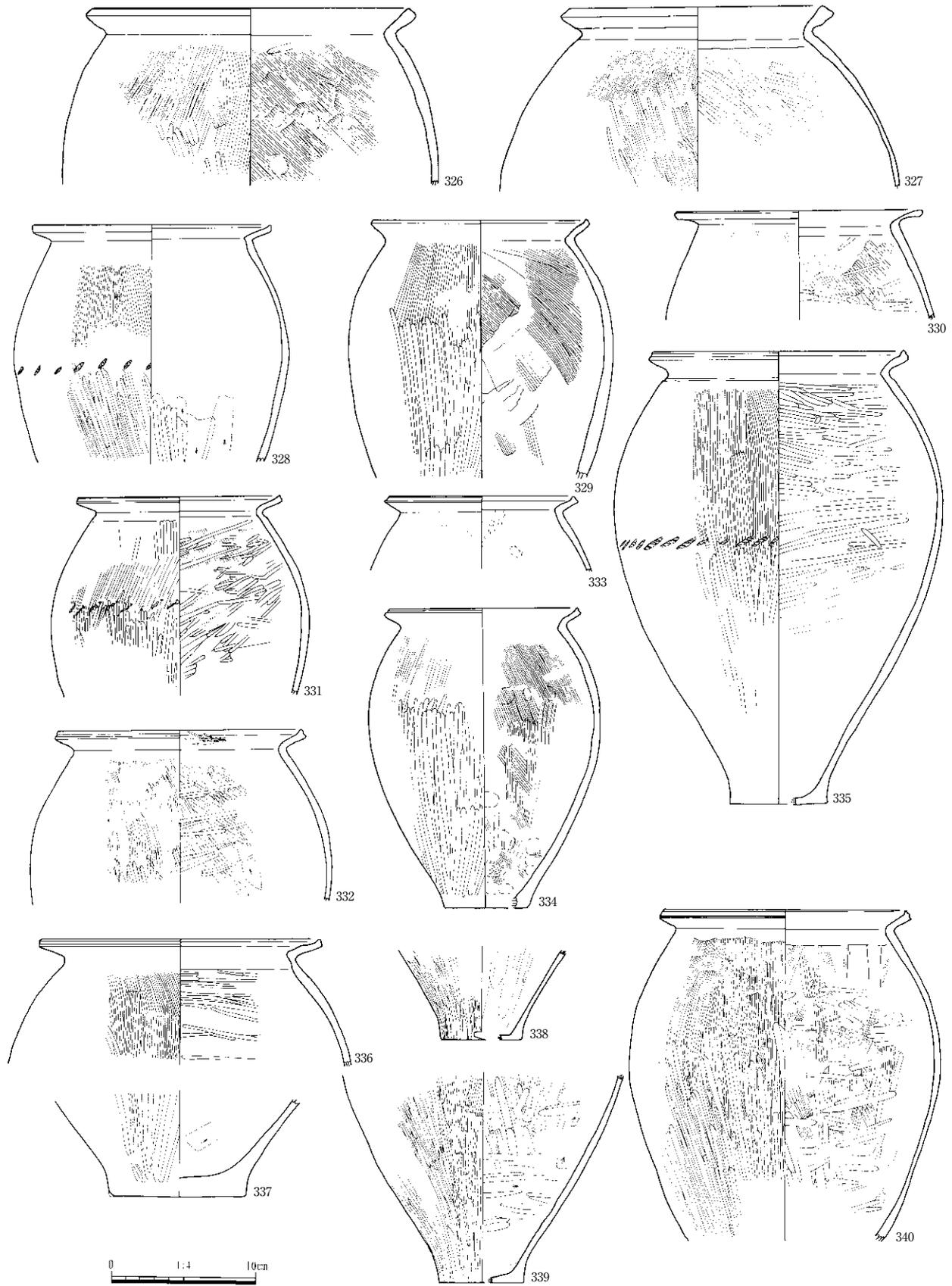
(森本)

遺構外出土遺物 (第 157 ～ 162 図)

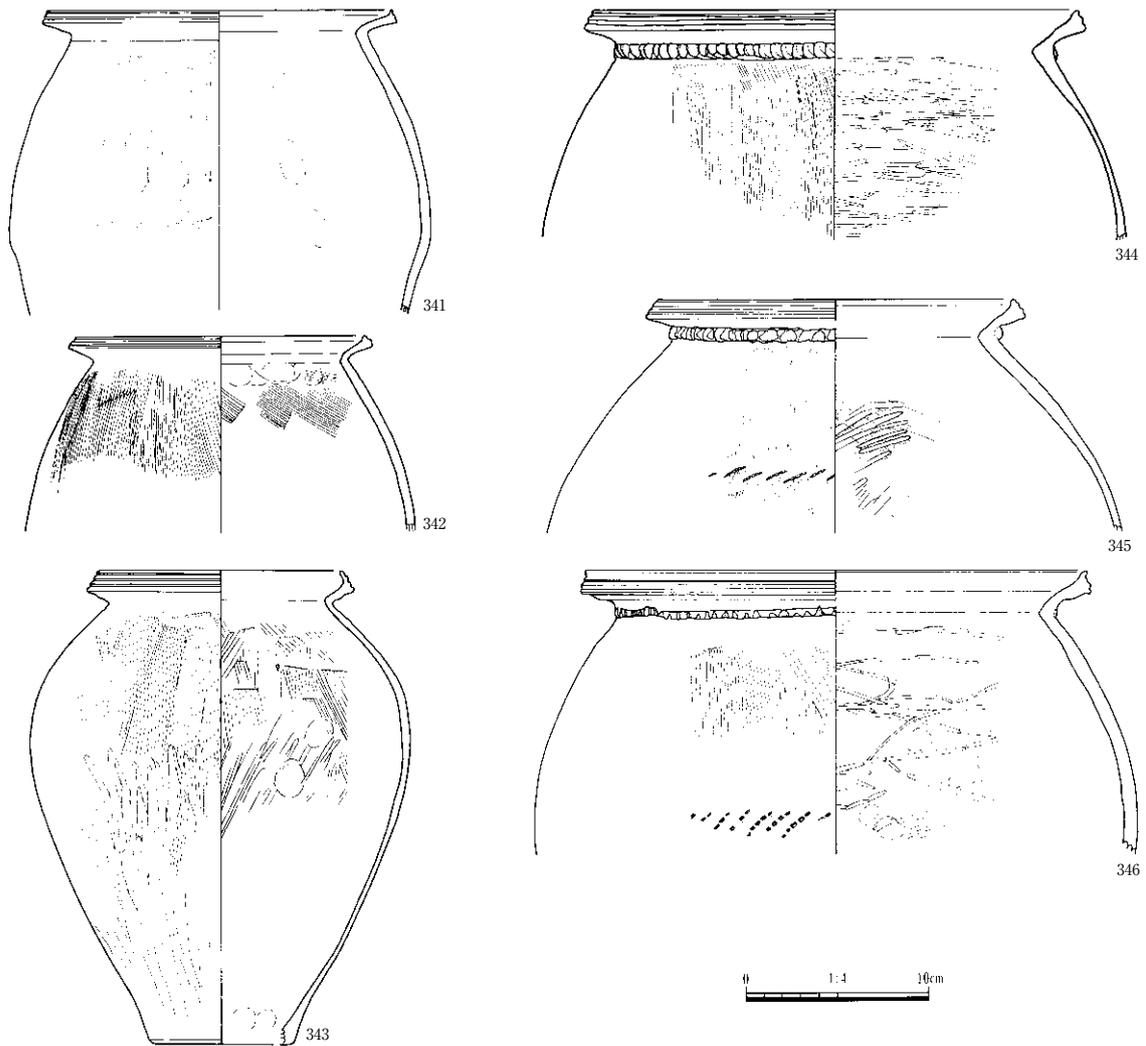
ここでは、VI層上面およびVI層中より出土した遺物を掲載した。310～350、S 40～46 を図化し、



第157図 遺構外出土遺物



第158図 遺構外出土遺物



第159図 遺構外出土遺物

そのうち 317・321・323・327・337・342・347、S 40・41 はVI層上面より出土した遺物である。

310～317は壺である。310は口縁端面に沈線文と円形浮文を施し、口縁端部にはキザミをいれ、1条の凹線をひく。口縁外面は断面三角の貼付突帯により装飾している。311は口縁部に断面三角の貼付突帯を施し、口縁端部と突帯にキザミをいれている。312は口縁端面に3条の凹線をひき、口縁部に断面三角の貼付突帯を施す。313は口縁端面にキザミをいれ、頸部には指頭圧痕貼付突帯を施す。314は口縁端部を上下にやや肥厚させている。口縁端面には4条の凹線をひき、キザミを施す。315は頸部から胴部にかけての破片である。頸部に断面三角の貼付突帯を2条施し、胴部には波状の刺突文がみられる。316は小型のもので、頸部には断面三角の貼付突帯を2条施す。317は口縁端面に3条の凹線をひき、頸部は指頭圧痕貼付突帯を施す。

321はいわゆる水差し形の土器である。把手部分は欠損しているものの、ほぼ完存する。器高は低く、胴部が算盤玉状を呈す。口縁部は5条の凹線をひき、胴部外面上半はハケ、下半はミガキによる調整痕跡が認められる。県内では、水差し形土器の出土は因幡に集中しており、西伯耆における貴重な資料となった。322・323は小型の無頸壺である。322は口縁端面に格子文、肩部には直線と波状の沈線文を施す。323は赤色塗彩され、胴部は凹線と刺突文を施す。

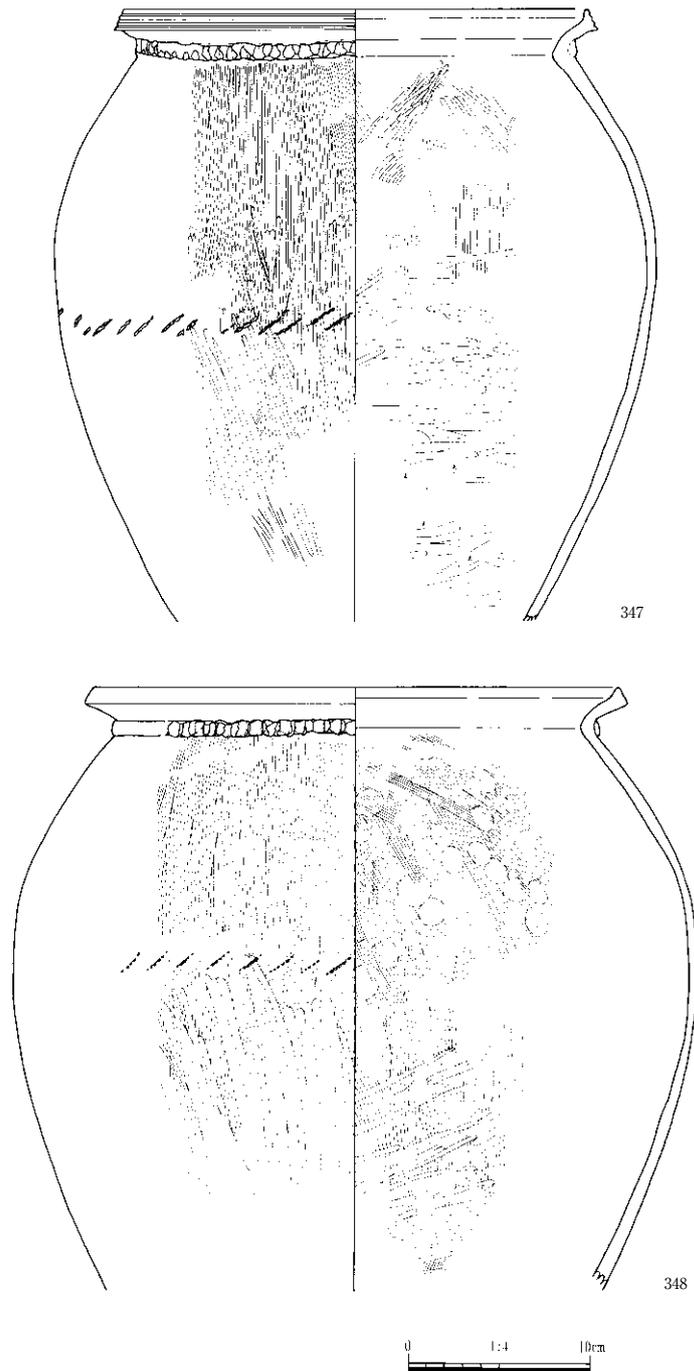
318は高坏と思われる。坏部は内湾して立ち上がり、口縁端部は左右に肥厚させている。口縁端部

は格子文、坏部外面には3条の棒状浮文を施す。319は水平口縁の高坏である。内外面ともミガキが顕著にみられ、口縁端面には2孔一対とみられる穿孔が穿たれる。320は鉢あるいは高坏であろうか。口縁端部にはキザミを施す。324・325はいずれも透しをもつ脚部である。324は直線及び格子目状の沈線文を施し、脚部端面には凹線状に窪む。325外面には凹線が多条にめぐる。

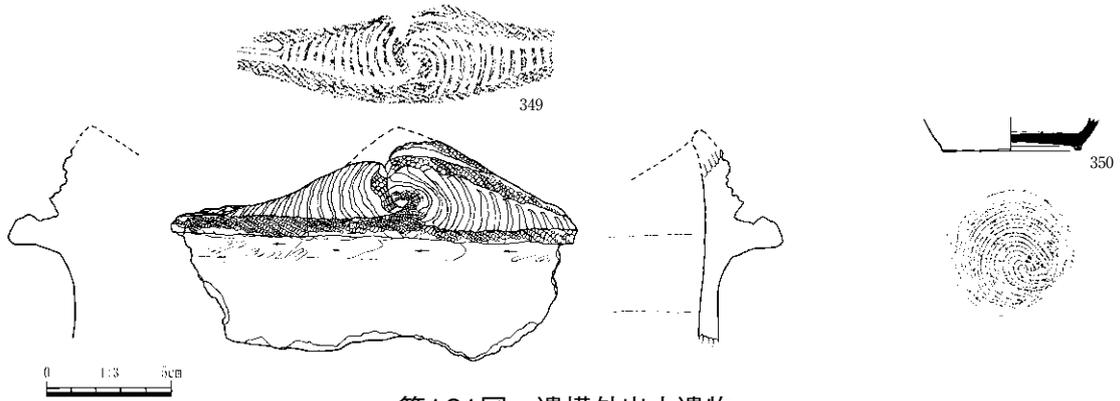
326～348は甕である。胴部外面上半はハケ、下半はミガキ調整されたものが主である。326～330・348は口縁端面が無文のものである。328は最大胴部に貝殻腹縁によるとみられる刺突文が施される。348は頸部に指頭圧痕貼付突帯が施される。圧痕は明瞭に残る。最大胴部は刺突文により装飾される。331～335は口縁端部が僅かに上方につまみ上げられ、口縁端面に1条の凹線がひかれる。335は頸部にも1条の凹線をひき、最大胴部には刺突文を施す。工具は貝殻腹縁であろうか。340～347は口縁端面に2または3条の凹線が引かれる個体である。340～342は口縁端部の肥厚は僅かだ

が、343は上方にかなり肥厚する。339・340は出土位置が近く、器形、調整が近似することから同一個体である可能性が高い。344～347は頸部に指頭圧痕貼付突帯が施される。344・345は圧痕が明瞭に残るが、346・347は貼付突帯に圧痕が施された後、ナデつけられている。345～347は最大胴部に刺突文が施される。349は縄文土器深鉢片。後期前葉の縁帯文土器で、波状口縁の波頂部を含む口縁部から頸部にかけての破片である。350は須恵器高台杯の底部片。底部に回転糸切り痕が残る。

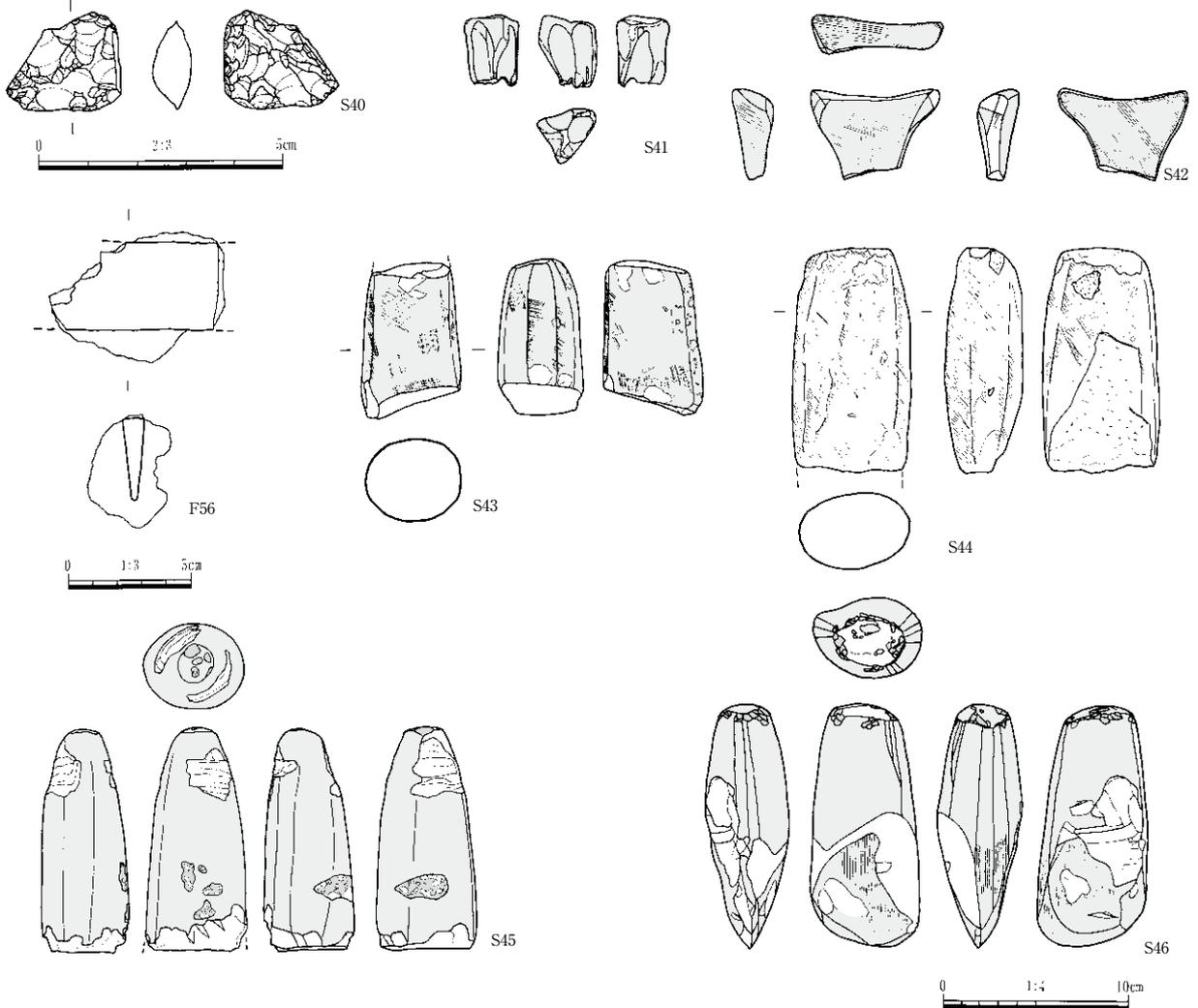
S40は黒曜石製の楔形石器。表裏とも全面に二次調整が加わり、周縁に使用に伴う潰れが見られる。S41・S42は砂岩製の砥石。いずれも全面が砥面となり、S42には細かい線条痕が多数観察できる。S43～S46は安山岩製の磨製石斧。刃部を欠損したものがほとんどであるが、いずれも断面楕円形の



第160図 遺構外出土遺物



第161図 遺構外出土遺物



第162図 遺構外出土遺物

両刃石斧と思われる。S43は刃部側が大きく欠損した後、欠損面を機能面とした磨り石に転用している。体部表面には石斧整形時の研磨痕が観察できる。S44も表面に整形に伴う研磨の痕跡が著しく見られる。S45は基部付近に装着痕の可能性のある窪みがいくつか見られる。また、基端部と表面に二次的に形成された敲打痕が見られ、刃部欠損後に敲石に転用されたものと思われる。S46は刃部付近に研磨痕が観察できる。

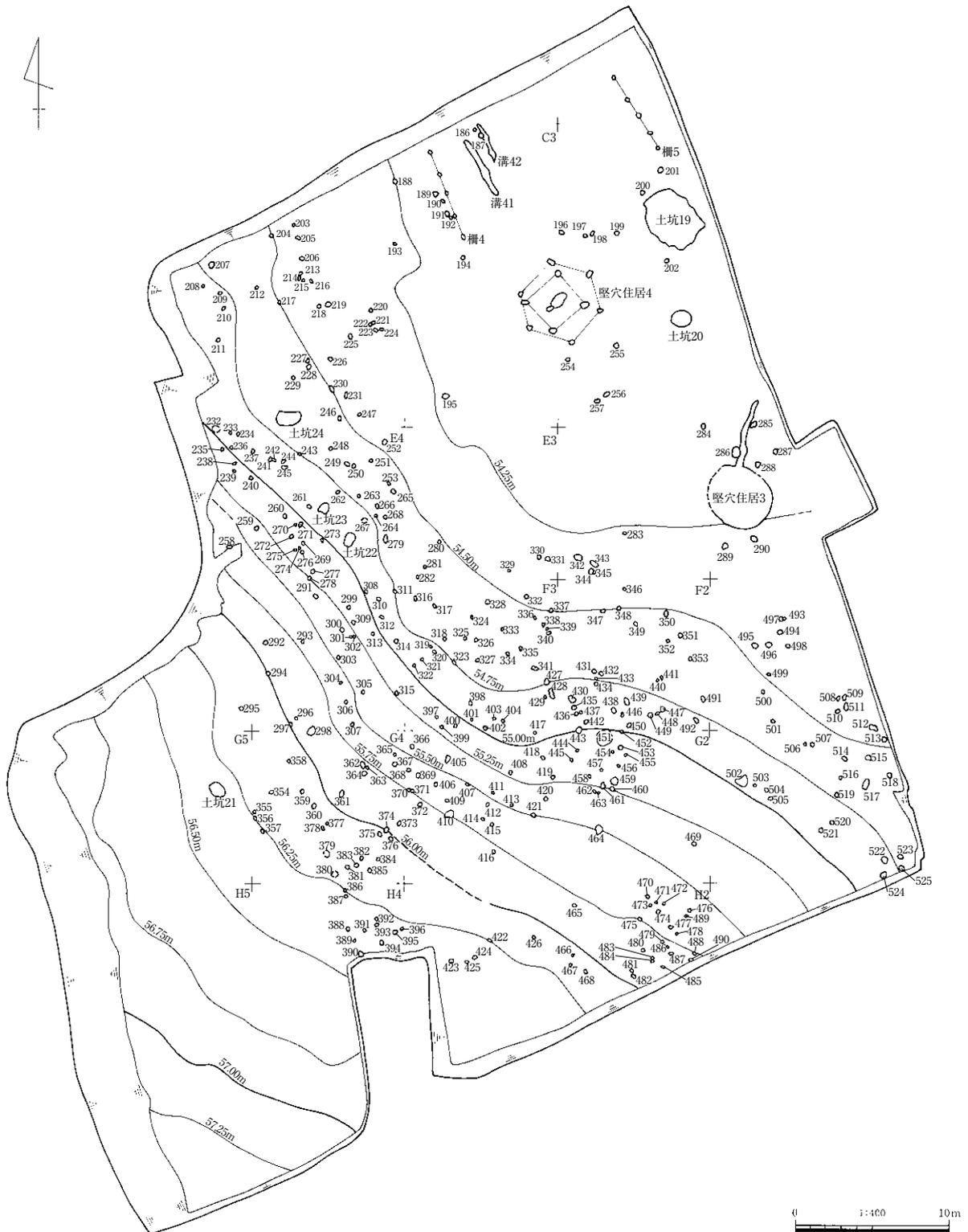
(森本)

表10 第6遺構面ピット一覧表 (計測単位: cm)

No.	長径	短径	深さ	埋土色調
74	29	25	40	灰褐色
75	31	28	28	灰褐色
76	24	23	24	灰褐色
77	33	27	15	灰褐色
78	28	20	22	灰褐色
79	56	23	17	暗灰褐色
80	78	61	49	暗灰褐色
81	33	32	17	黒灰色土
82	44	42	59	黒灰色土
83	40	36	47	-
84	83	40	57	黒灰色土
85	52	40	48	黒灰色土
86	42	30	35	黒灰色土
87	46	39	13	黒灰色土
88	58	40	8	黒灰色土
89	52	39	22	黒灰褐色
90	48	42	31	黒灰色土
91	42	40	42	黒灰色土
92	50	46	43	-
93	28	24	10	淡褐色
94	36	32	7	灰褐色
95	48	42	12	暗灰褐色
96	44	38	13	黒色土
97	46	34	44	暗褐色 暗褐色
98	56	40	34	黒灰色
99	35	32	51	黒灰色
100	40	33	33	黒灰色
101	28	28	12	黒灰色
102	30	30	32	黒灰色
103	30	26	11	灰褐色
104	21	20	14	灰褐色
105	20	18	11	灰褐色
106	27	26	31	灰褐色
107	24	22	15	灰褐色
108	22	19	15	黒灰色
109	22	17	12	黒灰色
110	18	18	11	灰褐色
111	26	19	15	灰褐色
112	22	21	12	灰褐色
113	26	24	51	黒灰色
114	32	27	13	黒灰色
115	30	29	41	黒灰色
116	30	28	45	黒灰色
117	26	24	53	黒灰色
118	18	15	18	黒灰色
119	32	30	46	黒灰色
120	42	36	45	黒灰色
121	26	25	41	黒灰色
122	34	32	30	黒灰色
123	22	18	9	黒灰色
124	20	18	18	灰褐色
125	23	20	17	灰褐色
126	20	19	11	灰褐色
127	22	20	10	灰褐色
128	51	38	13	暗灰褐色 暗灰褐色
129	43	21	21	黒灰褐色
130	32	27	33	黒灰褐色
131	30	27	29	黒灰褐色
132	34	28	18	黒灰褐色
133	33	30	29	黒灰褐色
134	28	24	30	黒灰褐色
135	35	31	29	黒灰褐色
136	30	29	25	黒灰褐色
137	40	28	12	黒色土
138	39	25	19	暗褐色土
139	35	23	14	暗褐色土
140	58	28	25	暗褐色土
141	36	31	23	暗褐色土
142	19	18	16	黒色土
143	28	26	31	黒灰褐色
144	37	36	15	黒灰褐色
145	37	35	38	黒灰褐色
146	26	24	34	黒灰褐色
147	31	31	18	黒灰褐色
148	33	28	18	黒灰褐色
149	38	36	32	黒灰褐色
150	22	20	21	黒灰褐色
151	24	21	28	黒灰褐色
152	28	14	15	黒灰褐色
153	35	25	26	黒灰褐色
154	37	18	17	黒灰褐色
155	55	22	26	黒灰褐色
156	26	20	25	黒灰褐色
157	38	30	22	黒灰褐色
158	30	22	17	黒灰褐色
159	23	23	18	黒灰褐色
160	60	22	14	黒灰褐色
161	59	25	12	黒灰褐色
162	62	47	23	黒灰褐色
163	41	32	20	黒灰褐色
165	21	20	12	黒色土
164	28	26	36	黒灰褐色
166	49	26	12	黒灰褐色
167	36	32	25	黒灰褐色
168	35	26	31	黒灰褐色
169	30	21	5	黒色土
170	24	23	21	黒色土
171	38	35	24	黒色土
172	22	20	20	黒灰褐色
173	32	25	18	黒灰褐色
174	80	64	17	黒色土
175	41	28	24	黒灰褐色
176	43	35	34	黒褐色
177	26	24	30	黒褐色
178	39	36	35	黒褐色
179	31	30	34	黒褐色
180	19	18	40	黒色土
181	43	36	32	黒色土
182	27	24	26	黒色土
183	21	20	22	黒色土
184	28	27	26	黒色土
185	21	20	15	黒色土

第8節 第7遺構面の調査

本遺構面の高低差は、東西でおよそ3mと西から東に向かい傾斜した地形であるが、調査区西側から中央付近にかけてはやや急な傾斜をした地形を、東側では非常になだらかな地形を呈する。確認さ



第163図 4区第7遺構面遺構配置図

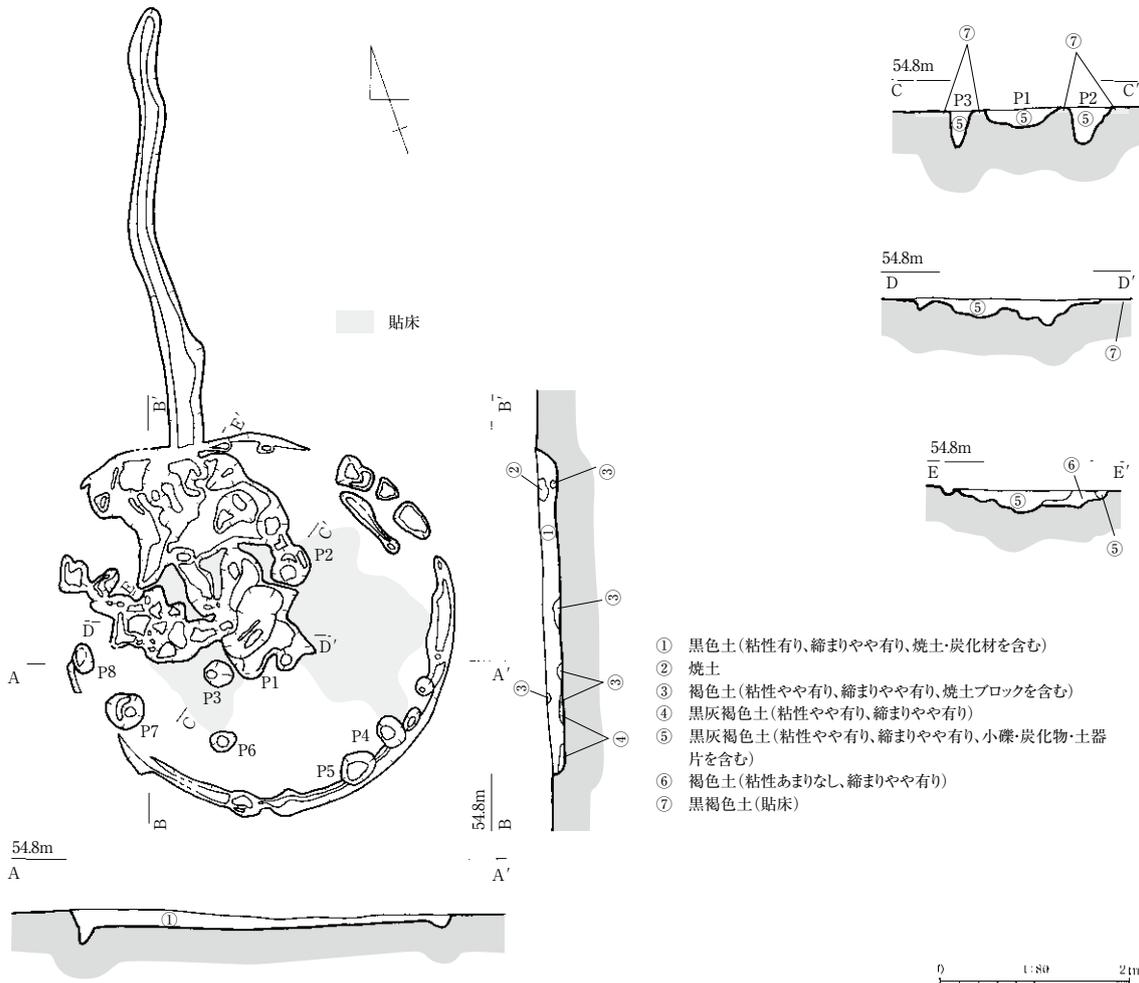
れる遺構には竪穴住居跡、土坑、溝、柵などが見られるが、いずれも埋土に黒色土が認められることなどから、その上位に位置するⅥ層での検出漏れの遺構、もしくはⅥ層中にさらに遺構面が存在したと思われる。(野口)

竪穴住居3 (第 163 ~ 166 図、図版 17)

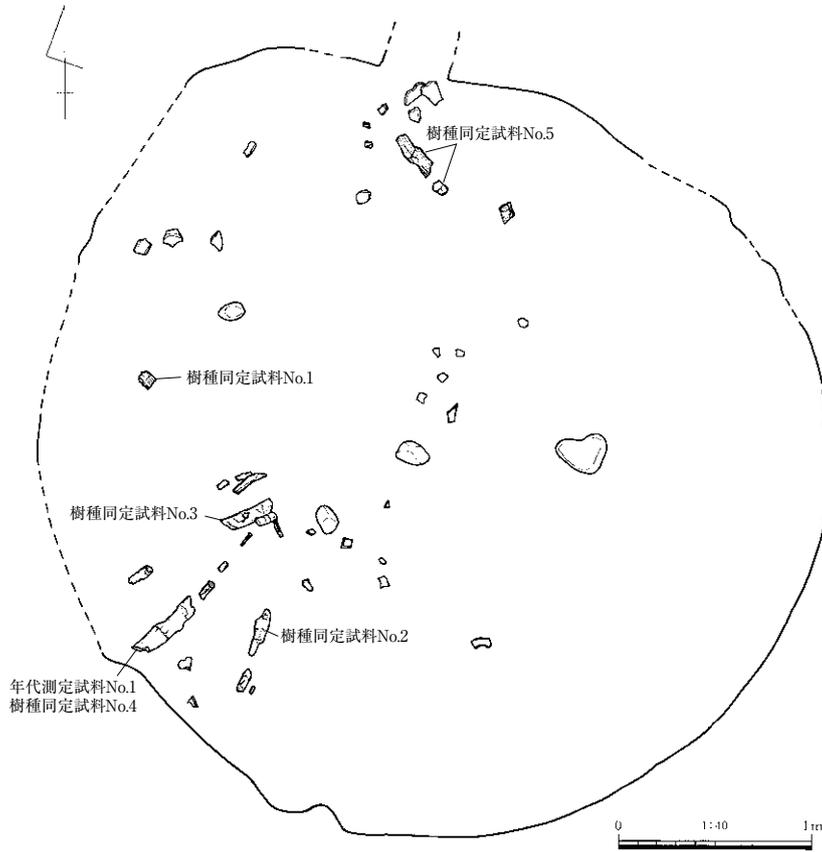
調査区東側、E 1 グリッドに位置する竪穴住居跡である。Ⅶ層上面で検出したが、後述する遺構埋土の状況、本遺跡のⅥ層上面で確認される遺構の時期等を考えるならば、本来の遺構掘り込み面は、Ⅵ層であったと思われる。

本住居跡の規模は、南北 4.1 m、東西 4.1 m、検出面からの深さ 18cm を測り、北側には確認できる範囲で長さ 4.6 m の溝が取り付けられる。検出面から床面までの埋土は 3 層に分けられるが、主として本来の確認面であったと考えられるⅥ層と類似した黒色土 (①層) が堆積する。この層には焼土、炭化物、炭化材が認められることから焼失住居であったと考えられる。認められる炭化材は 4 ~ 40 cm を測り、木目等から材の主軸がわかるものは、住居の中央方向をむき、垂木等に用いられた建築部材であったと思われる。

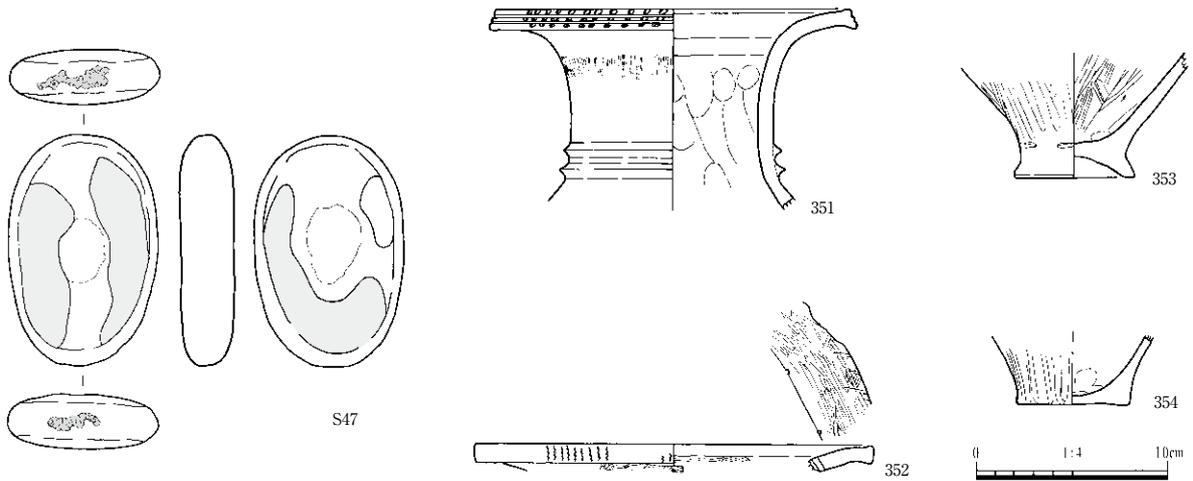
床面には、北側を中心に貼床が施され、周壁溝、柱穴、中央ピットほか、歪な掘り込みが認められる。周壁溝は幅 12 ~ 26cm、最深部で 18cm のものが部分的にめぐる。柱穴は中央ピット (P 1) を挟んで P 2 と 3 が認められることから 2 本柱の建物であったと考えられる。また、この柱穴よりも北西側で



第164図 竪穴住居3



第165図 竪穴住居3遺物出土状況図

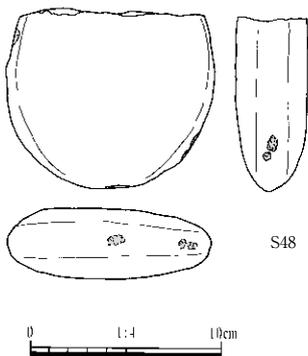


第167図 竪穴住居3出土遺物

は、壁面までの範囲で歪な掘り込みが確認された。調査当初、貼床とも考えられたが、埋土中に炭化物が含まれることから住居焼失時には開いていたと判断される。そして、この掘り込みから住居北側に向かって長さ4.6 mの範囲で、幅約30cmの溝が確認された。この溝が排水等を目的とした溝であった場合、溝底面の比高差から溝はさらに長くないとその用を足さないが、調査区壁面での検出はできなかった。

出土遺物には351～354、S47・48が見られる。352は壺

第166図 竪穴住居3出土遺物



口縁部で、外面に貝殻腹縁による刻み目が入られる。上面には櫛描きで格子文、もしくは鋸歯文が入られるが、その後のミガキ調整により不明瞭である。また、上面から下方に向かう穿孔も2箇所確認される。351も壺口縁から頸部のもので、口縁部には2条の凹線の後、刻みが施される。また頸部には2本の突帯が張付けられる。353、354は甕底部の破片である。

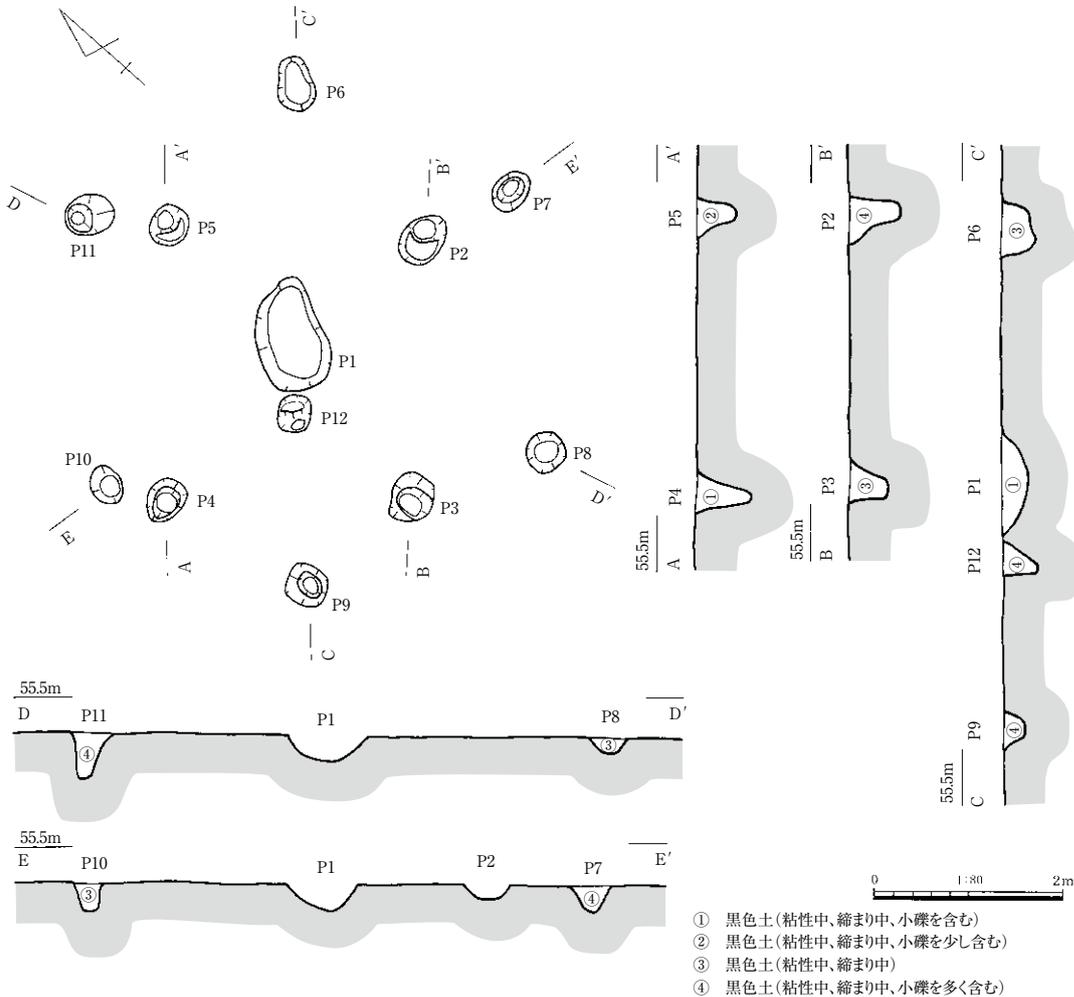
本住居の時期は、出土遺物から弥生時代中期中葉～後葉と考えられる。また、本住居では出土炭化材を放射性炭素年代測定によって分析したが、実年代でおよそ2,200前、紀元前2世紀代の年代が測定される。
(野口)

竪穴住居4 (第167図、図版16)

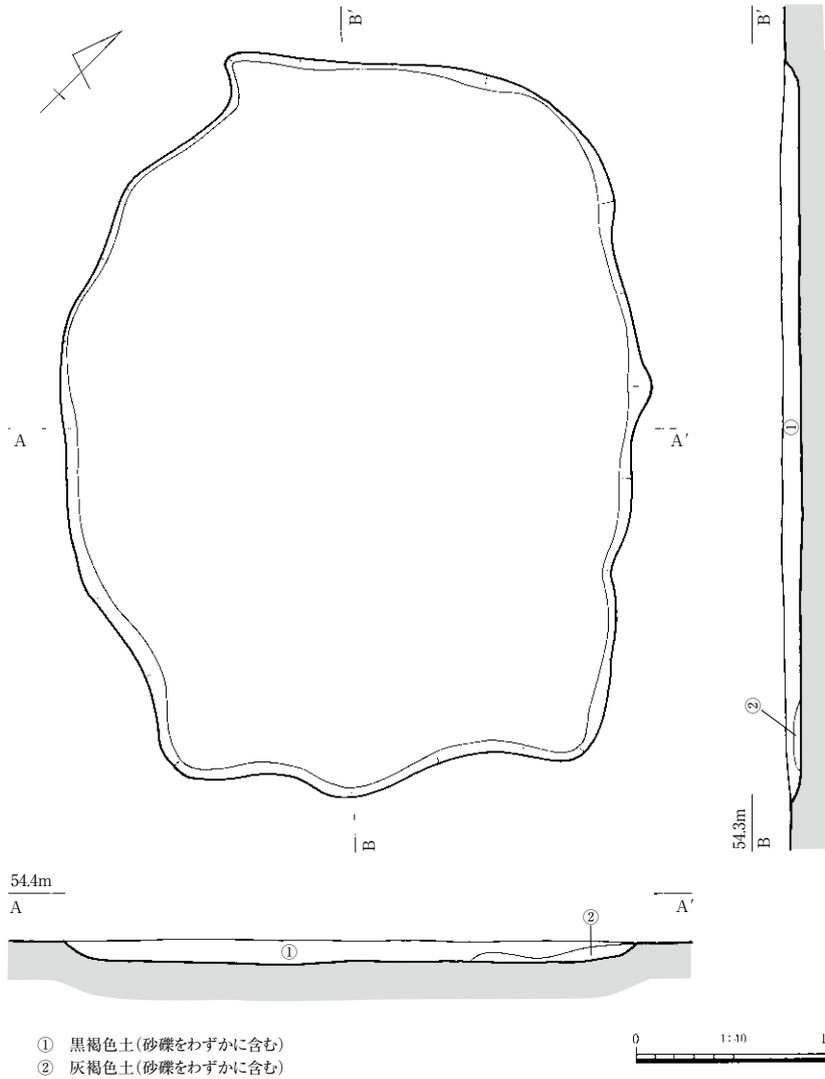
調査区の北東側、D2グリッドに位置する竪穴住居跡である。確認できた段階では、すでに床面よりも低い高さまで掘り下げており、柱穴及び中央ピット、関連する可能性があるピットのみの遺存状況である。

確認された柱穴は、外側を六角形、内側を四角形に配している。中心部には中央ピット、南西側にP11が掘り込まれる。規模は柱間であるが、外側が5.4m、内側が4.6～5.0mを測る。

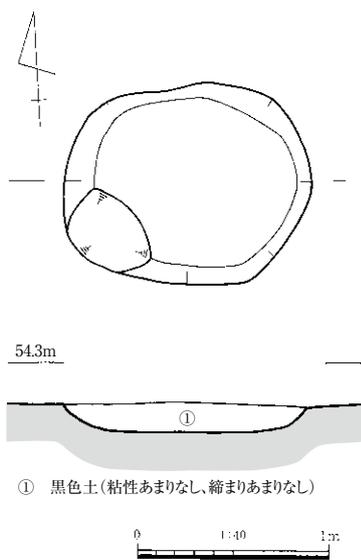
以上のような本住居跡であるが、柱穴内にみられる埋土から、本来はVI層からの掘り込みと考えられる。そのほか検出面に周壁溝等の住居施設が確認されないことから、床面は同調査区で確認される竪穴住居跡と異なり、VI層中に作られていたと判断される。



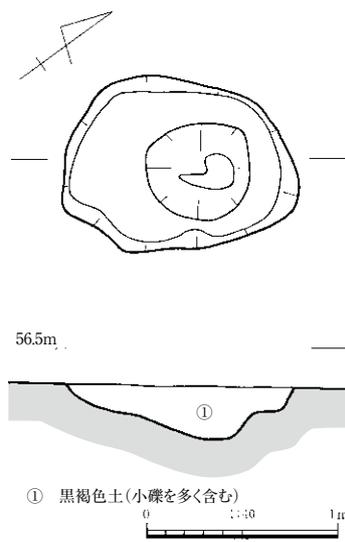
第168図 竪穴住居4



第169図 土坑19



第170図 土坑20



第171図 土坑21

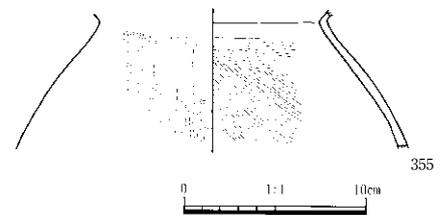
また、拡張もしくは縮小かの判断は付かないが、建替えを行っていると思われる。

本遺構は、前述のとおり床面下まで削平してしまったため出土遺物等は明らかでないが、周辺の遺構から弥生時代中期中葉～後葉のころと思われる。（野口）

土坑 19（第 168・171 図、図版 18）

C 2 グリッドに位置する。平面形は不整で、長軸約 3.9 m、短軸約 3.0 m、深さは 13cm と浅い。埋土には黒褐色土、灰褐色土が堆積し、いずれも砂礫を含む。Ⅶ層上面で検出したため、検出状況ではたわみ状を呈すが、埋土にⅦ層上層に堆積するⅥ層に由来すると思われる黒褐色土が堆積することから、本来の確認面はⅥ層中、もしくは上面であったと考えられる。

また、同様の遺構は 15 年度に調査が行われた 5 区でも 3 基ほど確認されている（平成 15 年度報告土坑 22・24・25）。うち 2 基に関しては、埋土に炭化物や焼土などが認められることから、積極的に本遺構との関連を推察することはできない。しかし、土坑 24 については埋土の色調や砂礫が含まれることなど共通性がみられる。



第172図 土坑19出土遺物

遺物には弥生土器 355 が出土する。肩部の破片で内外面ともハケによる調整を基調とする。

本遺構の時期は、埋土状況等から弥生時代中期中葉～後葉ころと考えられる。(野口)

土坑 20 (第 169 図、図版 18)

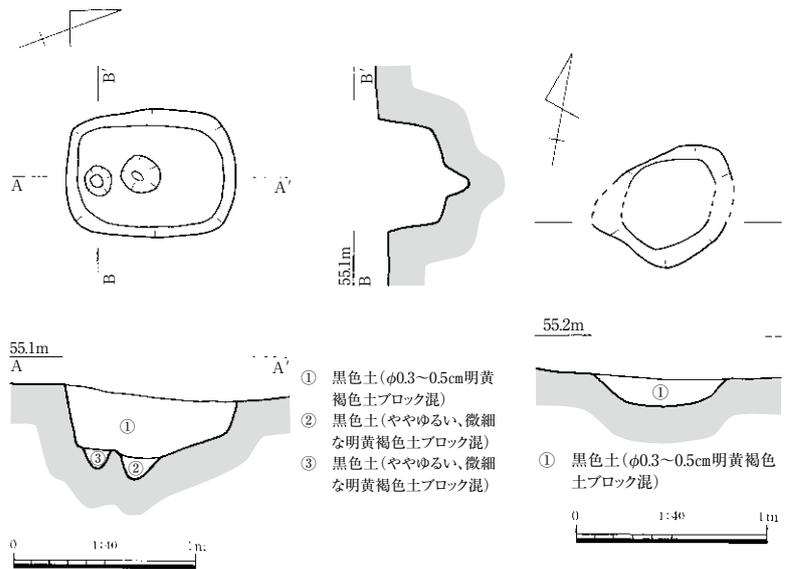
D 2 グリッド北東側に位置する。平面楕円形の土坑で、規模は長軸約 1.3 m、短軸約 1.1 m、深さ 16cmを測る。埋土は小礫を多く含んだ黒色土が堆積する。これはVI層に由来する土であると考えられることから、本来の遺構確認面はVI層中、もしくは上面であったと思われる。

本遺構の時期は、埋土の状況から弥生時代中期～古墳時代と考えられる。(野口)

土坑 21 (第 170 図)

G 5 グリッドに位置する、平面やや歪んだ楕円形の土坑である。長軸 1.24 m、短軸 94cm、深さ 28cmを測る。埋土には小礫を含んだ黒褐色土が見られるが、これは確認面直上に堆積するVI層に由来する土であると考えられることから、本来の遺構確認面はVI層中もしくは上面であったと思われる。

本遺構の時期は、埋土の状況から弥生時代中期～古墳時代と考えられる。(野口)

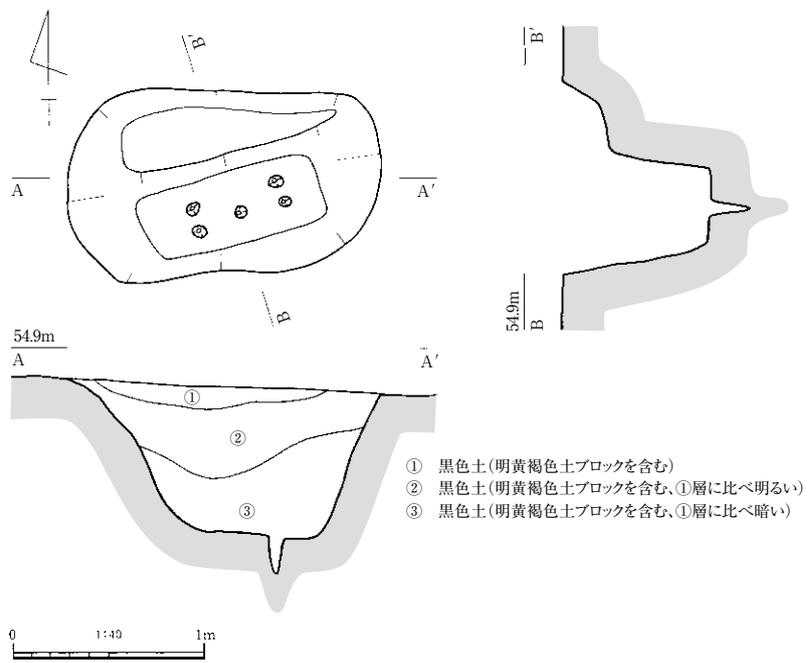


第173図 土坑22

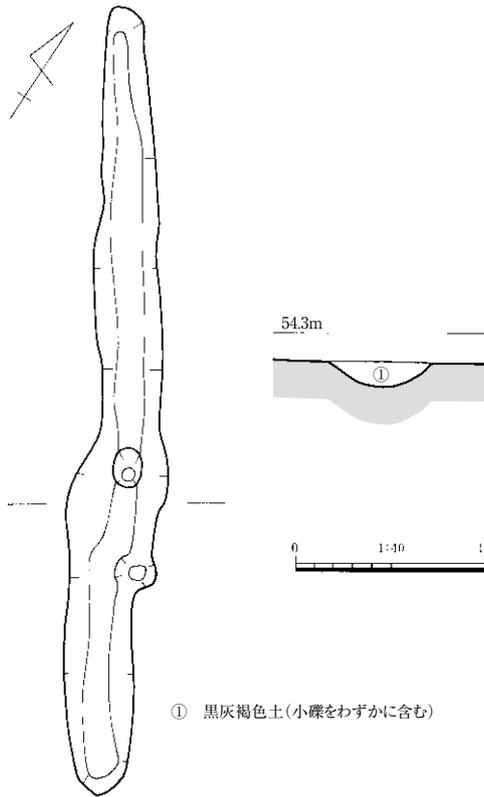
第174図 土坑23

土坑 22 (第 172 図、図版 18)

E 4 グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、検出面での規模は長軸 94cm、短軸 70cm、検出面からの深さは 41cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、やや中央部が窪む。底面の規模は長軸 81cm、短軸 57cmを測る。埋土は 3 層に分層でき、黒色土を主体となす。底面直上には、小ピットを 2 基検出した。底面中央部に 1 基、南側に 1 基存在する。本遺構の形態から判断し、落とし穴と推察される。遺物は出土していない。(森本)

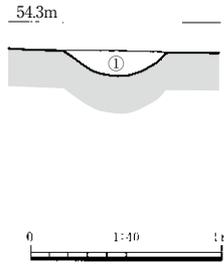


第175図 土坑24



土坑 23 (第 173 図、図版 18)

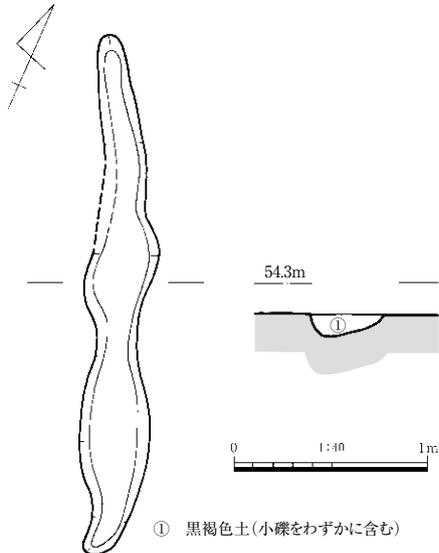
E 4 グリッドに位置する。検出面の平面形は不整な円形を呈す。検出面での規模は長軸 74cm、短軸 58cm、検出面からの深さは 17cm を測る。断面形は皿状を呈し、底面の規模は長軸 46cm、短軸 45cm を測る。埋土は黒色土の単層である。遺物は出土していない。(森本)



土坑 24 (第 174 図、図版 18)

D 4 グリッドに位置する。検出面の平面形は楕円形を呈し、北側には長軸 115cm、最大幅 30cm のテラスをもつ。検出面での規模は長軸 164cm、短軸 99cm、検出面からの深さは 82cm を測る。底面の規模は長軸 93cm、短軸 39cm であり、比較的幅が狭い隅丸長方形を呈す。埋土は 3 層に分層でき、黒色土を主体となす。底面直上には、小ピットを 5 基検出した。直径 8cm、底面からの深さが 9～21cm 程度のもので、底面中央部に 1 基、その中央部の 1 基を中心に東西に 2 基ずつ存在する。本遺構の形態から判断し、落とし穴と推察される。遺物は出土していない。(森本)

第176図 溝41



溝 41 (第 175 図、図版 18)

調査区北側、C 3 グリッドで確認した。N - 30° - W で南東 - 北西方向に走向する。長さ 4.2 m、幅 20～53cm、深さは中央部で 12cm を測る。埋土に黒灰褐色土が堆積することから、本来の遺構確認面は上層の VI 層中、もしくは上面にあったものと思われる。

本遺構の時期は、出土遺物は見られなかったが、埋土等確認される状況から、弥生～古墳時代と考えられる。また、約 1 m 東には後述の溝 42 が存在する。同じ方向に走向し、一連の遺構であった可能性が高い。(野口)

第177図 溝42

溝 42 (第 176 図、図版 18)

C 3 グリッドに位置する、上述の溝 41 の東側に隣接する。南東 - 北西方向に走向し、長さ 2.7 m、幅 20～38cm、深さは中央部で 11cm を測る。遺構底面の標高は両端とも 54.10 m と等しい。前述の溝 41 同様、埋土に黒褐色土が堆積することから、本来の遺構確認面は上層の VI 層中、もしくは上面にあったものと思われ、時期も弥生～古墳時代と考えられる。(野口)

柵4 (第177図)

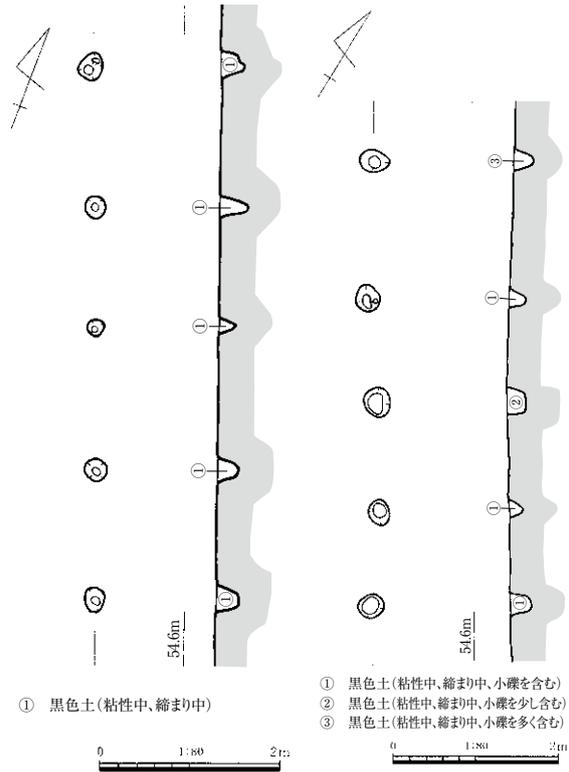
調査区北側、C3グリッドに位置する。北側にさらに展開する可能性があるものの確認された範囲では、N-25°-Wの方向にピット5基が6mほど並ぶ。柱穴間の距離は1.4~1.6mである。

本遺構の時期は、出土遺物は見られなかったが、埋土等確認される状況から、弥生~古墳時代と考えられる。(野口)

柵5 (第178図)

調査区北東側、B2グリッドに位置する。N-30°-Wの方向にピット5基が5.4mほど並ぶ。柱穴間の距離は1.2~1.6mである。

本遺構の時期は、出土遺物は見られなかったが、埋土等確認される状況から、弥生~古墳時代と考えられる。(野口)

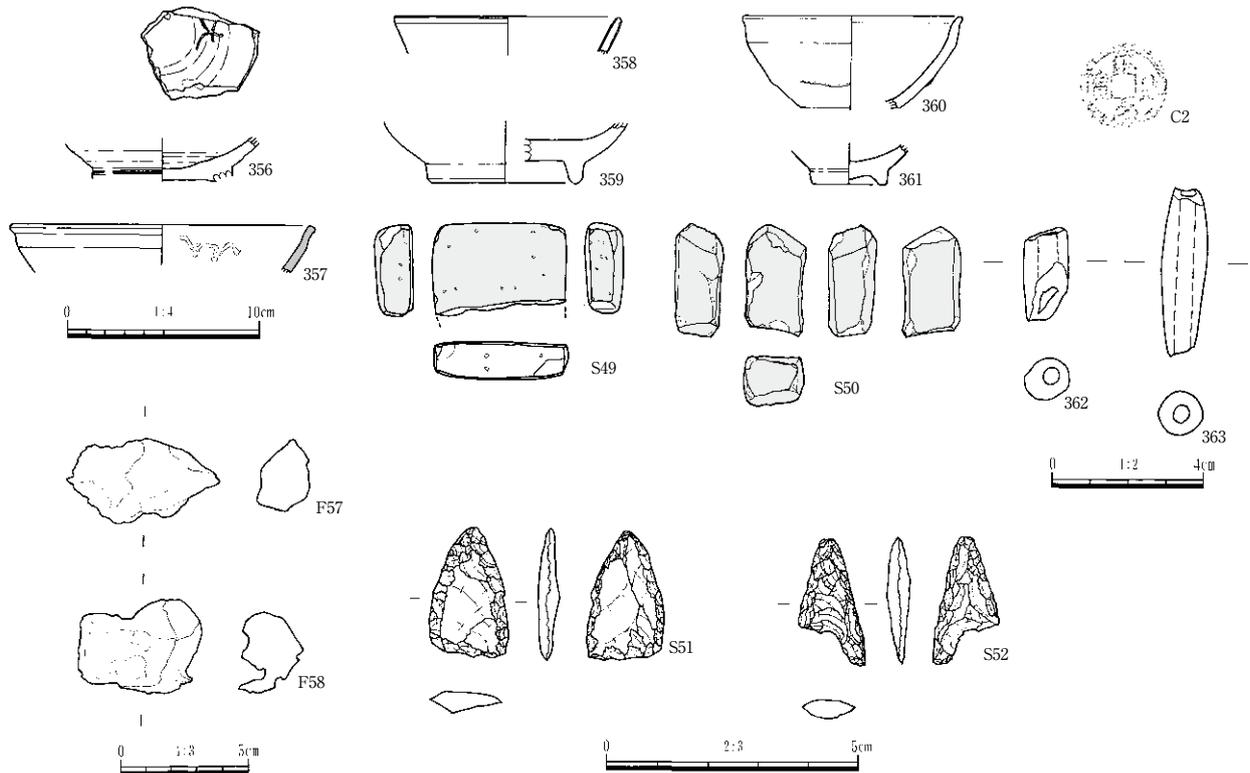


第178図 柵4

第179図 柵5

表土出土遺物 (第179図)

表土中からは弥生時代から近世の遺物が出土するが、356など内面底部に「大」状にヘラ書きされた土師器などもみられる。(野口)



第180図 表土・調査区内出土遺物

表11 第7遺構面ピット一覧表 (計測単位: cm)

No.	長径	短径	深さ	埋土色調
186	30	24	19	黒色土
187	41	40	18	黒色土
188	34	28	36	黒色土
189	35	34	33	黒色土
190	30	20	13	黒色土
191	32	30	9	黒色土
192	18	16	18	黒色土
193	26	20	10	黒色土
194	30	24	14	黒色土
195	41	33	31	黒色土
196	39	35	28	黒色土
197	31	25	29	黒色土
198	34	23	24	黒色土
199	31	27	31	黒色土
200	33	26	14	黒色土
201	44	41	29	黒色土
202	30	28	26	黒色土
203	27	26	18	黒色土
204	36	34	9	黒色土
205	30	26	29	黒色土
206	34	30	33	黒色土
207	57	41	6	黒色土
208	25	18	16	黒色土
209	32	29	9	黒色土
210	26	22	20	黒色土
211	24	20	9	黒色土
212	28	22	16	黒色土
213	30	24	11	黒色土
214	28	20	9	黒色土
215	26	20	7	黒色土
216	32	30	43	黒色土
217	25	23	18	黒色土
218	30	27	38	黒色土
219	38	30	32	黒色土
220	36	34	21	黒色土
221	30	26	26	黒色土
222	26	22	17	黒色土
223	34	28	26	黒色土
224	34	25	19	黒色土
225	38	27	19	黒色土
226	34	32	27	黒色土
227	30	16	30	黒色土
228	31	23	24	黒色土
229	28	25	23	黒色土
230	42	24	30	黒色土
231	39	24	22	黒色土
232	48	40	38	黒色土
233	19	10	28	黒色土
234	22	17	17	黒色土
235	26	20	16	黒色土
236	23	22	13	黒色土
237	30	20	19	黒色土
238	22	18	15	黒色土
239	16	12	12	黒色土
240	26	20	21	黒色土
241	21	18	24	黒色土
242	26	24	19	黒色土
243	28	17	15	黒色土
244	30	11	21	黒色土
245	42	24	25	黒色土
246	37	22	16	黒色土
247	28	26	27	黒色土
248	30	25	22	黒色土
249	32	18	19	黒色土
250	40	33	23	黒色土
251	22	21	19	黒色土
252	42	39	27	黒色土
253	22	18	26	黒色土
254	35	30	26	黒色土
255	38	36	33	黒色土
256	44	29	29	黒色土
257	37	33	31	黒色土
258	25	22	40	黒色土
259	30	27	29	黒色土
260	25	21	16	-
261	27	23	17	-
262	34	24	32	-
263	20	18	16	黒色土
264	20	18	11	黒色土
265	31	15	23	黒色土
266	18	14	13	黒色土
267	34	24	27	黒色土
268	22	20	30	黒色土
269	30	24	21	黒色土
270	16	14	22	黒色土
271	48	25	22	黒色土
272	28	20	17	黒色土
273	30	21	32	黒色土
274	20	17	13	黒色土
275	22	18	22	黒色土
276	30	28	22	黒色土
277	34	28	34	黒色土
278	26	24	21	黒色土
279	34	24	26	黒色土
280	32	26	15	黒色土
281	22	19	17	黒色土
282	20	16	15	黒色土
283	26	20	16	黒色土
284	32	28	13	黒色土
285	45	40	28	黒色土
286	68	60	20	黒色土
287	38	38	21	黒色土
288	46	41	21	黒色土
289	40	33	23	黒色土
290	45	41	19	黒色土
291	35	32	25	黒色土
292	36	30	17	黒色土
293	22	20	18	黒色土
294	25	23	16	黒色土
295	23	22	17	黒色土
296	28	25	19	黒色土
297	29	25	16	黒色土
298	71	43	12	黒色土
299	28	21	16	黒色土
300	34	29	32	黒色土
301	22	19	23	黒色土

No.	長径	短径	深さ	埋土色調
302	21	19	22	黒色土
303	28	27	33	黒色土
304	26	24	31	黒色土
305	26	24	26	黒色土
306	28	28	27	黒色土
307	25	24	9	黒色土
308	20	18	6	黒色土
309	28	24	20	黒色土
310	30	27	23	黒色土
311	20	17	11	黒色土
312	29	26	17	黒色土
313	21	18	25	黒色土
314	23	20	16	黒色土
315	25	20	18	黒色土
316	25	19	19	黒色土
317	21	19	12	黒色土
318	31	29	18	黒色土
319	30	26	18	黒色土
320	29	26	24	黒色土
321	18	15	15	黒色土
322	20	19	22	黒色土
323	28	20	21	黒色土
324	23	19	15	黒色土
325	20	20	22	黒色土
326	27	25	10	黒色土
327	30	27	11	黒色土
328	35	30	9	黒色土
329	20	18	10	黒色土
330	34	31	25	黒色土
331	40	30	20	黒色土
332	30	26	18	黒色土
333	25	21	13	黒色土
334	24	22	16	黒色土
335	32	27	12	黒色土
336	26	20	14	黒色土
337	29	27	22	黒色土
338	36	23	17	黒色土
339	27	26	18	黒色土
340	41	24	20	黒色土
341	48	21	36	黒色土
342	60	43	26	黒色土
343	60	36	28	黒色土
344	37	30	37	黒色土
345	22	18	19	黒色土
346	18	17	11	黒色土
347	38	30	25	黒色土
348	27	26	16	黒色土
349	36	30	24	黒色土
350	42	34	9	黒色土
351	36	35	23	黒色土
352	26	19	9	黒色土
353	36	25	30	黒色土
355	24	23	21	黒色土
356	24	22	21	黒色土
357	28	24	29	黒色土
358	29	20	19	黒色土
359	28	25	19	黒色土
360	30	24	12	黒色土
361	40	35	28	黒色土

No.	長径	短径	深さ	埋土色調
362	37	32	15	黒色土
363	32	28	26	黒色土
364	41	33	19	黒色土
365	24	22	15	黒色土
366	33	26	28	黒色土
367	38	33	29	黒色土
368	32	26	20	黒色土
369	34	27	20	黒色土
370	20	18	17	黒色土
371	30	27	25	黒色土
372	28	24	15	黒色土
373	23	28	24	黒色土
374	33	23	21	黒色土
375	31	23	22	黒色土
376	18	17	15	黒色土
377	22	16	14	黒色土
378	30	26	28	黒色土
379	40	20	19	黒色土
380	49	24	19	黒色土
381	24	21	17	黒色土
382	24	20	16	黒色土
383	28	22	17	黒色土
384	27	25	9	黒色土
385	20	19	11	黒色土
386	20	20	13	黒色土
387	30	28	26	黒色土
388	32	30	24	黒色土
389	20	20	16	黒色土
390	37	35	31	黒色土
391	23	22	21	黒色土
392	25	24	22	黒色土
393	25	24	22	黒色土
394	28	22	26	黒色土
395	36	30	22	黒色土
396	27	24	15	黒色土
397	18	15	10	黒色土
398	24	21	23	黒色土
399	21	17	16	黒色土
400	22	20	20	黒色土
401	21	20	19	黒色土
403	26	22	21	黒色土
402	26	24	17	黒色土
404	23	20	19	黒色土
405	57	32	16	黒色土
406	30	27	12	黒色土
407	29	27	28	黒色土
408	26	23	24	黒色土
409	21	19	8	黒色土
410	64	48	13	黒色土
411	27	23	20	黒色土
412	20	19	10	黒色土
413	24	20	12	黒色土
414	26	26	9	黒色土
415	26	23	9	黒色土
416	33	29	18	黒色土
417	18	17	9	黒色土
418	24	21	22	黒色土
419	32	28	26	黒色土
420	26	23	17	黒色土

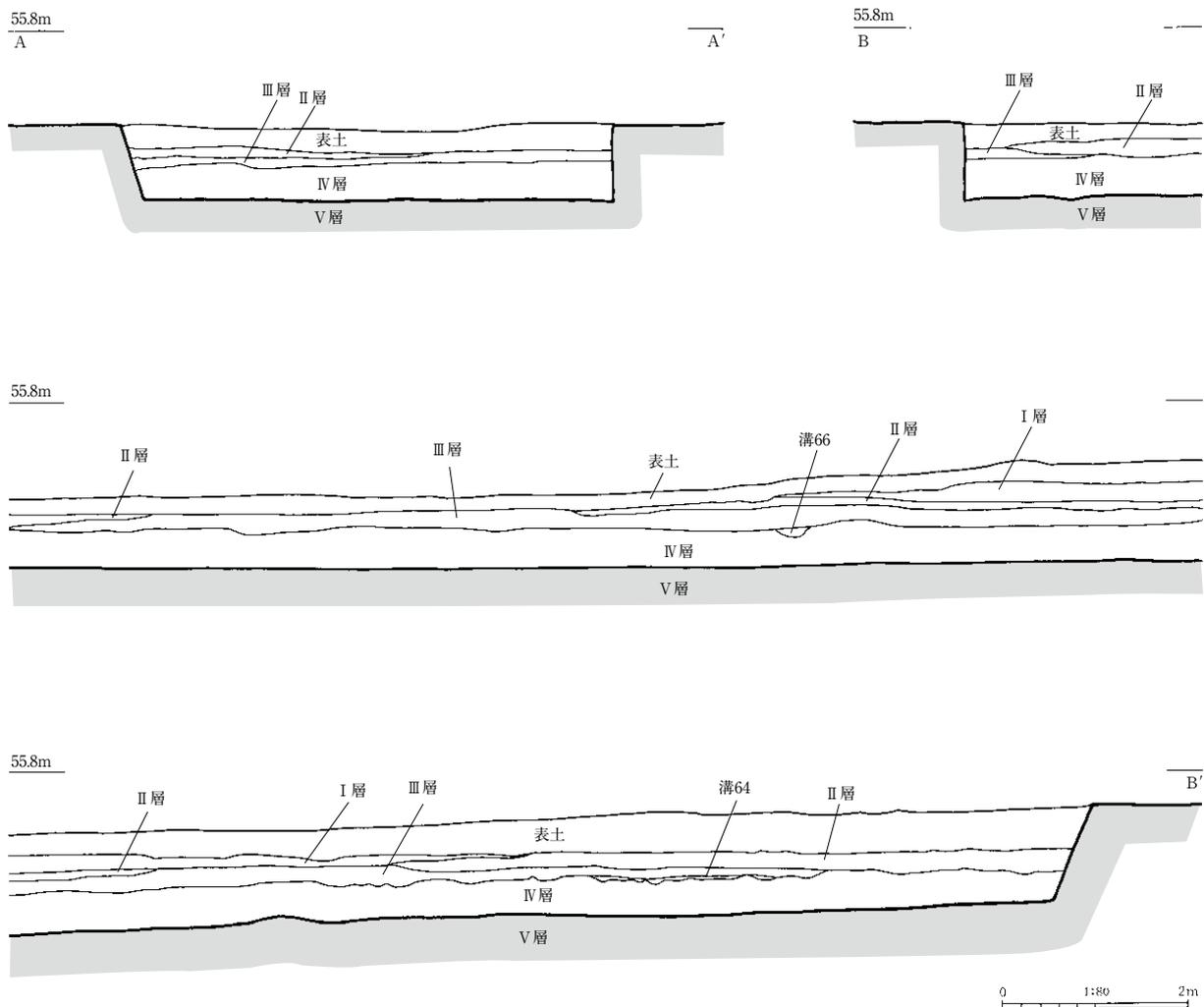
No.	長径	短径	深さ	埋土色調
421	34	28	27	黒色土
422	27	23	19	黒色土
423	19	18	12	黒色土
424	19	18	17	黒色土
425	24	23	14	黒色土
426	26	23	19	黒色土
427	42	33	27	黒色土
428	64	30	25	黒色土
429	21	18	20	黒色土
430	50	36	30	黒色土
431	38	27	26	黒色土
432	34	32	17	黒色土
433	22	21	15	黒色土
434	28	25	25	黒色土
435	36	34	24	黒色土
436	32	30	26	黒色土
437	24	20	16	黒色土
438	31	27	19	黒色土
439	38	33	26	黒色土
440	23	20	13	黒色土
441	39	22	10	黒色土
442	29	22	15	黒色土
443	44	37	16	黒色土
444	26	20	17	黒色土
445	21	18	19	黒色土
446	28	20	21	黒色土
447	42	34	27	黒色土
448	38	20	30	黒色土
449	36	30	23	黒色土
450	40	32	16	黒色土
451	113	50	10	黒色土
452	30	27	23	黒色土
453	36	31	28	黒色土
454	19	15	11	黒色土
455	18	16	15	黒色土
456	18	12	16	黒色土
457	18	16	13	黒色土
458	21	19	16	黒色土
459	59	54	18	黒色土
460	29	23	14	黒色土
461	45	27	28	黒色土
462	20	18	13	黒色土
463	24	18	21	黒色土
464	63	44	18	黒色土
465	28	24	15	黒色土
466	19	21	19	黒色土
467	20	19	13	黒色土
468	24	21	20	黒色土
469	30	25	17	黒色土
470	22	17	12	黒色土
471	25	19	14	黒色土
472	22	18	19	黒色土
473	19	18	17	黒色土
474	26	19	14	黒色土
475	20	19	13	黒色土
476	26	21	12	黒色土
477	20	18	18	黒色土
478	20	17	18	黒色土
479	27	24	10	黒色土

No.	長径	短径	深さ	埋土色調
480	30	28	19	黒色土
481	27	20	16	黒色土
482	39	30	35	黒色土
483	27	20	22	黒色土
484	27	25	18	黒色土
485	42	30	35	黒色土
486	20	18	11	黒色土
487	38	30	13	黒色土
488	25	22	21	黒色土
489	18	17	14	黒色土
490	30	21	26	黒色土
491	40	36	13	黒色土
492	48	34	13	黒色土
493	22	20	19	黒色土
494	36	34	22	黒色土
495	44	34	16	黒色土
496	45	36	11	黒色土
497	26	26	24	黒色土
498	31	27	18	黒色土
499	23	22	10	黒色土
500	24	22	25	黒色土
501	23	21	9	黒色土
502	103	82	23	黒色土
503	32	23	17	黒色土
504	34	30	19	黒色土
505	29	23	17	黒色土
506	23	21	21	黒色土
507	32	31	32	黒色土
508	20	18	16	黒色土
509	36	32	9	黒色土
510	28	23	35	黒色土
511	46	40	15	黒色土
512	33	30	20	黒色土
513	45	36	21	黒色土
514	31	29	18	黒色土
515	43	35	13	黒色土
516	30	27	29	黒色土
517	71	39	19	黒色土
518	32	29	16	黒色土
519	32	26	25	黒色土
520	30	28	26	黒色土
521	28	26	22	黒色土
522	50	43	22	黒色土
523	38	38	15	黒色土
524	48	41	26	黒色土
525	37	29	22	黒色土

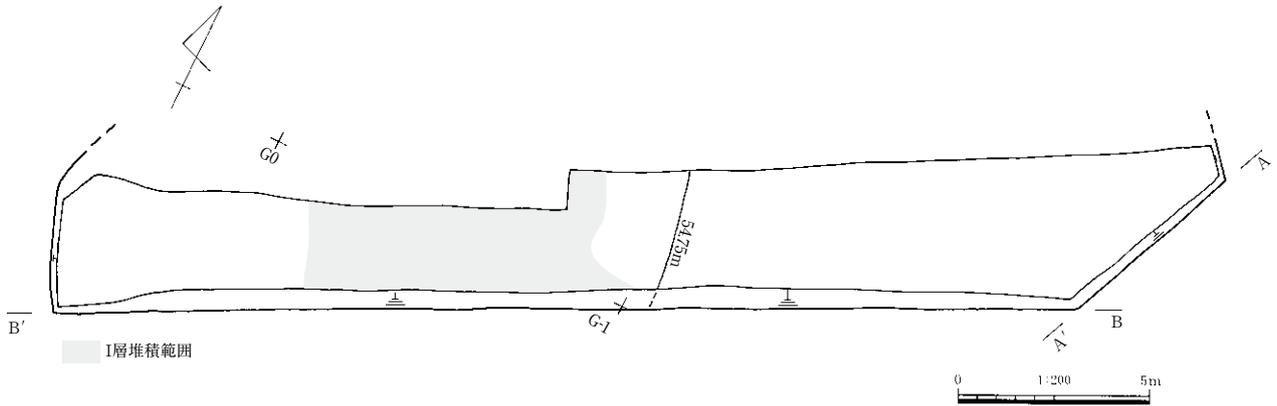
第4章 5区の調査

第1節 調査の概要

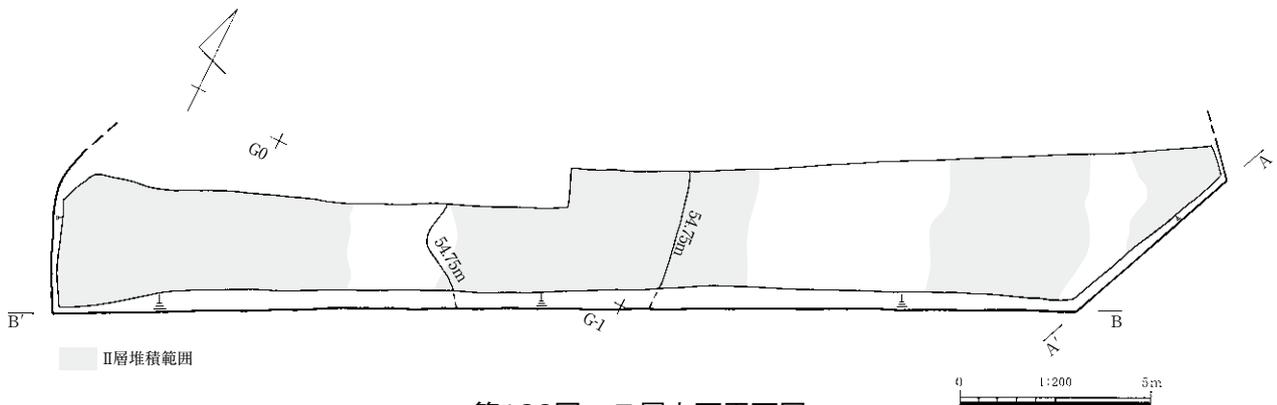
5区は本遺跡内で東側に位置する調査区（第1図）であり、その大半は平成15年度に（財）鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターにより調査が行われている。今回調査の対象とした範囲は、上述の平成15年度調査の際、遺跡周辺に位置する耕地への進入路確保のため、未調査となった5区南側の東西31m、南北4.5mの範囲である。さて本区の調査は前章で既述した4区の調査、ならびに平成15年度の5区調査成果より、複数の遺構確認面が存在することが予想されたことから、平面積139㎡と狭い範囲ではあったが、調査区の南側にトレンチを設定し、土層の堆積状況を確認した（第181図）。これによると確認された土層は5層で、いずれも4区内に堆積する土層と共通する。次節では各土層、検出遺構について詳述するが、あわせて平成15年度調査との対応関係にも触れたい。なお検出された遺構の番号は、平成15年度調査から継続して付した。また、地形は確認される各土層上面の比高差が調査区東西で30cmほどと西から東に向かって緩やかに傾斜した地形である。



第181図 5区土層断面図



第182図 I層上面平面図



第183図 II層上面平面図

第2節 I層の調査

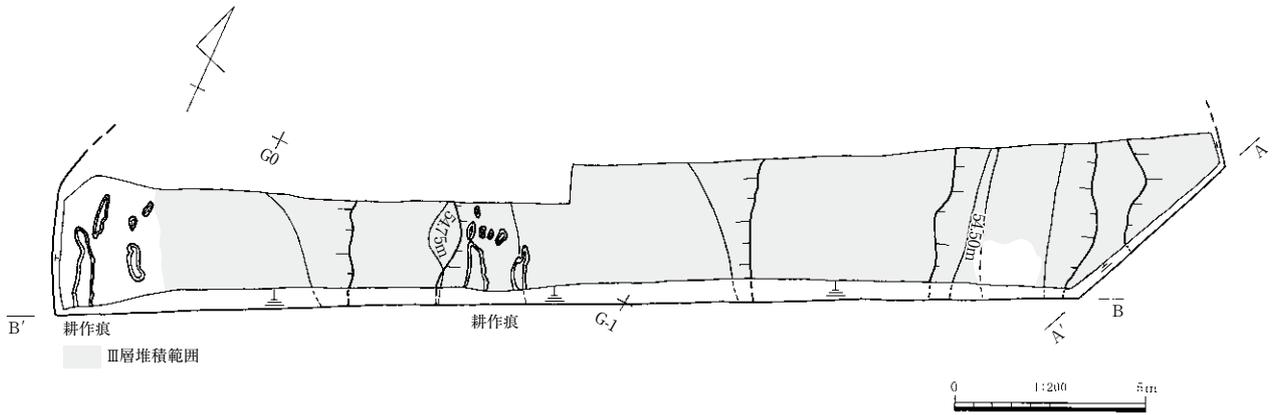
灰赤褐色土。表土除去後、調査区の中央、東西 10.2 m の範囲に厚さ 10 ～ 20cm で薄く堆積する。遺構は検出されなかった。4区調査において第1遺構面としたI層と同一の層であることから、近世耕作土と考えられる。平成15年度調査におけるII層に相当するものと思われる。(野口)

第3節 II層の調査

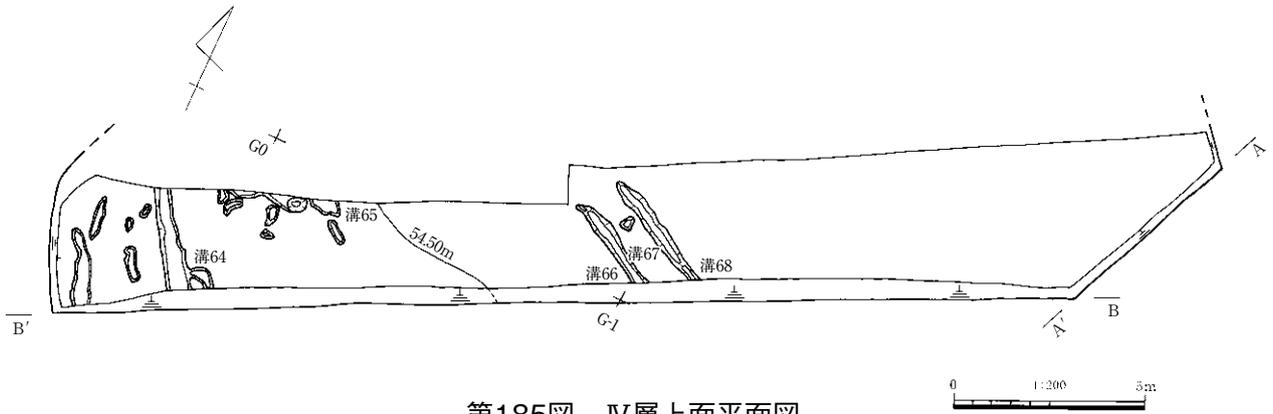
暗褐色土。表土およびI層の直下に位置する土層である。15世紀後半～16世紀ころの364が出土する。4区Ⅲ層、平成15年度調査Ⅲ層に対応し、4区においては本土層上面では主に近世耕作痕が、5区においては中世後期から近世の溝や土坑が確認される。本調査においては本土層上面での遺構は確認されなかったが、その堆積は下層に位置するⅢ層と平面縞状に認められる状況である(第183図)。4区の調査成果によると本土層は中世後半の耕作土と考えられることから、本調査区でのII層の堆積状況は中世後半に耕作が行われた範囲と考えられる。またⅢ層が縞状に隆起している状況は、調査範囲が限られたことから詳らかにできないが、畦など耕作が及ばなかった範囲の可能性はある。(野口)

第4節 Ⅲ層の調査

黒色土。第184図は、Ⅲ層上面の地形測量図ならびに遺構配置図である。調査区西側、及び東側の一部において本土層は堆積せず、下層のⅣ層が検出される。前述のII層除去後、耕作痕と思われる浅い溝状の遺構が確認された。本土層は4区Ⅳ層、平成15年度調査Ⅳ層に対応する。(野口)



第184図 III層上面平面図



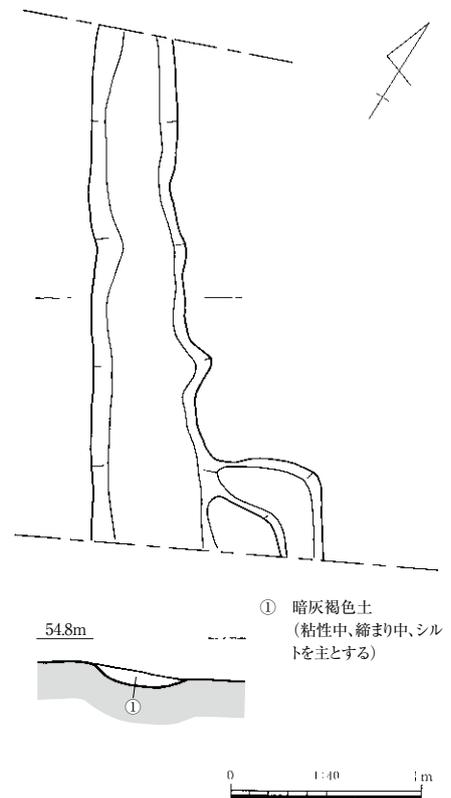
第185図 IV層上面平面図

耕作痕（第184図）

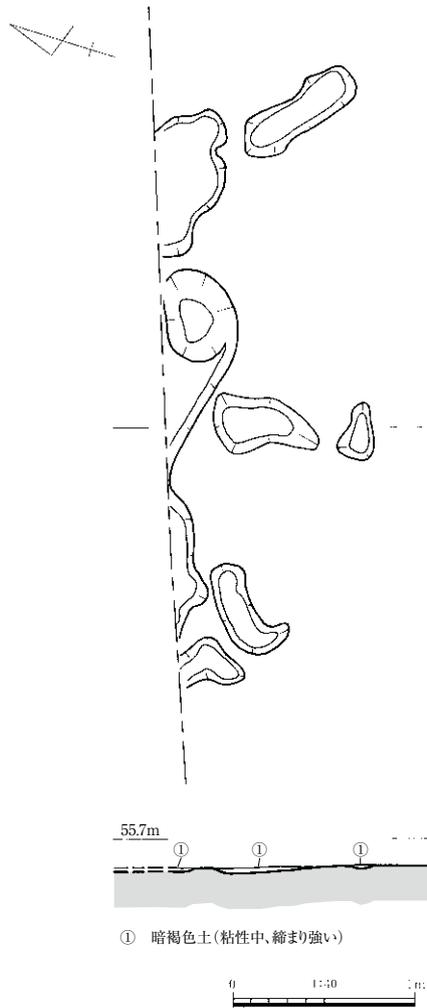
II層除去後、調査区中央と西側で耕作痕が確認された。西側のはIV層上面を確認面とするが、後述するように調査区中央の耕作痕と埋土や走向など共通することから同時期のものと考えられるため、あわせて報告する。調査区中央と西側で確認された耕作痕は、いずれも検出面からの深さは3～4cmほどで浅い。平面形は溝状、小穴状と一定にしないが、北西から南東方向に伸びる。埋土は耕作痕直上のII層（暗褐色土）が堆積する。

さて、本調査区で確認された耕作痕は、その検出層位や走向、埋土を同じくすることから4区における中世後半の耕作痕と同時期のものと判断されるが、平成15年度調査においては、同種の遺構は確認されていない。しかし、II層除去後に確認され、本地における条里との関係が考えられた溝状遺構が、遺構の深さや走向など本遺構と近く、耕作痕であった可能性が高い。

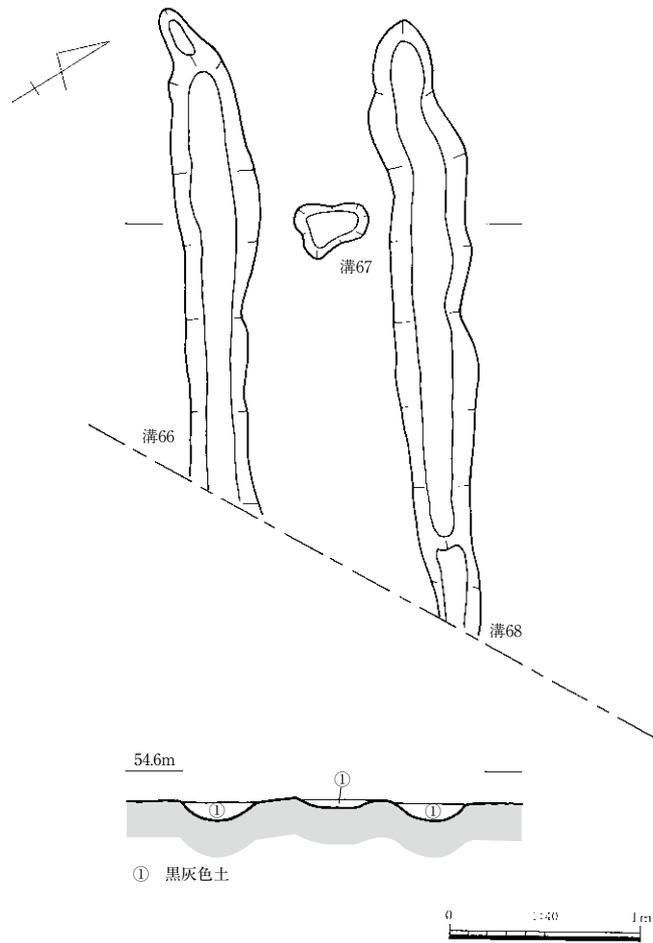
（野口）



第186図 溝64



第187図 溝65



第188図 溝66～68

第5節 IV層の調査

黒色土。4区VI層、平成15年度調査VI層にほぼ対応すると思われる。4区の調査においては本層上面から弥生から古墳時代の遺構が確認される。本地層に伴う遺構には溝状遺構が確認された。

(野口)

溝64 (第186図)

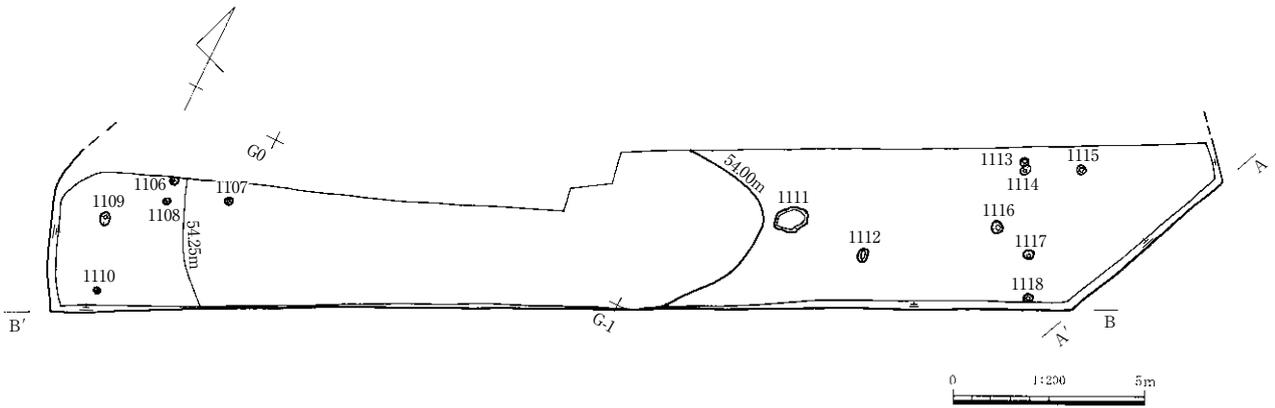
G0グリッドの北西側に位置する。検出された範囲では長さは約2.8m、幅40～66cmを測る。北西から南東方向にほぼ直線的に伸び、南側で「h」字状を呈する。検出面からの深さは北側が6cm、南側は4cmと北側に向かい深くなり、南側で「h」字状に接続する東側部分は検出面からの深さが3cmと非常に浅い。南北ともに調査区外へ伸びるが、溝64に続く溝は平成16年度の調査では検出されていない。

(小川)

溝65 (第187図)

溝64の東側に位置し、平面形は歪つである。いずれの埋土にも砂礫、シルトが混じることから溝の残骸と判断した。これらは一部10cmを測るところもあるが、大半が深さ約2cmと浅い。

(小川)

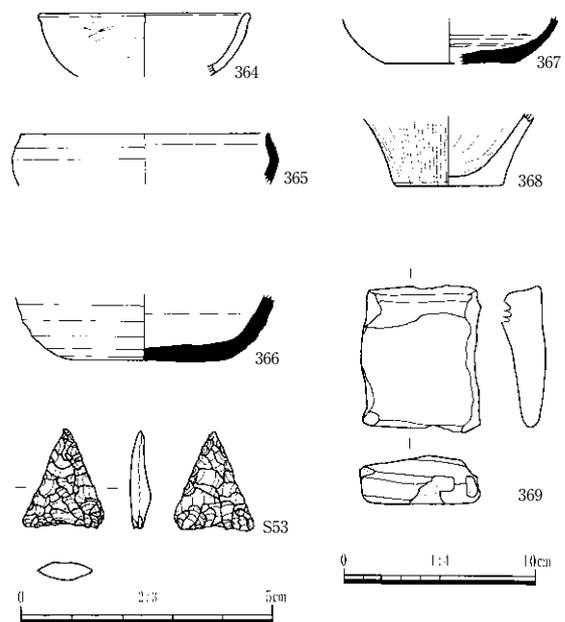


第189図 V層上面平面図

溝 66～68 (第 188 図)

F-2グリッド南東部に位置する。溝 67 の平面形は溝状を呈さないが、溝 66、溝 68 に挟まれ、埋土を同じくすることから、明確な関連性は不明であるがあわせて報告する。溝 66、溝 68 の 2 条はほぼ平行に並び北西から南東方向に伸びる。溝 66 は長さ 2.7 m、溝 68 は長さ 3.3m を測り、南側は調査区外へ伸びる。共に幅 40cm、深さ約 10cm とほぼ同じである。埋土はいずれも黒灰褐色土が堆積する。溝 67 は長さ 20cm、幅 38cm、深さ 4 cm を測る。出土遺物には溝 66 から奈良時代の須恵器坏 367 が出土している。

(小川)



第190図 5区出土遺物

第6節 V層の調査

明褐色土。漸移層である。本遺構面では調査区西側と東側でピットを 13 基検出した。(第 189 図、表 12) 多くは F-1 グリッドより東側に点在する。これらのピットは埋土が黒色土であることから、本来の確認面は IV 層中、もしくは IV 層上面であったと考えられる。

(小川)

表12 5区ピット一覧表 (計測単位: cm)

No.	長径	短径	深さ	埋土色調
1106	20	19	11	黒色土
1107	20	19	17	黒色土
1108	20	20	11	黒色土
1109	36	27	20	黒色土
1110	20	20	9	黒色土
1111	33	23	8	黒色土
1112	87	60	10	黒色土
1113	24	18	6	黒色土
1114	30	18	29	黒色土
1115	23	21	27	黒色土
1116	30	28	23	黒色土
1117	28	22	23	黒色土
1118	22	18	14	黒色土